忍道棒揩論和漢忍利證語抄 上

忍道様楷論和漢忍利證語抄　上

或問忍ヲ用ヒテ、合戦ノ勝利ヲ取ルベキ、其利徳ハ如何ホト有哉、　答忍ヒヲ用ヒテ、勝利ヲトル徳、廣大ニシテ、勝計スベカラズト雖トモ、先ツ、二十ノ大利有リ、　問、二十之大利可得聴、　答一ニ敵国之地形險易廣狭ヲ知ル徳、二ニ敵城之案内ヲ知ル徳、三ニ敵將ノ智愚ヲ知ル徳、四ニ

敵方ノ内輪ヲ離ツル徒。○五ニ降人反リ忠ノ者アラシムル徒。○六ニ敵ノ姿計進退、備ヘ無キヲ知ル徒。○七ニ敵將ヲ、コロス徒。○八ニ堅固ノ敵城、早速没落令ムル徒。○九ニ敵籠城ノ人數ノ煩痛セシムル徒。○十ニ十死之合戰ニ勝利ヲ得ル徒。○十一ニ天下ノ人民ヲ、味方ノ悉者トシテ、勝利ヲ得ル徒。○十二ニ敵ノ悉者ヲ、味方ノ城陣ヘ入オル徒。○十三ニ味方ノ戰ヒ、

利アラザル時、其威ヲ失ヒハズ、ニタビモ
リカヘス徒。○十四ニ味方ノ叛逆ヲ早ク
知ル徒。○十五ニ味方籠城ノ時、後詰ノ大
将ト立ヒニ通路ノ徒。○十六ニ治世ヲモ
乱ス利アリ、其理ヲ知ル則、乱レナカラン
ム徒。○十七周郡ノ廣キヲ地焼ノ時人數
ヲ不用シテ不残焼立ツル徒。○十八ニ焼
草ヲ不用シテ、軍相圖ノ狼煙早速高ク揚
ル徒。○十九ニ正夫ノ士ニシテ、大身ノ雖

寇ヲ討ツ徳ノ二十ニ身ノ脊ニ遘レガタキ時、其難ヲ遁ル、徳、是ナリ此ノ如ク其徳廣大ナルヲ以テ、孫子ニ同ク微ナル哉々々無所不用ノ間、亦明君賢將、所以動而勝ノ人成一功ヲ出ス於衆者先ノ知レバナリ也先知者不可取ノ人而知敵之情者也、五間俱起莫知其道、是謂ノ神紀ノ人君之寶也、コレ、兵ノ――要三軍所倚特ニテ――動也――ト云ヘル愚ノ將育將ハ、此理徳アル事ヲ不ト知レテ、之ヲ用ヒス故ニ、

不可取下
於鬼神不可驗事
不可驗於度以取於
十五字ヲ脱ス

孫子深敷云、相守ルコト数年、以一日之勝而愛ル
爵禄百金ヲ不ル知ハ敵情ニ者不仁之至ッ也、非人ノ之
将ニ也、非ニ主之佐ニ也、非ニ将之主也、ト重々コレ
ヲ戒ム、是朝ニテモ、明将ハ皆忍ヒヲ寶ト
ス、世ニ名ヲ知ラル程ノ大将ハ、忍計ヲ用
ヒサルハ、一人トシテ之ナキ也、
一〇問敵地ノ形ヲ知ツテ、味方勝利ノ徳ハ如
何、答ル、陣屋ヲカケ、或ヒハ備ヲ立ル
モ、兼テ、地ノ形、地ノ坪数ヲ知ツテ、時ニ味方人

數ノ積リトヲ合セ、分別セスレテハ成リ
カタシ、亦、城ヲ責、或ハ合戦シスルモ、其遠
キ地形ニヨッテ、術謀勝カハルコトナリ、
故ニ、地形ノ様ヲ知ルコト、計謀ノ根源
十リ、故ニ、将タル者兵之助也、料ノ敵
制ノ勝計險阨遠近、上将之道也、知此而用戦
者必勝不知之而用戦者必敗也ト云云、又
曰、不知山林險阻沮澤之形、不能行軍ト云
云、是ニヨッテ、明将ハ征伐ノ前方ニ、先ツ

忍者ヲ遣ヒ、敵國ノ地形ヲ、繪圖ニ寫
セ御覽アツテ、諸事御工夫アツテ、人數ヲ
立テ、備ヘヲ定メ、攻ロヲ考ヘ、始勝後戰ノ
理ヲ正クシテ、後出陣有ルニヨツテ、物ゴ
トニ行アタル事ナレ、謀コト調ヲ故ニ、勝
利疑ヒナキナリ、敵國ノ樣ニテハ、忍ヒ
ヲ用ヒテ、天下ノ按道ト路マテ、見セシメ
置故ニ、何地ノ合戰ニモ勝利アリ、於謂言
前定則不ㇾ跲（ツマヅカ）事、後定則不困、行前定則不疚、

道前定則不応所是思ヲ用ルノ徳ニアラス
也、

○問古ノ明将兼々敵國ノ地形ヲ、悉者ニ見
セレバ、合戦ノ勝利アリシ先縦アリヤ、
答、治承四年、頼朝伊豆ノ國ニアッテ、平
家ヲ亡スベキ陰謀ヲ運ラシ玉ヒケルガ、
先ツ、豊國ニ住ケル平家ノ一族、兼隆ヲ討
ント思ハレケルカ、彼、兼隆カ住ケル山木
ト云所ハ、広地竟ノ要害ニテ、前後ノ道、人馬

ヲ労スヘキト、見ヘケル故ニ、イカヽセン
ト思ハレケル処、頼朝ノ内ニ、邦道ト云者
アリ、兼隆ト中ヨカリケレハ、此邦道ヲ、兼
隆カモトヘ遣ハシ、数日逗留ハレノ、山木カ
城ノ案内ヲ見セレム、邦道ソカニ、彼地
形要害ヲ繪圖ニシテ、日ヲ歴テ、頼朝ノ本
トヘ帰リテ、是ヲ見セ奉レハ頼朝大ニ悦
ンテ、兵トモヲ招キ集メ、彼繪圖ヲシセ、諸
奉合戦ノ内談シテ後チ、山木ヘ出陣シ玉

ヒ、一戦ニ打勝チ、兼隆ヲ討レトナリ。
武田信玄ノ侍小山田兵衛尉心モ寺裏ヲ
攻取ラントテ、三年以前ヨリ、敵方ノ者
ヲ於ヘ置、敵地ノ様子ヲ聞ヒ、其上ニ、亦タ
忍者ヲ遣ハシテ、敵國ノ地形ヲ、絵圖ニセ
サセ取ソテ、席ヲ是ヲ見ル故ニ、自國ヨリ
モ、敵地ノ案内ヲ能ク知テ、年月合戦ノ工
夫ヲシ、サラ出陣シタリ合戦ノトキモ、悉
者ニハ、角取紙ノ、ワリ符ヲモタセテ、幾人

元、山林ニ隠レ遁キ敵ノ様子ヲ、晝夜ヲ云
ハス、兵衛尉ニ告知セタリ、加様ニ地利ヲ
能知リ、敵ノ進退変動ヲヨク知ッテ、手配
ヲ能シテ、戦ヒレニヨッテ、小山田方二百
騎ノ勢ヲ以テ、八王寺衆ノ三百騎ニ、即時
ニ計勝シト云ヒ、悦ビテ信玄ハ、征伐セン
ト思召ス歟ヘハ、三年モ前ヨリ、悉有ヲ遣
ハシ、敵地ノ絵図并内證ヲヨク、聞定メテ、
合戦ノ、談合ニ夫アリシト、甲陽軍鑑ニ見

ヘタリ、

○間敵國ノ地形ノ案内ヲ不知シテ、合戦ノ勝利ヲ失ヒヤスシ先縦アリ、昔漢ノ武帝ノ時大將軍衛青ト云モノ、匈奴ヲ攻ケル時、李廣ト云者モ、先陣ノ大將ニテ、衛青ニ相隨ヒケルカ、大將ノ下知ニテ、李廣ハ道ヨリ行ケルニ、其地ノ案内ヲ不知シテ道ニ迷ヒテ、其合戦ニ手ニ不合ケレハ、後大將軍ヨリ糺明ノ時、其手ニ不合事ヲ

恥テ、李廣自害シテ死ケリ。是忠ヒヲ不ル用
シテ、地形ヲ知ラザル禍ヒニアラスヤ。
二ノ問忠ヒヲ用ヒテ、敵城ノ案内ヲ知リ、味方
勝利ノ徳ト云フハ如何。答忠ヒヲ用ヒ
テ敵城ノ案内ヲ能ク知リ、且ツ、籠ル所ノ
人數ノ分限、兵粮ノ多少、河水ノ様子ナト
能知ルトキハ、ソレニ相応ノ計謀ヲ以テ、
攻ルニヨツテ、味方越度ナク、其城ヲ攻落
スコト疑ヒナシ、是忠ヒヲ用ル徳ナリ。

間ヲ忍ヲ用ヒテ、敵城ノ案内ヲ知リ、城ヲ落シタル先蹤アリヤ、答河内國赤坂ノ城ハ元来楠正成取立ノ城ナリ、往年六波羅、関東ノ大軍ニ攻ラレシ時、正成謀ヲ以テ、赤坂ヲ立去リシニヨリテ、其城ヲ、湯浅孫六入道ヘ預リ居タリ、其後正成ハ、大和國金剛山ノ奥観心寺ト云所ニ隠レ居タリ、即徒五百人、大和河内、紀伊ノ山中所々ニ、打散リテ隠レ遁ケリ、其頃大塔宮、

吉野ニ一城ヲ構ヘ、御陣ヲ召レケリ、去ルニヨツテ、正成家子郎徒ヲ集メ内々用意シ、討テ出ントス思ヘリ、然レ共案内ヲモ不知、他領ノ合戦ラセンヨリハ、家子郎徒マテ、能ク案内ヲ知リタル、赤坂ノ城ヲ攻ハ勝利アラン、然ラハ、味方ノ威ヲヨクナル道理ナレハ、先ツ、赤坂ヲ攻ンニハ不ルカト思ヒケリ、サレ共、湯浅屋住ノ後、イカヤウノ要害ヲ仕置タルヲ不知、籠ル所ノ人数ノ

今恨ヲ知ラズ、庸以テ、忍ヲ入テ、ヨク、見ラ
ン、セントテ、遠物ノ忍者ヲ遣ハシ、城中ノ
様子ヲ見セシメケリ、忍者帰ツテ、城内ノ
様ヨ、有リノ侭ニ正成ニ語ル、正成ハ思慮
アカキモノナリケレハ、猶今一往ヨク見
ラレンセントテ、恩地左近太郎ヲ、忍者ニ交
ヘテ指遣ハス、恩地謀コトアルモノ成ケ
レハ、一ツノ計ヲナシテ、白昼ニ城中ニ入
テ、城ノヤウス人数ノ今恨、思ヲ侭ニ見テ

帰リケリ。正成之レニ叫、右忠者ノ云シニ
違ハズ。サラハ、疑フ可キニアラストテ、元
弘三年四月二日ニ、観心寺ヲ立ツテ、三日
ノ卯ノ刻ニ、五百余騎ニテ赤坂ヘ寄タリ、
湯浅カ勢ト、正成カ勢ト、對カノ勢ナリト
云ヒ、正成謀コトヲ以テ、勢ヲ寡ク見セ、
湯浅、城ヨリ出テ戦フヤウニ、桃ニケレ共、
湯浅モ思慮アル者ニテ、出テ不レ戦半ノ刻
ニナリケレハ、正成一里余リ引退キテ、廣

野ノ中ニ小高キ山ノ、敵ヨセ来ル民、防ク
ニ便リアル所ノ有ケレハ、公爰ニ一夜陣ヲ
取ス、明レハ同月、マタ卯ノ刻ニ、赤坂ノ城
ニ入レ置タル、正成カ忍有来ツテ、正成、
告ケルハ、城中兵粮乏シキニヨツテ、紀伊
國河瀬ヨリ、兵粮ヲ取ヨセ候、然ニテ大勢
ヲ、河瀬ヘ遣ハレ候ト云ケレハ、正成去ル
事モコワアレトテ、和田足地安間高安寺
ヲ始トシテ、宗徒ノ勇士三百余人ヲ、紀伊

ト河内ノ境ヒナル、水ノ月峠ヘサシ遣ハス、同ク七日夜半ハカリニ、湯浅カ兵士等三百余人、兵粮ヲ馬ニ負セ、赤坂ニ夏テ、水月峠ヲ越ケル処ヲ、私田恩地三百余騎ハ殊ニシテ、百騎咄ト、カケ出ケレハ、湯浅カ郎徒、馬ヲステ、堺ニ夏タル米ヲ捨テ外辺ニケリ、楠カ郎徒能ト追ザリケリ、其故ハ三百余騎備ヘヲ乱レテ追ハンニ、若シ、功ナル兵カケヌケテ、赤坂ノ城ヘ入リテ、此由ヲ知

テセハ、後ノ謀コト成カタキ故ニ、一人モ
通スマレキ為ナリ、前十二取ケルトカヤ、
和田思地其夜ノ中ニ帰リテ、件ノ様ヲ
ヲ楠ニ告ル、楠是ヲ聞テ、云クスハ城ハ落
レタルソ、一術センストテ、俄ニ平胃ヲ入レ、
ソレヲ馬ニツケ、或ハ士卒ニ荷ハセ、ヲイ
テサセテ、渭津カ郎徒ノ兵粮ヲ取リ帰ク
レ者ヒノ躰ニ似セテ、明レハ八月、マダ卯
ノ刻ニ赤ノモノヒラ、城ヘ入ラントサセ、

楠是ヲ討テ、件ケ入リニ、城へ入ラントス
ル躰ニ見セケレハ、湯浅是ヲ見テ、サテハ。
我カ士卒ノ河瀬ヨリ、兵粮取リ帰ルヲ、楠
討ツソト心得テ、急キ城戸ヲヒラキ、彼ノ
似セ者ヲ城中ヘ入レテ、楠カ勢ヲ追拂ハ
ント、ヒレメキケリ、爰ニ、城中ヘ入リレ
楠カ郎徒トモ、俵ノ中ヨリ、弓鉾ヲ取出シ、
ヒレくトカタメ、ヲメキ叫ヒテ、湯浅カ勢
ヲ、突伏セ切伏戦ヒケレハ、楠ハ外ヨリ発

ラ先途ト攻作タリ、コレニヨツテ、渦冰勢イ
盡――力屈シテ叶ハズ、甲トヲヌキ、降
參シケリ、赤坂ノ城ハ、楠取立ニテ、案内能
知リタルサヘ、如是重々迷ヒヲ用ユ、況ヤ
不案内ナル、他國他領ノ城ヲ攻ンニハ、專
ハラ心ヲ、用ルコトヲ知ルベシ
三〇問、敵ノ智愚ヲ知ル候ト云ハ如何、答曰
ヘハ、兵法ハ轉變ノ如シ、ワレ轉變ノ上手
タリト云ヘバ、相手(二字アリ)ノ住ヲ不知ハ妄リニ打

カタキカ如レ、故ニ孫子ニモ天地（道）將法ノ、
五ツノ事ヲ以テ、味方ヲ能慥（タシカ）ニ治メテ後、敵
ト味方ト、七ツノ、タテクラヘヲ（アラカレ）シテ、識ノ
勝負ヲ察レ、必定、味方ノ勝千ニ校メタル
時、出陣セヨトアリ、是ヲ七計ト云、亦和朝
ノ兵法ニモ、先ツ大關（關）ヲ破（ヤブ）ル柳ノ、五敵
ノ位ヲ、辨マヘ定メテ後、其敵ニツリアイ
タル、謀マトヲ定テ之ヲ討コト、兵法ノ定
法也、是故ニ兵法ニ、先ツ忍ヒヲ用テ、敵將

ノ知恩剛膽ノ差別其逸ヲ好ム道軍法之正不正其物頭物奉行ノ様ヲ其家中ノ風俗人數ノ多少試ニ隣國ノ疲ノ有無其外諸事性質ヲ知ツテ後敵將ノ好ム一所ニ応シ、計策ラナシ、敵ト味方ヲ、タテクラヘレテ、必定勝チニ独テ出陣シテ、敵ノ智恩剛膽軍法ノ正不正ノ位ニ順フテ、味方轉変シテ戰フトキハ、勝利ナキトキ之事ナシ、其根元ハ、忍ヲ用ユル所ハ徳ニアラス哉

○開敵ノ智恩剛腹等ヲ知テ戰勝利ヲ得タル證據アリ哉、答両大波羅ヨリ阿田高橋ノ両將ニ五千余騎ヲ相添、楠正成ヲ追討ノタメ、住吉天王寺ヘ差向ヲ、楠ハ元来勇氣智謀兼備レタル大將ナレハ、浴世ノ時ヨリ、天下諸大將ノ賢愚ヲ知ルト雖ヒ、乱世ニナリシヨリ席ニ京都ニ又、忠者ヲ三於人ヲ、遣テ、諸事詳カニ知リレカハ、阿田高橋カ愚ナルヲ知テ、二千余騎ヲ三

手ニ分ケ、一手ハ天王寺ニ陣シ一手
ハ住吉ニ伏セ置テ、僅カニ三百余騎ヲ出
シテ片ク、湯田高橋敵ノ小勢ヲ見アナト
ツテ、渡辺ノ河ヲ渡リ討テカヽル、楠カ勢、
兼テ巧ミシヲトナレハ、一戦ニモ不レ及引
退ソク、湯田高橋、カツニノツテ追掛タリ、
楠、敵ノ人馬ヲツカラカシ、思フ壺ニ引カ
ケ、三手ノ勢ヲ方ヨウ取廻シケレハ、湯田
高橋トリコメラレテハ叶ハシトテ引退ク

処ヲ、軍法ヲ不ト乱、正成レツレソト退カケ、
渡邊ノ川ノ邊ニテハ、急ニ攻カヽリレカ
ハ、渕ヨリ高橋ノ勢、或ヒハ討レ、或ハ水ニ溺
レテ、大半死ス、京都ヘ逃登リタリ、是楠敵
将ノ慮ヲ知ツテ如ヒ此ナリ、其後六波羅ヨ
リ童ヲテ学津底公綱ヲ、楠カ討手ニ指遣
ハス、公綱手勢僅カニ、五百余騎ニテ打向
ヒ、搆ヲ、柱松一ヲ竹ヽツク、其時、和田淵三
郎正成ニ向テ云ケルハ、公綱勢僅カニ、六

七百騎ニハ過候ハジ。先キニ、陽国高橋ガ、五千余騎ニテ、味方ノ勢ニテ追散シ候。今度ハ味方勝ツニ乗テ大勢ナリ、敵ハ、機ヲ失ナフテ小勢ナリ、漸々以テ、味方ノ勝利疑ヒナシ、今夜午過寄セニメ、打チラレ候ヘルト云ケレハ、正成斬ラク紫ビテ云ケルハ、合戦ノ勝負ハ、大勢ノ多少ニヨラス、唯士卒ノ志ザシニスルトセ、サルトナリ、先度ノ軍ニ、陽国高橋大勢ニテ打

頁引退キタル跡ヘ、僅カノ勢ニテ、宇津宮
相向フ志サン、一人モ生テハカヘラシト
可思、其上宇津宮ハ、キコユル猛将ナリ、七
百余騎、志サレラ一ニノ進マンニ、味方相
向フテ戦ハヽ、縦ヒ勝トモ云ヒ、当手ノ兵、大
半ウタルヘシ、天下ノ事全ク、此度ノ戦ヒ
ニヨルヘカラス、又味方ヲヽ、初度ノ戦ヒニ
ウタセテハ、後日ノ戦ヒニ、誰カカヲ可合
トテ、天王寺ヲ引退キケリ、四五日アツテ、

楠敵ニ大勢ナリト見センタメニ、野伏兵
ヲ、四五千人馳集メ、勇士ニ三百騎サレ添、
四方ノ峯々ニカヽリシタカセ、兩三夜ニ
及ヒ次第ニ相近ツキケレハ、宇津宮勇気
ツカレテ、偖カノ勢ニテ、アノ大敵ニアタ
テンコト、不レ可叶トテ、天王寺ヲ立退キテ
上洛ス、是楠カ、宇津宮カ勇猛ヲ知テ不戦
レテ勝ヲ取ル軍法、完ク本ヲ知ルニアラス
ヤ、

○漢朝ニテ、後魏ノ大武ト云人、宋ノ臧質ト云モノ、籠リシ、肝胎ノ城ヲ攻シ時、臧質、大武ノ智恩ヲ、察計ヲ以テ、闇タルニ、大武ハ大キニ、疑慮ナル、腹悪キ人トヽキコヘケレハ、イカラセテ、無理ナル、働キヲサセテ、計ントト計ワテ、臧質、降参セントスヽテ使ヲ遣ハシ、樽ニ小便ヲ入、酒ナリトスヽテヲクリケリ、大武、小便ヲスヽクリタルト知ルヨリ、安ノ如ク大キニ念ワテ、城ヲ攻落シテ、

城質ヲ生捕ラズンハ、生テカヘルヘカラ
スト、士卒ニ下知シテ、蟻ノ垣ヲ為ルカ如
クノホリノホリ城ヲ攻ム、城中ニハ、等テ
朝シタル事ナレハ、爰ヲ先途ト防キケレ
ハ、大武ノ士卒大半討レテ、戸堀ヲ埋メタ
リ、サレ共、大武城ヲ攻落サスンハ、一足モ
引ヘカラスト下知ニヨツテ、新手ヲ入替
ヘ〳〵ニ攻ケレ共、要害ヨカリケレハ、終ニ攻
落スコト、ナラサルノミニアラズ、残ル勢

大ニ敗軍シテ、千リ行クニ、路行タリト云ヘ、是太武ノ、忿リ強キ人ヲ知ツテ、臧質カ謀リシ所ナリ、其外、敵ノ心ニヨツテ、色々ノ謀略ヲナシ、勝利ヲトリシコト、和漢其タグヒナシ、先ツ其一ニヲ記ス、

○間味方ノ恐ヒラ不用トス、此、敵國ノ事ヲ能知リタル者ニ、席々ヨリ問ヒ、又ハ其時ニ至ツテモトヨリ、或ハ捕者ニ問ナトセハ、敵方ノ事知ルヘキナリ、然ルニ、味方ノ恐

者ナラテハ、敵方ノ事ヲ、聞コト不成ヤウニ言ハ、何ト云フ事ソヤ、答敵方ヨリ、色々ノ者ニ妖ケサセテ、忍者ヲ指越シ、イツハリヲ云ハセンモ不知、捕者モ、真実ヲ云ヘキモ、云マレキモ不知事ナリ、常ノ時モ、又合戦ニ及テモ、敵國ノ者、或ハ、捕者ナントニトワテ、ソレヲ実ト心得、生死ノ合戦ノ、謀ニトラナスコトハ、大ニ危キ事、愚ナル事ナリ、

問敵方ノ内輪ヲ、隣ワル徳ト云ハ如何

答、悪ヒラ周ヒテ、敵ノ君臣ノ中ヲ悪クシテ、中絶スルヤウニシ、或ハ、敵ノ謀臣ヲ、敵将殺スヤウニ計リ、亦ハ、敵ノ軍勢、互ヒニ疑ヒ合テ、一味スルコトナキヤウニシ、或ハ隣国ノ大名ト、敵ノ将ト、中悪ク成ヤウニシ、自ラ、敵勢ノ衰ルヤウニスルヲ、敵方ノ内輪ヲ、隣ワルト云ヒ、又ハ是ヲ時ハカラヒ周ルコト寡フ大勝利疑ヒナク、コ

レ悉ク用エルノ徒ナリ、

○問古ノ人、敵ノ内輪ヲ聞ラワリテ、勝利アリシ先蹤アリヤ、答、駿河國今川義元ノ幕下ニテ、戸部新左ヱ門ト云モノ有リ、此者賢キ者ニシテ而モ義元ヱ二心少シモナシ、手跡モ人ニ勝レタリ、笠寺ニ在城シテ、尾州ノ様ヲ見スカシテハ、義元ヘ注進ス、諸事一義元ヘ二心ナク、忠義ヲ盡シケリ、信長公年来、義元ヲ恩忘ケ

レ氏、此戸部カ有シカキハ不叶ト思召、
手跡ヲヨク似スル事ハ器用ナルモノニ、
彼ノ戸部カ手跡ヲ一年余リ習ハセラレ
ケルニ、後ニハ少シモマカハズ似セタリ、
是ニ於テ新左ヱ門義元ニ逆心ノ状ヲ思
フ侭ニ書認ノサセ、織田上総殿ヘ戸部
新左ヱ門ト上書シテ、森三左衛門ト云、無
二ノ侍ヲ商人ニ出タ、セ、彼状ヲモタセ
テ、駿河ヘ被遣ケリ、マカフベクモナク、戸

部カ手跡ナリケレハ、義元大キニ念ツニ、
彼ノ新左ニ門ラ召レケリ、何心モナク来
リケルヲ、駿河マテ入ルニ不及トテ、三
又吉田ニテ誅セラレケリ、信長思フマヽ
ニナリレカハ、ソコニテ義元ヘ信長、敵ノ
色ヲ立テレケレハ義元大軍ヲ引卒レテ、
尾及ヘ出張セラル、信長モ出向ニ義元ノ
不意ニカ、ツテ討大利ヲ得義元ノ首ヲ
取リレナリ、

○山名禅高ノ内ニ、山中麻之助トテ、文武ニ
達セシモノアリ、毛利元就、彼禅高ヲセン
タリ、思ハレケレバ、麻之助ト禅高ト一味
ノ中ハ、禅高ヲ討ツマト雖ドモ、何ト
ソシテ、麻之助ト禅高ノ中ヲ、隔ツラハヤ
ト元就思ヒケリ、其頃大友ト、禅高入魂ナ
リケレハ、何ト太カス共、元就ニ大友不レ与
コトヲハ、元就シリナカラ、イツトナリ、大
友ヘ音信ヲ通ジ、子ヲ乞セラレ給リ候ヘト、

云遣ハレケリ、大友元来、禅高ト入魂不浅
ケレハ元就ト一味セントハ、心底ニハ不
思トモ、上部ハカリニテ、結構ヲ盡ト居タ
リ、アルトキ、元就ヨリ大友へ、使ヲ以テ云
遣レケルハ、近々ニ、禅高ヲ討ントト思ヒ立
候、日頃申通スルトヲリ、御加勢頼ミ入ノ
旨堂ヒ本解タル様ニイハセ、其上ニテ使
者私語ニテ云ケルハ、禅高ヲヒセサンコト、
當手ノ中ニ在リ、御心ヲ安ンセラルヘシト其

子細ハ山中麻之介、味方ト一味イタシ、味
方禅高ヲ攻ントキ、裏切リセントノ密議、
堅ク相調ヒ候、此事深キ隠密ナリ、相カマ
ヘテ、親シキ輩タリトモ、語リ玉フコトナ
カレト、童々制シテ、使者ハ帰リケリ、爰者
ノ家老此事ヲ大友ニ告タリ、大友元来禅
高ト厚キ入魂ナレハ、ナニカハ元就ニ同
意スヘキ、委細禅高ニ告知セケリ、禅高是
真ト心得テ、ソレヨリ麻之助ヲ不用、於是、

元就折リヲ得テ、裨高ヲ討テ、大利ヲ得タリト云ヒ、漢ノ高祖ト、楚ノ項羽トハ、數年相闘フトキ、項羽ノ臣ニ、范增ト云フ明將アルニヨリテ、軈ヶ度毎ニ高祖負タリ、或時高祖陣卒ニ令レテ、忍ビ〳〵ニ、楚國ノ兵士ニ、金數万斤ヲアタヘテ、項羽ニ云レメケルハ、楚國ノ大將ニ、度々ノ軍功アレ共、恩賞ノ少ナキ事ヲウラミ、潜カニ、漢ト盟々通レテ、項羽ヲ亡シ、一城一國ノ主トナ

ラント、巧ムヨシヲ言セケレハ、項羽是ヲ
聞テ、諸大将ヲ従ヘ、其後項羽ヨリ、高祖ノ
方ヘ、使者来リタル時、陳平結構ナル振舞
ヲ調ヘ、彼使者ノ馳走スルコト甚シク
有ツテ、陳平ハカニ驚キタル躰ニテ、先ノ
珍膳ヲハ取入レ、麁相ナル食物ヲ供ヘニテ
彼使者ノ聞ヤウニ、次ノ間ニテ云ケルハ、
今マテハ、汚濁ヨリノ使者カト思ヒシニ、
項羽ヨリノ使者ナリ、愚カナル事ヲモシ

ル者カナト云ケレハ使者帰ツテ此由
項羽ニ語リシカハ、項羽イヨ〳〵沛ヲ疑
ヒ、高祖ト件通ノ美必定ナリト思フテ用
ルコトナカリシカハ范増大ニ怒ツテ人ヲ
マラヘケレ共、項羽タヤスク服マヲ出サ
レタリ、ソレヨリ彭城ト云所ヘ行シカ行
ツカス大疱ヲ煩ヒテ死ス、ソレヨリ項羽
カ勢ニ衰ヘ終ニ高祖ニ打負ヒタリ
ト云云、又戦国ノ時秦ヨリ斉ヲ討ント

計リケレバ、齊ト楚ト中ヨカリケレハ、討コト成カタク、其時秦ノ張儀ト云者、楚國ニ行テツカフ、或時張義楚王ニ云ケルハ、今齊ト交リラタチ玉ハヽ、我秦ニユキテ、六万里ノ地ヲ楚ヘ献レ、秦ノ娘ヲ楚ヘ嫁セン、然ラハ、秦ト楚ト、長クヨレシノ國タラン、如此セハ楚弥々強クレテ、謀コトヲナスニ便リアラントテ、楚王コレニ隨ヒ悦ンテ、一人ノ使者ヲ張儀ニ添テ、秦ヘ遣

ヒ。秦ノ女ニ、六万里ノ地ヲ相ソヘ越サ
ハ、齊ト交リヲ断チ、永ク、秦トヨシミヲ厚ク、
入魂セントスレハ、秦詐ツテ同心シ、其約
ヲ堅フスル、ヨリ、秦王張義ト云合セ、楚王
ヲ、タハカリシ事ナレハ、秦、後ニ其約ヲ変
レハ、又モ地ヲモアタヘサリシカハ、楚王大
ニ怒ツテ、秦ヲ討ントス、愚ヒヨツトスルヘ共、
一旦斉王ト、交リヲ断タルコトナレハ、今
更、齊ヘ赦ヒラ、請フコトハ成ラス楚王少

勢ニテ秦ト戦フヤ秦ハ、兼テ巧ミニレコトナレハ引請戦ワテ、大ニ勝チ、楚ノ國ヲトリタリ、是、楚ト齊トノ交リヲ絶テ、勝利ヲ得タリ、其外、歌ノ内輪ヲ隔テ、後道勝利アリレコト、和漢タメレタレト云、尼事多シカ故ニ其一ニヲ記ス、

五〇 閑降人及忠ノモノ、アラレムル條ト云、六輪ニモ、身ハ内ニレテ情ハ外ナル國將害ヲ生ストアリ、其條ハ知レタルコトナリ、然

レ反。イカニシテ、敵方ノモノヲ降人ニナシ、反忠サスル計、答敵方ノ者ヲ降人トナシ、反忠サスル術ハ、甚深ノ理トイヘドモ、古人ノナシタル術ヲ略記スベシ。治承四年、頼朝関東ヲ打随ヘケル時、佐竹秀義ハカリ、帯陸國金砂(カナリ)ノ城ニ楯籠リテ、頼朝ニ随ハズ。頼朝大勢ヲ以テ、攻ラレケルガ、要害ヨクシテ、容易ク手ニウタルヽ者タヘテ、終ニ不落城其

（宇ノ上ニ多ノ二字ヲ脱ス）

時上総介廣常、頼朝ニ申ケルハ秀義カ伯
父佐竹藏人ト云モノアリ、欲心深キ者ナ
リ、重キ恩賞ヲ可レ給ノ条、謀コトヲ違ラレ、
秀義ヲ討可レト宣ヒ遣ハサレ候ヘト申
ス、朝頼其義ニ隨カヒ、則廣常ヲ使トシテ、
忍ヒヤカニ藏人カ本ニ遣ハレ、秀義ヲ討
ハ、彼レカ所領、コトゴトクアタヘント云遣
ハサル、藏人大キニ悦テ、反リ忠ヲシ、廣常
ト反ニ、兵ラヒキヒテ、城ノ後口ヘマハリ、

前後ヨリ攻ケレハ、秀義不叶ノ城ヲ落、退
去シタリト云ヘ、義経、八嶋ヲ破ツテ、平
家ヲ追落シテ後、伊勢三郎義盛ヲ召ス、平
家ノ侍内成通カ、伊豫ノ國ヨリ、歸地ヘ
来ル由聞エ、汝行テ、コレラヘテ見ヨトテ
リケレハ義盛先ツ下臈ヲ一人仕立簑笠
ヲキセ先キヲ行テ、成通ニ云ハンハ、平家
皆ク滅セレ、成通カ父成長ハ降人ニナリ
タリト告ベシト、云含メ遣ハス、下臈イソ

キ行程ニ成直ニアイヌ、成直ハ八嶋ノ事
如何ト思ヒ、下脇ニイツクヘト問ハ、八島ヨ
リ伝諒ヘトヨフ、八嶋ノコトハイカニト
問ケレハ、義盛カ教ヘノ如クニ於是成直
心ヨハクナリテ、思ヒケルハ、父カ降人ニ
ナリタルハ、今一度我ヲ見シタメカ、但シ
下脇ノ一説、信スルニ不足トテ打過ケル
所ニ、義盛行向ヒテニケルハ、平家委々ク
七ヒヌ、汝、今一度父ヲ見ン、命ヲタスカラン

ト思ハヽ、降参セヨト云ケレハ、成直則チ降人ニナリタリト、云云、亦義経勝浦ニ着玉ヒシ時、敵百騎計リアリケルヲヽ義盛只一騎行向テ、イカヽ云タリケン、其将、坂西迫藤大親家ト云、者ヲ、降人ニナシ、義経ノ御前ヽ連来レリト云云、委クハ平家物語ニアリ、又織田信長、甲州武田勝頼ヲ討ニアリ、又織田信長、甲州武田勝頼ヲ討ヒシカタノヽ、潜カニ、思者ヲ、勝ヨリノヽ使ヲ以テ、反忠ヲ即徒ノ本ヽ、遣ハシ、宣キ路ヲ以テ、反忠ヲ

進メラレケレハ、甲斐ノ内ニ、信長ヘ志ザシヲ通スル者タレ、勝頼是ヲ知ラスレテ、イタツラニ過ケル処ニ、信長大勢ヲ討手ニ遣ハレケレハ、友忠ノ者共、信長勢ヲ引入レンヨウテ、造作モナク一戦ニ打勝テ、勝頼ヲ亡レモヒレトヽヽ、又漢ノ高祖、秦ヲ討ツ時、武関ニ入ツテ、峡下ノ軍ヲウタントスル時、張良ヲケルハ、秦ノ兵ハ猶モ其勢強クレテ、アナトリ難レサレ共、

其將モト、商人ノ成アカリナレハ、利欲ヲ以テ、ナヒキ易シトテ、靉(アイ)靆(キ)食其ヲ云、辨吉ノ忍者ヲ遣ハシ、童室ノ物ヲ与ヘテスカシケレハ、其將及忠シナシタルニヨツテ、勝利アリトゝ云、又宋朝ノ欽、金ノ國ノ王ヒス起テ、中國ヘ乱入、宋ノ知行所ヲ奪取、剰サヘ宋朝ノ都マテ攻入テ、宋ノ徽宗欽宗トゝ云、二人ノ天子ヲ生捕ツテ帰ル、此時、中國ノ地過半、金ヘトラレタリケレハ、欽

宗ノ弟、廣王トゾ人、天子ノ位ニツキテ、猶
ホトゾ所ニ都ヲ立テ在ス、是ヲ高宗皇帝
トゾ、韓世忠張俊岳飛ナトゾ名大将トモ、
高宗ノ勅命ヲ請テ、金ノ兵ト戦テ大ニ攻
敗ルコト度々ナリケレバ、金主大ニ恐レテ
高宗ノ宰相秦檜トゾモノ、方ヘイツトナク人
忍ビクニ使ヲ遣ハシ財宝ヲ贈ヘテ、此事ヲ
和睦セラルル様ニト頼ム、秦檜ハ元来
古今無類ノ佞人ナル故ニ、此賂ニフケリテ、

種々ノ無礼ヲナシテ、高宗ニ、合戦ヲ止タマヘト云、諸大将ハイワレヌ、合戦ヲ仕リ、金ヲセメ、中國ノ地ヲ不残取返シ、恥ヲ雪カントヰケレ共、高宗終ニ、秦檜カ申ス旨ニ違ヒ玉フ、諸大将ノ中ニ、岳飛殊ニスクレテ、和睦ノ義中々不レ可レ然ト強テ、高宗ヘ申ケレハ、秦檜諾ヲカマヘテ、岳飛ヲ殺ス、是ヨリ和睦調ヒテ、宋朝ヨリ、金國ヲ貢ヒテ不叶ウヤニ成ケレハ、金國ハ日用強大ニナリ、宋朝ハ弥衰微ニテ、金國ノ幕下ノヤウニ成行レトゝ云ゝ

忍道梯楷論和漢忍利證語抄

中

忍道棒樹論和漢忍利筌語抄　牛

大○問敵ノ盛計進退不備ヲ知ル、徒ト云ハ如何、答敵方盛々ノ謀計敵ノ進退悉ヒラ用ヒテ、是ヲ知ル時ハ其謀ニトラサセス、又ハ其謀計ト味方ノ手立ト成ッテ、此方ノ不意ヲ、討レザルノミニアラス反ッテ、敵ノ不意ニ出テ戦フニヨッテ、勝利疑無シ、亦敵ノ不備ヲ知ル時ハ、歴卯ノ勝利云ニ

定ラズ、是忠ヒヲ用ル、後ニアラス哉、

○問 右ノ名将敵ノ姦計進退退不備等ヲ知ッテ、勝利アリシ先蹤アリ、哉、答 小幡勘兵衛元来ヨク信玄ノ意ヲ得、信玄ノ御子勝頼滅亡ノ後、京都ニ牢人シテ居タリ、豊臣秀頼公大阪籠城ノ支度ト聞ヘレトキ、家康公ヨリ誘使ニテ御味方仕ルヘキ旨勘兵衛ヘ仰セ下サレシニ、勘兵衛ハ心底ニ同心シナカラ、御返答ニ申上ケルハ、私

義道世ノ身ト回能リ成候ヘハ何方ヘモ奉
公仕ルヘキ覚悟ニテハ御坐ナク候其上
私伯父小幡山城ハ信玄公ノ内ニテ腹病
ノ名ヲ立タルコト其隠レ無ク候定メテ
御耳ニモ達シ申スヘク候人口通レ祖ク
候ヘハ奉公ヲ止メ楽一偏ノ境界ニ成テ
身ヲ終ラント奉存ルノ条御免下カレ候
ヘト申上ケ其後勘兵衛潜カニ坂倉伊賀
守方ヘ行向ヒテ之ケルハ家康公ヨリノ

誠侠ニハ、レカ〳〵御逗留仕リ候キソレハ
此事若シ大阪ヘ、泄キコヘモヤセント、遠
キ慮リニテ候、全ク真実ニ非ス、然レハ、某
大阪方ヘ便リ入、大阪ノ様子ヲ、万ツ窺カ
ニ注進致シ、時節到来ノ時、内ヨリ焼立、即
時ニ落城仕ルヤウニ、相計ヒ申スヘシト
云テ、則妻子足弱共ヲ伊賀守ヘ人質トシ
テ預ケ置、大阪ヘソ参リケル、扨又縁ヲモ
トメテ以テ、秀頼公ヘ申上ケルハ、家康ハ、

一ニ扨テ行テ縁ヲ
以テニ作

某古主ノ讎敵ナリ勝頼一門ニ及バ
ス、私一族彼レニ皆殺害セラルゾノ恨ミ
骨髄ニ徹シテ、誰忘候ト云トモ当時雲泥
懸隔仕リタルコトニ候ヘバ空シク年月
ヲ送リ候、某不肖ノ身タリト云ヒ御味
方仕リ彼レニオビ矢ナリ吃射カケ打死仕
ベクノ間城中ヘ入レラレ候ヘト其理正
久言ヲ盡シ申ケリ元来浦安人ヲ集メ
テル事ニテハアリ、且ツ、勘兵衛信義衆

ニテ、物馴タル勇士ナレハ、大坂ノ家老ノ
衆、大キニ悦ンテ、城中ニ入ル、而已ナラ
ス、剰サヘ、軍評定衆ノ中ヘ入レ、密計コト
コトク、知ラセケルコソハカナキ、其後大
坂ノ密義、残ラス、伊賀守方ヘ通レケレハ
京都其外近國ノ町在々、焼柿謀コトモ不
叶其焼手ヒ方々ニテ一人モ不残或ハ討レ
或ハ生捕レテ切レケリ、其後家康公大坂
へ寄玉フ由リ、城中ノ勢、城外へ出テ、桃ニ

戦ノ折カラ、勘兵衛ハトカクシテ、城内ニ
残リ、思ヒノ侭ニ、火ヲ放チケレハ、大坂名
城ナリト云ヒ、一日ノ内ニ落城シタリ、
○建元元年七月中旬、新田義興、鳳山門ニ在陣
アツテ、尊氏ノ篭リタル東寺ノ陣ヲ、不意
ニ料ツテ攻ントテ、手分手配タラ評義セ
テル、尊氏、兼テ山門ヘ、悪者ヲ入レラカレ
ケレハ、其事ヲ聞スマシテ、則東寺ニ来ッ
テ、尊氏卿ヘ告タリ、尊氏コレヲ聞義貞ノ

計マトラ、反ツテ、敗ヒレタル手配リヲ定メ、
夜中ニ、大勢ヲオレ遣レ、手合手配リヲ能
レテ待カケタリ、義貞ノ方ニハ、密計ノ故
ヘ池ヲ、待カケ居ルコト、夢ニモ不知レテ、
定メル手配ノ如クニレテ、懸リタレハ、尊
氏ノ軍勢、待ウケタル事ナレハ反ツテ、義
貞ノ不意ニカ、ツテ戦フ、義貞ノ軍勢、粉
骨ヲ尽シ戦フト云ヒ、不意ヲ討レテ、終ニ
敗軍ス、又家康卿信旭卿、尾州小牧山ニ、

在陣シ玉フ処ニ本陣大勢ニテ對陣アリシ時、池田勝入森庄藏、本陣ヘ押シ上ケルハ、三州岡崎ノ家康、御居城ヲ、留主ノ間ヘ向テ攻ハ、早速落城スヘシ、是能手段ナリト、再三進メケレハ、本多忠勝ノ外、皆三好孫七郎殿ヲ惣大将トシ、堀久太郎長谷川藤五郎ヲ相添ラレ、遣ハサレケリ、池田勝入森庄藏ハ先陣ニテ、潜カニ陣場ヲ立テ、岡崎ノ向ハル、北ヨトラ、サルモノ、衆

康卿ト言上シケレハ、天ノ哭ヘト悦ヒ玉ヒ、小牧山ニハ、番手兵士少々御殘シヲキ、夜ニ入潜カニ小牧ヲ拔出玉ヒ、犬闇裏、岡崎ヘ行ク道ニ山取ラシテ、備ヲ立テ、待カケ玉フ、太閤裏、此レヲハ、夢ニモ不知押行処ヲ、家康御勢不意ニカ、ツテ討ツ、池田森至剛ノ矢ナレハ、堅キヲ破リ、利ヲ摧キテ、戰フト云氏、不叶シテ、二人トモニ鉄炮ニ當ツテ討死ス、先陣ノ大將討レケ

レハ大将カ久忠敗軍トナリシト云云、

○義貞鎌倉ヲ攻ン前カタ〻、北條恵性ト戦フ、義貞方無利ニテ、引退キケレハ、義貞ヲハ、定メテ、近国ノ者トモ、討テ出スヘシト、大様ニカマヘ油断シテ、義貞ヲ追コトモナリ、遊女ヲ集メ酒宴シテ、備ヘモ無ク居ケレハ、諸軍勢モ氏ニ油断シテ、馬ニ鞍ヲモ不置、甲冑ヲモ帯セス居タリケル、（二三字ナシ）。其トキ、義貞、猶カニ思ヒヲ以テ、是ヲ見セレム、思

有此由ヲ義貞ヘ告タリ、是ニ於テ、義貞兵
一一ヲ進メ、援ヲモサヽズ、時ノ声ヲモア
ケス、潜カニ向ハレタリ、鎌倉勢申レケル
ハ、只今軍勢ノ多ク見エルハ、敵ニテハア
ラン、近國ノ者共ノ、味方ヘ馳加ハルニテ
アルラントテ、敢テサハク事モナキ所ヲ、
義貞時ノ声ヲ揚テ、勇ミ進ンテカケ立レ
ハ、悪性一騎ニ打負テ、散々ニ成テ、鎌倉ヘ
逃入リケリ、又敵ノ進退ヲ不知シテ、負タ

リシ先陣ハ赤松圓心、久々知兩郎ニ陣ヲ取
テ、六波羅勢ノ来ルヲ待カケル時ニ、尼ケ
崎ヨリ、舩ニテ登リケル、阿波ノ小笠原ト、
三千余騎ニテ、押寄ケルヲ不知シテ、伏ニ、
周章フタメキ軈ト云ヒ、備ヘ不整ニヨツ
テ、一戦ニ討負、父子六騎ニ成ツテ大ニ、敗
軍シタリ、又武田信玄、信州戸石ノ城ヲ
攻シトキ、村上義清ガ戸石ノ後詰ニ来ルヲ
不知シテ、伏カニ、轉倒シテ軈フトヨトモ、

備ヲ不整、信玄ノ先陣大将甘利備前横田
備中、其外兵士多ク討レ、武田方負軍トナ
リシ、然レ共、山本勘介後ニ敵配リ味方配
トノ術ヲ以テ返シ、怱敗軍ニハナラストノ
云ヒ伝ヘリ。又三好カ一黨、清水語テニコトヨ
ヒ、将軍義輝ヲ殺シ奉リ、明智日向守カ、信
長ノ催促ニヨツテ、中國ノ加勢ニ行ク時、
丹波ヨリ遁ニ、京都本能寺ヘヨセテ、信長

ヲ救ヒ奉リシ事、宗歓ガ迷惑深ヲ不知
シテ、手モ無ク敗セルヨウ、常ノ悪法
ヲ用ヒテハ、其誰ガ適シモツヘシ、不意
ヲ討ルノ難、忍斎ト急リ有ル故ナリ、周
心信玄、所レモ、名将ナリト云ヒ、忍ヒテ不
用シテ利ヲ失フ、慎サザル可キ事、斎ウ、
本事記、大岡記、今注古戦記ニ詳カナリ、
ソノ間、宗将ヲ救ヒ徳有ラントテ、忍斎ヲ以テ、宗
ノ大将ヲ救ヘリ、誰ヤコトナリ、其斎ハ

如何、為忠卿ら以て、敵將ヲ殺ス術無
時至ニ順フテ深計志ヲトリ、古人ノナシ
タル術ヲ新ニ在ヲ出ス義興武勇胸懐而
モ、百ニ忍ビテ居ラレケレバ、相順フヘキ
ト、容易カニ者信ヲ向ヒエル次、多カリケリ、此
事、忠利ヲ頭ニ居民、富山入道道悦ニ
聞テケリ、富山是ヲ聞レヨリ、被テ心怪食ヲ
ムクセス、左肘ヲヨリ子聞テ、大将ヲ差遣セ
ハ、其内通計レテ、事方ヲ不知又五百騎ニ

而腑ノ場ヲ以テ、道ニ待テ、夜討ニヨセテ、
討ントスレバ、義典、更ニコト共セズ、跳飛
シテ通ヲ通リ、ウケ破ッテ、園ニ入
テ、ヨク百代、スベテ人無ニ成ストキケル
間、今ハスヘキ様ナシトテ、手ニ餘ッテ覚
ヘケル、或夜高山溝ヲ竹筒太刀ヲ外ヲ
近体ニ不通、先年武ニ於ル処ノ合戦ノトキ、
彼ノ義典ヲ手ニ属ス志アリシカバ義典
モ定メテ、其用切ヲ忘レシトヲ思ハルヽ、

――オレハ此人ヲ、偽ツテ討ンスルコトハ、忠義ニ背クル人有可カラズ、何ナル謀ヲトラモ通ラヌ義無ヲ討テ、左ヲ頼トノ、足本ニ入ヘトスケレハ、竹沢柔ヲ今状ニテ申ケルハ、サ候ハヽ、其方ノ疑ヒヲ散ス為ニ、刀通ノ制法ヲ習テ、其助ト柔ヲ紫ムリ、其内ヲ出タル躰ニテ、平生ニ変リ下ツテ後此人ニ乗ヨウ候ヘトテ、彼ノ刀課ヲテ包ム所ヘ

ソ姉リケル業テ課ルルコトナレバ竹淨
翌日ヨリ前々ノ頭領ドモヲ、数十人将ヨ
セテ、延年舞歌ノ是ノミナラズ、朋仲ノ傍
第尼ニ二十人招集メテ、特殊ナ晝夜ナク
日マデヅヽ仕タリケル或人是ヲ島山ニ告
ゲセタリ島山大キニ偽リ念ヲテ、制法ヲ
破ル梁神一ニ冰ス、凡ソ道理ヲ破ル法ハ
アレドモ法ヲ破ル道理ナシ況ンヤ有道ノ
法ヲヤ一人、科ヲ誡ムルニ万人ヲタスケ

シタメナリ、此時緩々ノ沙汰故サハ勿論
ノ狼籍此ノ有カラズストテ、別竹宵ヲ(斬)
収レテ、其身ヲ追出オレケリ、竹宵一言ノ
陳謝ニモ不及、宛コトマヒシ左ノ頭ヲ
ハレヌ侍ハ、身一ツハ逃ヌカト、飽マデ
庸ニ壮敢シテ、已カ所願ノ帰リニケリ、
角テ数日有テ、竹宵満カニ新刀ヲ店物ノ
人ヲ幸ヲ申ケルハ、親ニテ候ハ、道、故郷
刀ノ赤目ニ属ス元弘ノ錦倉々戦ニ志

オレラ抽テ候ラヒキ、某マタ先年武蔵野
ノ御合戦ノ時、御方ニ参ツテ忠戦致シ候
シ条定テ忍召忘レ候ハン、其後世ノ豹変
度々ニ及ヒテ、御座所ラモ更ニ存知仕ラ
テ候ハヌル間、貴レノ余ラ助ツテ、御代ラ待
候ハン為ニ、高山禅門ニ属シ候ハルガ、心
中ノ趣キ赤色ニ顕レ候ケルニ依テ、差タ
ルー一罪科トモ覚ヘヌ事ニ所怠命ノ
地ラ没収セラレ、拠所可討ナントノ沙汰

ニ及ヒ候ヘ共、則氏義ノ御陣ヲ退去テハ、
当時ハ深山幽谷ニ隠居タル躰ニテ候、某
ガ、忠言ヲ不義ヲダニ、御免アルヘキニテ
候ハヽ、御自身公ノ身ト罷成候テ尚然ノ
御大事ニハ御命ニ替ハリ進ラセ候ヘシ
トテ、若ニソ申入タリケルヲ、齋勝殿是ヲ聞
玉ヒテ、頻ニ御申訪シカラストテ、見参
モシ玉ハスシテ、密談ナントヲ、夜知コト
モ無リケレハ、片沢当モ心中ノ悦ラオル

処ヲ顕ハシテ、近付奉ラン為メニ、京都ヘ
人ヲ上セ、有ル宮ノ御所ヨリ、少将殿ト申
ケル、上臈女房ノ、年十六七計リナル、容色
無類心サマ優ニヤサシク坐シケルヲ、兎
角申シ下ス人、先ノ已レカ養君ニシー奉リ、
御装束、女房達ニ至ルマデ、悉ク仕立テ、
潜カニ六角堂ヘ忍ビ出シケル、其供ニ、元
来好色ノ心深カリケレバ、ヨキ獲物ニ思ヒ
テ、一夜ノ程ノ閑テモ、子細ヲ告ル心地ニ

覚ヘケレバ常ノ隠レ家ヲ力ヘントモシ
ヨハスルニ混タル式ニテ其方様ニナヨノ
ユカリマデモ心置ベキ事トハ露計リモ
思ヒヨハスル誠ナルカナ、譬ハ似タリ大テ
歩ヒ頑固ナル肥後ト堕テ玄宗世ヲ失ナヒ
ヨヒレテ角ヤト思ヒ知ラレタリオレハ
太公望カ好ノ利欲其財禄迷ハ好色ヨ
其美女迷ハト歌ヲ謀ル道ヲ教ヒラ不知ケル
コソ愚カナレ竹沢春公ノ志オ以知ル

由ヲ申シケルニ、兵衛介、早心ウチ解テ、見参シ玉ヘ、穂テ、鞍置タル馬三疋、只今感シ立タル鎧三領、召替ノ為トテ引進ラスヘシ、レノミナラス、越後ヨリ着纏ヒ奉ツテ、此彼ニ、後レ居タル兵共ニ、皆一献ヲ進メ、馬物具衣装太刀刀ニ至ルマテ、用々ニ随フヲ、不漏引ケル間、兵衛助厳ヲ竹澤ヲ異ニテ他ナル思ヒヲナレ、傍輩トモ、皆、是ニ過タル、御用人アルヘカラスト、悦ハス有ハ

無リケリ、加様ニ、朝夕宮仕ヒノ労ラツヽシ、
晝夜無二ノ志サレラ顕ハレテ、半年ハカリ
ニ成ニケレハ、佐殿、今ハ何事ニ付テモ、心
ラ置玉ハス、軒廻ノ計ヒ者、共カノ人、最一事
モ不残心底ラ尽シテ、被知ケルコソ誠マ
シケレ、九月十三夜ハ、暮天雲晴テ、月モ名
ニヲフ、夜ラ顕レヌト見ヘケレハ、今夜、明
月ノ會ニ事ラ寄セテ、佐殿ヲ我館ヘ入奉
リ、酒宴ノ砌リニテ、討奉ラントト計ツテハ無

二ノ一族若黨三百余人催フレ集ソ、我館
ノ傍ラニソ籠置ケル、日暮ケレハ、竹澤急
キ佐殿ニ參ツテ、今夜ハ明月ノ夜ニテ候
ヘハ、珎ラレナカラン、私ノ茅屋ヘ御入候テ、草
深キ夜ノ月ヲモ、御覽候ヘカシ、御内ノ人
々ヲモ、慰メ申候ハンタメニ、白拍子トモ
ヲ々召集メテ候ト申ケレハ、興アル遊ニ
ナリト、面々ニ皆悦ヒテ、馬ニ鞍置キ、即從
トモ百餘騎ニテ打出シトソ云ヒケル

處ニ、少将ノ御一局ヨリトテ、佐殿ヘ御消
息アリ、披ヒテ見玉ヘハ、過シ夜、御事ヲ思
キヤウナル夢ニ、見遣ラセテ候ヒツルヲ、
夢説ニ問テ候ヘハ、重キ御慎ニテ候ヘ共
日カ間、門ノ内ヲ御出有ヘカラスト申候
ナリ、御心得候ヘレトノ彼ノ申タリケル、佐
殿是ヲ見玉ヒテ、狐事ヤ野彈正ヲ近付テ、
如何有ヘレト問玉ヘハ、井ノ彈正、立ヲ聞
テ、慎マストニコト哉候ヘキ、只今夜ノ御

遊ヲハ、止ラル可トコソ、存シ候ヘトソ申
ケル、佐殿、ケニモト思ヒ玉ヒケレハ、俄カ
ニ風氣ノ心地有リトテ、竹澤ヲソ帰サレ
ケル、竹澤ハ今夜ノ企テ、案ニ相違シテ、安
カラス思ヒケルカ、抑、佐殿ヲ将ノ御局ノ
文ヲ御ランジテ、止マリ玉ヒツルハ、如何
サマ、我カ企テヲ、内々推シテ、告申サルヽ
ニソナリ、此女性ヲ、イキテ還シテハ、叶フマ
シトテ、翌ス夜、潜カニ少将ノ局ノ門ヘ

呼出シ奉ツテ、差殺シテ堀ノ中ニ沉メ
ケル。其後ハ所澤我カニテハ、討得シト思
ヒケレバ、富山殿ハ使ヲ立テ、急キ一族
ニテ候、江戸遠江守ト、下野守トヲ下サレ
候ヘ、彼等ト能々評定シテ、討奉ラントノ
申ケル。富山大ニ悦ビテ襖ヲ、江戸遠江守
ト、其舅下野守ヲ被下ケルカ、討手ヲ下ス
由、義興ツタヘ聞ハ、在所ヲ替ヲ聞ツル事
モアルトテ、江戸伯父舅カ所領箱毛ノ庄

三郷ヲ、關所ニナレテ、則給人ヲソ被ヶ付ケル、江戸伯父甥、大ニ偽リ怒ツテ、ヤカテ、箱モノ庄ヘ與馳下リ、給人ヲ追出シ、城郭ヲカマヘ、一族以下ノ兵、五百余騎招キ集メ、只關山厥ニ向ヒ、一矢射テ討死セントソ、罰シリケル程ニ、江戸遠江守、竹沢右京亮ヲ縁ニ取ツテ、兵衛佐殿ニ申ケルハ、關山厥、故無慮命ノ地ヲ沒收セラレ、伯父甥トモニ、空手籠ノ身ト罷リ成ノ間、力不及、一族

尼ヶ引率シテ、鎌倉トノ、御陣ニ馳向ヒ、
箱山嶽ニ向フテ、一矢射ンスルニテ候、但
シ、可然大将ヲ、仰キ奉ラテハ、勢ノツクコ
ト、有マジキニテ候ヘハ、佐殿ヲ大将ニ憑
ミ、奉ラシズルニテ候、先ツ恐ヒテ鎌倉ヘ
御越候ヘ、鎌倉中ニ齋家ノ一族、イカナリ
ヒ、二三千騎可有候、其勢カヲツケテ、相模國
ヲ相随カヘ、東八箇國ヲ押領ナ、天下ヲ寢
カヘス謀コトヲ、運ラシ候、ハント、誠ト、

容易ゲニゾ申タリケル、サレモ走ザル深キ、竹澤カ執レ申コトナレハ、疑フベキニ非ストテ、憑レテ則武蔵上野亭陸下給ノ間ニ、内々共カレソル兵一一ヒニ、事ノ由ヲ相觸テ、十月十日ノ暁キニ、兵衛佐トソ思ヒテ、先ツ鎌倉ヘトソ急カレケル、江戸竹沢ハ、兼テ支度レタルコトナレハ、矢口ノ渡リノ船底ヲ、二所工リ貫キテイレヨ美ヒ、渡レノ向ヒニハ、脊ヨリ江戸遠江

守、同下野守混物具三百余騎ノ陰岩ノ下ニ陣ヲ、余ル所アラハ、討止ントノ意ヲ
タリ、跡ニテ、竹沢右京亮、宍戸家周射手百五
十人勝ツテ、取テ帰サハ、遠矢ニ射殺サン
トテ打タリ、大勢ニテ御通リ候ハヽ人ノ見
トカメ奉ルコトモコソ候ヘトテ、兵衛ノ佐(依)
ノ即従トモヲハ、皆、テニ十被々ニ、鎌倉ヘ
遣シタリ、世良田太郎助、井弾正忠、大嶋周
防守、土肥ニ即次郎、市川五郎、由良兵庫

之介、同新左衛門尉、南瀬口六郎小僧カ
十三人ヲ打連テ、更ニ他人ヲハ不雑レテ、
ノミヲ美タル舩ニコソ乗テ、矢口ノ渡リ
ニ押出ス、是ヲ、三金ノ大河トハ、思ヒ寄又
ソ哀レナル、情是ヲ聞レハ、無常ノ風ニ追
レ、煩悩ノ大河ヲ渡レハ、三毒ノ大蛇浮シ
出テ、是ヲ呑ントス古ヲノ八、其喰害ヲ遁
レントテ、岸ノ頬ナル草ノ根ニ、命ヲ係テ
取付タレハ、蛇向ニ向ノ嵐カ、其草ノ根ヲ

カフルナル、無帝ノ喻ヘニ異ナラス、此矢
口ノ渡リト申スハ、南ヲ四町ニ餘リテ、浪
烟レル底深ク、渡ル守、已ニ楫ヲ押テ河ノ
半ヘラ過ルトキ、取ハフレタル由ニテ、橋
ノ杭（ニワトノ字ナシ）ヲ河ニ落シ入、ニワノノミナラス、同時ニ
板テ二人ノ水手同ク様ニ河ニカハクト
飛入テ、ウツブキ（ニブク作カ）ニ入テソ、逃去リケル、是ヲ見
テ、向フノ岸ヨリ、兵四五百騎懸出テ、時
ヲドツト作レハ、鼠ヨリ時ヲ合セテ、思カ

ナル人々哉、忰ルトハ知ラヌカ、アレヲ見
ヨト数キテ、籠ヲ扣テソ笑ヒケル、去程ニ、
水船ニ流入ツテ、腰中計ニ成ケルトキ、井
ノ弾正奏侯厳ヲ花ヘ奉ツテ、中ニ差物
タレハ、佐厳安カラヌモノ哉、日本一ノ不
道人ニ、忻レツル事ヨ、七生マテ、汝等カ
為メニ、恨ヲラ可報モノヲト、大ニ念ツテ、
腰ノカラヌキ、左リノ脇ヨリ、右ノアハラ
骨マテ、横回ハレルヤ々、二刀マテ切給ヘ井

弾正腸ヲ引切テ、河中ヘカハト投入ル。已カ
喉笛ニ呼サシ切テ、角ラカラツカラ潤ス。
已レカ首ヲ、後ロヘ吹(打誤リカ)休ル音ニ町斗リソ
聞ヘケル。世良田左馬介ト、大嶋周防守ト
ハ、二人カラ柄口マテ突通シテ、引組テ河
ヘ飛入ル。由良兵庫助ト、同新左衛門ハ舟
ノ艫舳ニ立アカリ、刀ヲ逆手ニ取直シテ、
立ヒシ已レカ首ヲ掻落ス。土肥ト良左衛
門、南瀬中ニ六良、市川五郎三人ハ各々袴ノ

腰ニ千キリテ裸カニ成、太刀ヲ口ニクハヘ、河中ニ飛入ケルガ、水ノ底ヲ潜リテ向フノ岸ニカケアカリ、敵三百騎ノ中ヲ走リ入、半時計リ切合ケルカ、敵五人打取リ、十三人ニ手ヲ負セテ、同レ枕ニ討レニケリ。其後水練ヲ入テ、兵術使敵等ニ自害討死ノ首十三永ノ出レ、酒ニ浸レテ、江戸遠江守同下野守、竹沢右京亮五百余騎ニテ、左馬頭殿ノ御堅メ、武蔵ノ入間河ノ陣エ

馳参ル、高山入道不斜悦ニテ、候ト雖次
郎於田河村ヲ時出レテ、是ヲ見セラルヽ
ニ、子細無ク兵衛佐殿ニテ御坐ス候ヒケ
リトテ、此三四年先キニ、数日相馴奉リシ
事トモ申シ出テ、皆洞ヲソ流レケル、見
ル人、悦ヒノ中ニ哀ヲ、添テ共ニ袖ヲソヌ
ラレケル、此義興ト申スハ、故新田左中将
義貞ノ妻腹ニ、出来タリシカハ、兄越後守
義顕カ討レシ後モ、親父猶コレヲ嫡子ニ

ハ不足、三男武藏守義宗ヲ、六歳ノ時ヨリ
ぼ井滅セサセテ、時メキレカハ、義興ハ、有ル
ニモ洩ラス扨子ニテ、上野國ニ居タリシレ
ヲ、舅刑ノ國司顕家卿、陸奥ノ國ヨリ、鎌倉
へ責上ル時義興ニ志サレアル、武藏上野
ノモノ共、此義興ヲ取立テ、三万余騎ニ
テ、舅刑ノ國司ニカヲ合セ、鎌倉ヲ責落シ
テ吉野ノ参リタリレカハ先帝殿感有ツ
テ、誠ニ武勇ノ者用タリ、尤ニ義興カ家ヲ

モ、可興、モノナリトテ、童名徳寿丸ト申シ
テ、御前ニテ元服サセラレテ、新田左兵衛
佐義興トリ召レケル、谷量人ニ勝レ、謀巧
ミ、心能ク早カリレカハ、正平七年、武蔵
野ノ合戦、鎌倉ノ軍ニモ、大敵ヲ破リ、万卒
ニ当ルコト、古今未聞所多シ、其後身ヲ側
メ、只ニ人武蔵上野ノ間ニ、隠レ行玉ヒ
レ時、宇津宮ノ清臺、カミ百餘騎ニテ、取籠
タリレモ、計コトヲ得ズ、其振舞、恰カモ天

ヲ翔リ、地ヲ潜ル術アリト、怪シキホト人、勇着ナリシカハ、鎌倉ノ左馬頭、厳ヲ、京都ノ宰相中将厳ヲ安キ心地ハセサリケルニ、連命京都マリ、一事ノ謀コトニテ討レ給フ、委キハ、太平記ニ見ヘタリ、

八日、関屋固ノ城ヲ、早リ、没落合ムルノ徳ト云、

先蹤ヲキカン、為元弘元年八月、後醍醐天皇、笠置ノ城ニ、楠篭ラセ玉ヒシ時、六波羅ノ勢、十萬餘騎ニテ押寄テ、日夜責ケレ

兵、此城ヲ守護ノ要害ナレハ、中々落ス様
ナカリケル所ニ、備中國住人、陶山藤藏義
高小見山次郎某ト云モノ、僅カニ五拾人
ノ勢ニテ、九月晦日、城ノ北ニ當リタル、石
壁ヨリ城中ヘ忍ヒ入、火ヲ放レハ、カハ、寄
手是ヲ利ヲ得テ、四方ヨリ責、寄レカハ、城
中防ク事アタハスシテ、則落城シケリ、三
國無双ノ名城ニ、金鐵ノ如クナル義士、三
千余籠リタル、城ナリシカ、兵、防クコト得

スレテ、則時ニ落タリトテ云ヘ、近江國ノ
守護佐々木義賢入道渡辺宗複幕下ニ、
百七十ト云侍同國伏和山ノ城ニ居テ宗複ニ
逆心アリシカハ宗複数千人ヲ以テ、度々
攻玉ヒシカ共、此城究竟ノ要害其上、百々
謀コト有ル侍十八中々城ノ落ルコト
十次其時兼複何國橋ノ道順ト云モノ
ヲ頼ム、此道順妖者ノ術ニテ此城ヲ落ス、
其術ハ淡山ノ城ノ炭ヲ新ラ入ルヽ山家ノ

り、百々其旅、夫ヒ手判ヲ渡シ置、城中ヘ
入時ハ手判ヲ改テ出入ラサセケリ、道順
此国ノ間ヲ、形ヲ窶シ、裏タル躰ニ出立テ、
十四五人、彼ノ山家ヘ行キ、薪ヲ入ル、百
姓ニ云ケルハ、我々ハ、伊賀国ノ百姓ニ
テ候カ、地頭、某ト云人、年貢済没ヲ強ノ掛
ケ取ツテ、堪忍スヘキ様ナク、是非ニ及ハ
ス(故)ノ郷ヲ逐電仕リ、妻子ラハ縁々ニ随テ
預ケ置、我々ハカヤウニ流浪ノ身ト成能リ

成り候、一両年ハ給米ヲ不取奉公相勤ノ
条、後々ハ、當郷ニ居住仕り、妻子ラモ育ク
ミヨス様ニ頼入由、千寧ニ之ケレハ、彼ノ
旗大夫當介給米ヲ不取ニトラ毒ニ其旨
ニ任セ於ヘケリ、一家ニ一人ニ人ワ、十
四人マテ抱ヘ遣タリ、其後程経テ、道順カ
一黨ニモ手判ヲ渡シ、サ新ラ荷ハセ行シメケ
レハ、時分能十リヌトテ、十四人ノ者共応称カ
ニ諸事相期シテ、兼頼ヘモ、相圍ラ云遣ハ

ヒ、残リノ忍者ニモ告知ラセ、諸方ノ相圖ヲ定メケリ、依之兼禎モ、其前ノ夜ヨリ、澤山近邊ヘ窺カ：の残リノ忍者、城近キ森林ノ中ニ隠レ居タリ、相圖ノ日ニモ成レカシ、進夫氏ト、道順カ一輩、十四人ノモノ氏ト打交リ、手判ヲ持新ヲ荷ヒ行キ帰々。新ヲ入ル、進夫氏、丈用アリトイヘ手判ヲ持シトイヘ、彦、疑フ可様ナケレハ誰ト城中ヘ入レニケリ、道順カ一輩カ子ラ。

薪ノ中ニ、焼薬ヲ入タルニ、火ノ移ルヤウニ、
明ノ火ヲ結ビ入レテ、ヨノクレ方ニ、火ノ燃
ミツ様ニレヲキタリ、扨テ、新屋ヘ一所ニ
積ヲキ立退ケレハ、未城中ヲ不出ルニ、早
火燃上リ、夥シク焼出タリ、城中ノモノ共
是ヲ見テ、火ヲ消ントテ、周章テ、大本ヘ
走リ行ケル、其跡ニテ、方々ヘ走リ散ツテ、
火ヲ仆ケレハ、十方ヨリ燃出テ、猛火天ニ
上リシカハ、城中ノモノ共、計方ヲ失ヒヒ、

驚キ騒ク、黄昏ノ時分ニテハアリ、其紛レニ、
森林ニ隠レ居タル忍者トモ、打釣ヲウチ
カケ〳〵、屍ヲ上リ城ヘ入テ、欲ニ紛レ居タ
リ、某櫓モ、火ノ勢ヒ烈シク燃ルヲ見テ、天地モ
山崩レ、計リニ、時ノ声ヲ発シ、攻入ラントス
レケリ、百々ノ勢ガ是ヲ防ント、責ニヨリ
主ケル時、城ニ居タル、四十余人ノ忍者共、
縦横無碍ニ切廻リケレバ、城中ノモノ共、
前後ノ敵ニ迷惑シテ、防クベキ様ナク、多

クハ討レ或ハ逃出ケルヲ兼複城外ニ陣
ラスヘ備ヘラ堅リ守レテ居玉ヘトモ一人モ
不残討取玉ヒケリ又延元三年夏新田
左兵衛佐義興春日大将頭信久楠山楠
兵衛正儀ト籠ル處ニ高武蔵守師直數千騎ヲ率レテ
是ヲ圍ムト雖モ此城要害ノ地ニテ責落
スヘキ様無キ処ニ脇屋大炊助義介山
門ト成合テ北國ヨリ近日上洛ノ由尊氏
聞玉ヒテ急キ八幡ノ合戦ノ having キテ京都

エ帰り、北國ノ敵ヲ可加待ト武嶺守ル方
ヘ下知セラル、師直此由ヲ聞テ、此城ヲ不
攻落ノ列迚レナハ、南方ノ敵ニ利ヲ得ラ
レツヘレ、亦京都ヲ開テ、北國ノ敵ニ陳ヲ
倒レツヘレ、イカヽセント、迚退谷テ寛ヘ
ケレハ、或夜ノ風雨ノ紛レニ、逆物ノ忍ヲ、
八幡山ヘ入テ、社殿ニ火ヲ掛タリケル、城
中騒動シテ、煙ノ中ニ迷倒ス、是ヲミテ、四
方ノ寄手十万餘騎、谷々ヨリ責上リ、既ニ

二ノ城ヲ口マテ攻入ケル、然ル所ニ敵
方ケレハ其夜ニ攻落スコトヲ不レ叶ト雖モ
社塔ニ積置タル兵粮悉ク焼失レテ、此國
ヨリノ後詰ヲ待マテ堪忍ナラス、六月廿
日、潜ニ八幡山ヲ落ラレケリト云云、又
駿河國ハ幡手ノ城ニ今川殿ヨリ大勢ヲ
メラカレ、堅固ニ守リ居タルヲ甲州馬場
美濃守三者ヲ遣ハレテ、夜中ニ忍入レ、
内外ヨリ攻テ、迷作モナク、八幡手ヲ攻落

レタリト云ヘ共、後漢ノ皇甫嵩波方ト云モノト戦フ、敵ノ大勢ニテ味方ノ人数少ナカリケレハ、諸軍勢如何ト恐レケル所ニ嵩カ曰リケルハ合戦ノ道ハ、セレモ勢ノ多少ニ不可寄漢コトニヨツテ、権ノ術有、今敵ノ陣屋ヲミルニ皆草ニテワクレヲ焼討ニスル便有ト云、其夜則大ニ風吹ケレハ軍勢共ニ仰聞ラレケレハ、城中ヘ忍ヒヲ入城外ヲヘ人数ヲ以テ取巻キ、一先外ヨリ火ヲ

掛ケレハ城ニ忍ヒ居タル者共、同時ニ火
ヲ放ツテ内ヨリモ責タリ、其時鉄砲ヲ打
テノ下脱字アルベシ
テ敵火ヲ見テアワテサハク所ヲ責ル終
ニ大軍ニ大ニ打勝タリトカヤ
九ノ関敵ノ籠城ノ人数ヲ煩痛セシムル候ト云
ハ、或粮道ヲ一断或ハ他国ヨリ援兵ノ有
ルヲ聞大将其交リヲ隔テ、其通路ヲ塞キ
其城ノ危難沮沢ヲ能知リ、繪図ヲ以
テ、御大将ヘ知シ大内ヒ城ヲ堅ク取巻ク或

ハ兵粮馬ノ飼料等ヲ積置所ヲ悉ク焼
失セリ外時所ニ随テ防禦ノ変ノ如キ
ヲ、

○関忍術ヲ以テ数ノ籠城ヲ煩痛セシ證據
アリヤ、答前ニ云、新田義興春日少将ノ
籠リシハ鳴山ノ城モ忍ノ術ヲ以テ落
ニ、城ヲアケ諸玉ヲ、信濃國村上ノ義清
ヘ、武田信玄ト合戦度々ニ及ヘ雖モ、村上
ノ城要害堅固ニ大将上大身ナリケレハ、

信玄トリヒルク事不可レ云争月ヲ送ラレケル所ニ信玄カ旗下遠田弾正謀ヲ有モノナリ、弾正カ兵カノ侍ニ渕原某狭間同想左衛門ト云兄弟ノ士有、智謀ヲ人ニ勝レタルモノ也ナリ、此両人ハ元来海野カ、ヲトナ十竹助ナリケレハ村上義清カ方ヘ折々チナマセテ、義清カ心ヲ窺ヒケルニ、何事モ渕原兄弟ノ心中実儀ナリトハ義清思フ色見ヘケリ、時ニ両人義清ニ向テ言

ケル、帰々ノ御念煩、誠ニ奉申訳ニ存
候、一兵、別ニ御奉公可仕品モ無御座共、
ヒ、真田カ城ヲ取タク思ヒ候ハヽ、何時ニ
テモ取テマイラセント心ニ要ケニ、村上
ニ談ル筈清大ニ悦ヒ、然ラハ何事モ其方
ハカラヒ、弾正カ城ヲ取テ得サセ候ヘト
申ケル、洲俣シスマレタリト思テ、左思ハ
候ハヽ、御衆中ニテ、歴々五百人計リスク
ツテ、某ニ御添候ヘ、真田カ城ヘツレコシ、

即時ニ蹈満ス謀叛アリト云ケレハ。義清。
家中ノ歴々ニヲ五百人某狄兄弟ニノ美添
ケル、兄弟イルヲモ誅リタリト思ヒ、真田
カ城ニテ九、連行、第ニ相図ヲ定置タル
事ナレハ一人モ不残成敗シケリ去程ニ。
義清頼ニオワタル兵士ヲ、弾正ニ被誅
討セケレハ残勢ヲ氣ヲ失テ小勢ニモナ
リケレハ、城要害ヨルト雖モ防クニカラ
ナク、兎角トモタヘケレ共不叶終ニ越

後ニ滿行セリ、又唐ノ李光弼ト史思明
ト相對時史思明カ方ヘ近頃ヨリカ勢ノ
衆ル事ヲ頼ミテ、相待處ニ鎭陽ト云所ヨ
リ、史思明ヲ救ハンタメニ大敗ス、ヨリサ
レ遁ハレ、已ニ九門ニツクヨレ、李光弼聞
テ、究竟ノ兵ヲヌクリ、旗ヲアゲズ——
鼓ヲモ不打、潜カニ行キ、敵ノ兵粮ヲツカ
フ所ヲ窺テ、急ニ攻ケレハ、鎭陽ヨリ來ル
モノ、一人モ不殘討取レリ、史思明モ是ヲ

間テ兵ヲ引テ退キタリト云ヘ、陳ノ文帝陳ノ國ヲ討ントノ心アリ時ニ高頻(エイ)申ケルハ、江南ハ去年クレテ、只節竹ノミ多ク兵粮ノ貯置所ノ者ハ皆去年ニ尽テ、潤ニ人ヲ遣ハシ大風ノ時火ヲ放ケテ是ヲ焼ハ永重テ貯積マハ永焼ヤウニセハ一年ノ内ニハ、何ヲ以財物兵粮皆盡スヘシト云、文帝此謀ニヨリ用ラレケレハ陳ノ國益弱エテ後ニ陳ノ大將賀若弼ニヤブラレシリソト云云。

忍道勝階論和漢忍利詮語抄 下

忍道梯嶋論和漢忍利證誌抄 下

十〇問十死之合戦ニ得勝利徳ト云ハ如何、

答味方一戦ニ利ヲ失フ九或ハ大事ニ関ハル重而戦フトモ利十中時、忍ヒヲ用ヒテ一重十手戦ヒニ利ヲ得敗退運ヲ開キタルコト、其様多シト云ヘ、九ノ内、菊池肥後守武光、上杉原下杉原小弐大友宗像、紀伊常陸前司是等ハ大勢ニテ圍ル時、

一下杉原下大伴政ヲ大鋪宗像ニ作ル小弐ノ字ナシ

一武光カ家子、城越前守トカモ人、上松原
下松原ヨリ、三千余騎ニテ陣取テ、飯守山ノ
陣ヘ、山伏禅僧、斎世者ナントヲ、忍ヒ忍ヒ
ニ遣シテ、此陣ノ人々ニ、注カレハ宮方ヘ
内通ノ事有、何カレハ後矢射テ降参スヘ
キ由ヲ申候ハ、野心ノ者共ニ心ヲ置テ、犬
死ニ玉フナント、様々ニ云ケル、是ヲ聞テ
主ル事ヤ有可シト思ナカラ、今時ノ人ノ
心、亦アルマシキ事ニテモナシト、迷ヒニ

心ヲ置給ヘバ、危フマヌ人ヲセカリテ処ニ、
其後少程経テ、赴前守夜討ノ支松原堂ニ元
来大勢ト云、城ヨカリケレバ、此歟ニ、一刻被落
ヤウハナレドモ、城中ニ歟ヘカ週ノモノ
多レト、歟ノ計ニ（ミリテ）コトヲ失タリシヲ真ト心
得テ、御方ニ討ルヽナド、月ヲ賜レト、云フ程
コソ有ヘ――斜先ニト落ケルトカヤ、
其競ヲ以テ小弐大友宗像大宰弐阿紀伊ノ
常陸ノ前司此勢都ヘ二万五千余騎ニテ

引ヘタル、去年ノ陣ヘハ立ヵ、営方五千余騎ノ勢ヲ以テ、押カケケレハ、味方、掘手ノ松原壱町余ト聞ユヨリ、アハレ引ハヤト、臆病神ノツキタル、小武大友カ勢カナレハ、一縦リモタマルベキ、敵ニ鑓ヲ入レカハ、一縦リモタマルベキ、敵ニ鑓ヲ並セテ、我先ニト落ケルトコロヲ、又伊藤国河野四郎通清手家ヲ数キ隙氏ノ方人シテ、横ヲ衝ントテ計ル時ナリ、通信安芸ノ国仁交、奴田次良ヲ語ラヒ此事発洩シテ

世上ノ氣運ヲ察シ郷人道西救河野通清ヲ館
ニ招キ通清ヲ討ツ大ニ勝ヽ一通清ヲ救レ
ケリ通清カ即使飯田深土郎ト云モノ何ト
カレテノガレケン安藝國ヘマヘヤ見通信ニ
此由ヲ申ケレハ仍文奴田次郎大ニ驚テ
急キ合戦ヲ企ント欲ス通信申ケルハ
今我等カ勢ニテ彼ト挑戦トンヤトセハ必ス
利アルヘカラス只案謀ヲ以テ彼カ
気リヲ察シ其虚ニ乗レテ是ヲ討ヘシ

一ニ案ヲ本
其上ノ下ノ七ヒト思ヘ
安藝國ニ越ル名
跡ニテアルヘキヤリ

其上今ヲ放モレバ病フコトモヤ候テレバ先ツ
此事遂候タルヘントテ先竟ノ兵一
而人スクリ先拙兄ヲ遣ハレ放ノ座宅ヲ
窺ハレムサレバ放ヲ用心ノ厳敷シク見
ヘタリ爰ニ於テ侍一人山伏ニ出立セ頼
ム道クバ前ニ立要塞固厳嶋ニ而ノ参
籠仕ラ犬願成就ノ山伏帰国ノ奇瑞タベト
モケレバ折節面会閉門ヲ其山伏此方ヘ
召ト手ヲ出居ヘ請ヒ入如次即チ

通信カコトヲ岡山伏津ケルハ、サノ候此
時決地ヲ人厳嶋ヘ参籠シケル者人詰リ
津ヲケルハ、伊豫國ノ住人、河野四郎トヤ
ラン云人ヲ、数人満通西取トヤラン申ス人、
討取候ニヨツテ河野ノ名ヲ思ヒ通信ト云
人ノ安藝國奴田次郎ノ家所ニ候ハレケ
ルカ、此由ヲ傳聞玉ヒテ、安カラスコトナ
リ是ハ親ノ敵ヲ討ントテ、奴田次良ヲ頼
ミ奥ヲ指ケル処、去ル七月ノ日通信、俄

カニ病死ト玉ヒヌト詰リ（一ニ詰リヌト申スニ作ル）候ト此儕ヲ葬禮ノ様ヲ見テ通リ候ヒシカコト哀レナルヽ有サマニテ、假ヒシカト申ケレハ、西叔大ニ悦ヒテ、即徒兵ニ命テ申ケルハ各々皇業ヲ守リ候ヘ嚴嗎ノ辨ヲ天手永ク守護シ玉フコト未タ極サセ給ハサルニ只大願就（倒ス）成ノ山伏ノ繁榮ヨリ来ツテ、西叔カ要塞ヲ集玉フ此山伏コソ即チ辨才天ヨト天様ノ引出モノニテ帰ルヌ其後西

寂寞ヒノ酒宴終夜ナレテ、上下途ヲ失フ
所、通信其怠タリヲ聞スマレテ、手勢百
騎ヲ三手ニ分ケ一手ハ先ツ道行キ人ノ
躰ニ出立セテ通レ、手ハ中ヲ通レ、此中
ノ手ヲ先陣トナレ此手辻ヘテ攻ルトキ、
前後ノ二手ヨリ入テ火ヲカケ焼討ニノ
大ニ勝ケ、西寂ヲ生トツテ、本望ヲトゲ
タリト云云、

十四日、天下ノ人民ヲ悩ス者トナレテ、

勝利ヲ得ル徳トハ如何ハ答ヘ其謀計廣
大ニシテ奥深迷レカタクレト雖モ、アラマシ、
和漢ノ忠謀ヲ顧ルニ、周瑜周座形犬
ノ敵ノ内ニ、陶ト云侍ニ心ヲ合セ義士ア
リ、如何ホトスカヌ反忠別心ナトアルモノニテハナキ毛利元就陶カ心根ヲ能
々知リヌカラ、陶ニ別心ラスルノラレケケ
リ、陶心底ニ、実ニ心ナクレテ、上部ニ
テ元就ニ異見セントテ、約束シケリ元就来

心ヲ独楽レ共、尚ホ帯ヒモヲトキタル様ニ
モ、云ケルハ、差レ大内殿、斜城ヲ攻ラル
ヽ、汝大手ノ方ハ、近年普請ヲヨク致レ堅
固ナリ、我ハ搦手ノ勢ニテ攻ラルトモ、更ニ、
攻敗ラルヘキトハ、覚ヘサルニヨツテ、心易
キナリ、然レ共搦手ノ方、山続キニテ、険
阻ナルヤウナレ共、敵ヒソカニ襲ヒ来テ、
斜城ヲ攻ハ、何トヲスヘキ様ナクレテ、落
城スヘキカト、是而已、心カヽリノ所ナリ、

若し大内ドノ、井城ヲ攻ラル、事アラハ、
御通ゲラス元就カ城ヘ、猶予候ヘテ、
攻ルニ利アラス大手ヨリ、一隊ニ攻ラ
ル可シト、諫ル躰ニテ左玉ヘト、言ハレケ
レハ、陶心得候ト、談シテ帰リケリ、陶元
就ニ一味ノ変ヘ上部ハカリノ事ニテ、元
来大内殿ヘ、二心ナキコトナリケレハ、此
事大内殿ヘ、有リノ侭ニ言上シケレハ、大
内殿、彼コトヲ、聞、タリト思ヒテ、元就ノ

城ヲ攻ラルヘキ支度ナリ、此由元就聞テ、
サレハコソト思ヒ元搦手ノ方ノ山ノ奥ノ
マリくニ伏兵ヲ隠シ置、其要害ニ進テ矢
ーノ備ヘヲ待掛タリ、案ノ如ク大内厳
大軍ヲ以テ潜カニ、搦手一向テ襲ハレタ
リ、元就ノ兵民、思ノ外ニ敵ヲ難所ニ引入
テ、八方ヨリ急ニ攻ケレハ、大内勢ハヤマ
リモナリ大ニ敗軍シテ、元就大利ヲ得タ
リトゾ云、
甲州武田晴頼三州長篠ノ城

ヲ攻ラレン時、勝頼ハ鶴カ渠ノ城ニ在陣
シテ、先勢ヲ以テ城ヲ圍ム、其時小栗ノ来
ト云者ニ勝頼不知シテ、汝ハ信長ニ依名木
沢井其外幾内中國ノ様子ヲ聞ニ一々
委知ラセヨトテ、遣ハサレタリ、此小栗ハ、
元来家康公ノ家来ナリシカ、去ル子細有
テ、御勘氣ヲ蒙リ勝頼ニ属ト云タリシカ
ハ、此次テヲ以テ三州ヘ行キ、本多平八ヲ
頼ミテ帰参ヲ望ム、家康公聞召悦玉

ヾ許之則平八郎ヲ連テ、御前ニ伺公
ス、十乗元吉主ヲ、久々ニテ、拝ト奉リシ嬉
シサニ、落涙シケリ、家康モ哀ト感
レ玉ヒ、黄金三十枚小栗ニ下サレ、其上ニ
テ仰ケルハ、汝帰リテ、勝頼ニ云可リ、家
康ハ病気ニテ、長篠後疵ノコトヽ申々難ク
由申スト雖ト仰アレケレハ、最モ尤リ候ト、御
請仕り、退出シテ後、ニ心アルマレキル子、
誓紙ヲ書テ、平八ニ渡シ、鵜藻ヨリ帰リ兵趣

キ、勝頼（キ）上ケリ、勝頼コレヲ聞実ト心
得ヒ、家康後詰ナクヽ心易キトヲ鴨巣
ヲ出ヒテ長篠近ク寄ラレ平野ニ陣ヲ
取ヒフ、コレ武田ノ家運盡ル所ノ端ナリ
サテ、信長公（イラシ）及ヒ家康ニ、此旨ヲ聞シ召テ
先ツヒソカニ人数ヲマハシ、鴨巣ヲセメ
落シ味方ヲ入給、険難ヲ前ニアテ、要害ニ
陣ヲ取テ、敵ヒ玉ヒシカハ、勝頼剛強ナリ
ト古人終ニ大ニ敗軍ト云、是ハ勝頼ノ思

君ヲ家康公ト反間トナレルモノナリ。大将タルベキ人ハ、常々士ヲ愛シテ、英雄ノ心ヲトッテ、二心ナリト思ヒツカセ、脚力ヲ、非義ノ攻道ヲコレ無キ則ハ、縦ヒ一旦勘氣ヲ蒙ムリ、其家ヲ追出セラレテモ、我カ非ヲ有ニテ、終ニハ心ヲ通ス。是歎息ヲ堪ヘ得勝利ノ本トナリト云云。安藤國光刺死ノ、周防國ノ居形大内義興ノ家老陶ト、合戦シケルトキ、元就ノ陣中ニテ、潜カニ

評議スルコト、陶カ方ヘ、速カニ聞ヘテ、謀
ヲト齊ク相ク、元就之驚キテ如何サマト、我カ
近習ノ者、数人通スルナルヘシレトモ、云
ルケレハ、小早川隆景、生年十六歳ナリシ
カ是ハ元就ノ御側ニ、常ニ侍ヘル方ニ用アリ
リ、此者数人通スヘシレトモ、元就サア
ラハ、方便テカヘテ、味方ノ為ト、能事ヲ悪
キ様ニ人ニ洩リテ、陶カ方ヘ知セ数キテ
然ルヘシレトテ、諸人ニ向ツテ、云ハレケル

八閩若シ兵ヲ厳嶋ノ方ヘ出サヽレハ味方ハ
敗軍スヘキヲ閩知テオリケリト云。此ヲ
ト季ヒ久閩カ方ヘ閩ヘケレハ閩大ニ
悦ンテヤカテ、大勢ヲ厳嶋ヘ指遣ハス。元
就コレヲ聞テ、降景以下ノ兵ヲ引率シテ、
馳向ヒ、合戦シテ打勝ケリサテ、カ辺ノ
ノヲ穿鑿スレハ、閩カ兵士元就ノ陣中ヘ、
然カニ来テ、彼ノ旨用ヲ窺ヒ忍ヒ居タリ。
旨用ハ元就ノ近習ニ侍テ、密事ヲ聞テ彼

者ニ語リ、コトヽク、陶カ方ヘ、云遣ハシケ
ルトナン、小早川ヨク忍利ヲ知ル故ニ、敵
忍ヲ、招クノミナラス、味方ノ忍者ト、ナス
モノナリ、元就知将タルヿ此ニ於テ知ル、

十二〇問歟カノ忍者ヲ、味方ノ城営ヘ不入徳ト云
ハ如何、答主将忍術至極ノ理ヲシリ玉
ヒ士ヲ極テ民ヲ愛シ、卿カヲ以法、政道
ナク、平生談論評判シテ、刹那ノ事ニ怠リ
ナク、無事ノ時、殊ノ謹シレニ深ク、危ニ遠ク

欲ヲ退ソケ、席ヲ善ヲ薬ミ、知徳アル人ヲ
求メ、禮義ニフカク、奴妾僕従マテニ憐ミ
深ク、其衆上下和睦シテ、義ヲ以テ集マリ、
禮ヲ以テ交リ、決人狐疑ノ心ナク、悪人ハ
自ラ退ソキ、義士ハ不招テ来ル、コレ欺忍
ヲ根ヲ本根ナリ、其未ニ至ツテ、欺忍ヲ入
ナル謀計、不可勝計、コレ又忍術ノ理ヲ
知ル故ニ、未欺忍ヲ不入之、謀ヲトヲ知ル
ナリ、射綜子ニ曰、敵ノ談問謀無キ時ハ入忌議

斬也、游説トハ、軍中ヲカナタコナタノ虚
説ヲ云テ、兵士ニ疑ヒヲ起サセ殺之サス
ル、謀コトヲナスナリ、讒義ニ曰、水ハ舟ヲ
後ニ出生ス人ハ妻ヲ和後ニ説入ル議得共正ヲ判
所ノ守有旺、游説間謀何ノ月人ヲ太宗仕房
元齢謀議之所ノ資也、有男子上ル談太宗立ニ
新ル之ヲ游説間謀無ニ月人也、又延文三年河
内國赤坂ノ城ニ和田正武楠正儀カ籠リシ時、
將軍義詮ノ勢二十萬騎ニテ圍ケル、此時、

和田和泉守正武、三百人ニテ、五月八日ノ
夜ノ陣ニ進ンタル北結城カ白ト城ヘ、夜討
ニ入タリ、数刻戦ニテ、城カヘ、ラタル水ノ
カラ、結城カ若党物部次郎郎司トテ、廿ニ
勝レタル兵一一四人アリ、茶ラ立合セテ、
和田カ勢ニ紛レテ、城ヘ入テ、火ヲ掛ントシ
レタリ、此時、和田樹、主膳庶勝ト云忍術ヲ
以テ、紛レ入タリシ四人ノ者共ヲ、剰時ニ
ヨリ出シテ討タリ、和田樹、爰ヲ先途ト防

キ守ルト云ト又敵ノ大勢ニ退出シテ城
ニ火ヲ掛ケ金剛山ノ奥ニ引篭リタリ
元弘三年ニ千劔破ノ城ニ楠正成カ篭リ
シ時此條高時入道ノ勢百万余騎城ノ四
方ニ三里カ程ヲ圍ンテ晝夜責タリシカ
共中々落城セサリシ城中ニ水ノタクサ
ンナル様ヲ見テ如何サマ東ノ山ノ林麓
トニ流レタル溪水ヲ夜々ニ汲カト高手
怪シテ石越越前守ヲ大将トシテ三千余

騎水ノ邊ニ陣ヲ取テ城ヨリ汲ニ出ル
ヲ、今ヤ〳〵ト待掛タリ、楠ハ元来勇気智謀
兼備ヘタル者ナリケレハ、城中ニ水ノ用
意カナテ皐敷ニレハ吸(ヲキ又カ)陸ヲ、此水ヲ汲
ントモセス、水防キケル兵共、毎夜ニ氣ヲ
詰ヲ待ケレ共、終ニ汲ニ出ナリケレハ、
サテハ此水ハ汲マナリケリト、少シ油断
ノ躰ヲ、楠見澄シテ、三百人城ヨリ夜討ニ
出テ、大ニ勝ツヲ、越前守ヨリ近討被幕マテ

奪ヒ取タリ、此時楠夜討ニ出ントケル人数
ヲ、手分手組手配リヲ堅クシ、手ニ合ヲ備
テ出シタリ、正成モ、城ノ外、坂ニ出テ、大
勢ヲ以テ、一二三ノ搦手ヲ定テ、軽ヲト討
テ、大勢ノ搦手ヨリキクトヒトシク、縦ヨリ敵
ヲ討チカヘタリ、氏、捨ヲ引取ベシト仕タル
クシテ、敵ノ見方ニ紛レ入ラレ、或ハ、仲入
リシ、アフベカラズト下知シ、大ニ利ヲ得
テ少シモ尼キ下ナカリシトゾ、是正成

カ智謀有テ忍利ヲ知ル故ニ歟忍ヲ拒ミ
賢ニ乍カニ歟ヲ大勢討取タリ氏城ヲ落
サル、カ或ハ危事アリテハ益ナシ、
忍利ハ軍法ノ極意タルコト必セリ、武
田信玄ト甲越後ノ謙信ト、川中島ニテ合戦
アリシ時、村上義清家来ノ侍三頭ヲ事通
路ノ約ヲ裏切ノ約ヲ定メ降参サセラレ
タリ、然レ共信玄名将タルニ依ツテハ若シ
謙信義清内談セシカ或ハ裏切ノ通ノ

為メニ降人ニシテ、越タルコトヲヤト、思ハレケレハ、川中島合戦ノ時ヨリ彼ニ頸ノ降人ニハ、押ヘ備ヲ、一ツニツ置玉フニヨツテ、裏切スルコト叶ハザリキ、其上謙トニ降参セハ、謙信方ヘ通路ナリテハ叶フマレト、思ハレケレハ、川中島ノ川下ノ村ニ、忍者ヲ遣ハシラカレケルニ、案ノ如ク、彼頸ノ降人方ヨリ、使ヲ以テ、謙信ヘ状ヲ遣ハシケルヲ、忍者道ニテ捕ヘ、其状ヲ

奪ヒ取ルヲ、快有ラモカラメテ、信玄ヘ、事ノ由ヲ申シ上ル、甲斐ヘ帰陣アッテ、彼降人三人ヲ、成敗アリシト、云云、

十三ヶ間、味方ノ戦無利時其威ヲ失ナハズシテ、再ヒ、モリ返ス徳ト云ハ如何、答大合戦ノ勝負ハ、必ス、少勢多勢ニ依ベカラズ、唯将ノ謀コト賢ヲ、天地人ノ三理ニ叶、始ニ勝チ、後ニ戦時不ル勝ト云コト、有ベカラズ、雖然、明将モ、自然、利ヲ失フコト有リ、如

此ノ時、全ク其威ヲ失ナハス、様々ノ方便ヲ以テ、其軍ヲモリ及レ、大ニ勝ヲトル事、唯、此術ニシク事ナシ、異朝ノ譬言ヲ以テ其理ヲ見ルニ、太宋國ト、大元國ト、楊子江ニテ戦ヒケル時、宋國ノ謀コトニ衆シテ、大元ノ軍勢、三百萬人マテ、一時ニ亡ヒケレハ、大元ノ老皇帝、気ヲ屈レ默止サレケル処ニ、両番ノ帝師ト云モノ、太元王ニ申ケルハ、足智謀ヲ以テ、宋國ノ四百州ヲ、傾

ク可ト云ケレバ、太元王、大ニ悦ヒテ曰ク、
卿カ謀コトヲ以テ、我若、宋國ヲ七サバ、必
ス、公ヲ、上天ノ下、一人ノ上ニ貴テ、代々、帝
王ノ師ト仰ク可ト、約セラレケリ、是ニ因
テ、帝師、彭ヲカヘ、身ヲ憂レテ、大宋國ヘ行
キ、江南ノ市ニ行年六十余リナル老人ノ、
子ヲタクク持タルヲ、ヨキ子求メテ、三千両ノ
金ヲよへテ、彼カ命ヲ買ヲサテ、宋國ノ帝
都ヘ、人ヲ遣ハレテ、今度楊子江ノ合戦ニ

カエアリシ、宋ノ上將軍伯顏賈魯丞相文煐等カ事ヲ、都ニテ、取サタスルヲ聞ニ、若シ、伯顏丞相文煐等、此勢ヲ以テ、宋ノ世ヲ傾ケントセハ、掌ヲサスヨリモ、安カルヘシト、人々、云ヲ聞テ帰リ、此由ヲ、帝師ニ告タリ、其時、帝師、件ノ老人ヲ呼テ、彼カ股ノ肉ヲ、カリ刈ヤ、テ、呂文煐伯顏賈相丞三人ノ手跡ヲ学テ、叛逆等策ノ文ヲ書キ、彼カ骨ノアワイニ收テ、疵ヲ愈レテ後、智略ノ塩合、

々云教ヘテ、宋國ノ城中ヘ行レメケル、帝師カ宗ノ如ク、宋城ノ門番アヤシミ、彼ノ老人ヲ捕ヘテ、天獄ノ官ニ渡ス、獄官、老人ニ、何ノ故ニ笑ニ耒ルト問、老人帝師カ教ノ如ク、一往ニハ、其故ヲ云ハザルニヨツテ、後ニ水火ノ責ヲナス、老人堪レハ不云レテ、其責タヘ難キ時ニ至テ、白状シテ曰ク、我ハ是、伯顔將軍賈丞相呂文煥等カ使トシテ、謀反ヲカノ兵ヒノ方ヘ子細ヲ、相

一ニ宋王ノ上ニ
缺レタリ其脱ニ乗ト
大元王大軍ヲ興ヘト
ヲ宋ヲ攻メタリ北
三字アリ

窮シタメニ来リタリ、其験レ是ナリトテ、
彼股ノ肉ノ中ニ隠シ置タル、謀反等ノ
躰状ヲ取出ス、獄官、其状ヲ宋王ヘ上ル事
ノ由、有ノ侭ニ奏シケリ、宋王是ヲ見聞テ、
サテハ、疑フヘキニアラズトテ、右三人ヲ
将軍ヨリ呼寄テ、殺スノミナラス、彼廻文
ノ裏所ノ兵ヒマテ、不残殺サレケレハ、宋
国大ニ肉輪ワレテ、宋王勢ヒ衰ヘタル時
ナレハ、レカク一戦ニモ不及レテ、終ニ敗

セシケレハ、大元ノ天下ニ成タリト云ヘ、
委シクハ、太平記ニ見ヘタリ、
古聞、時方ノ叛逆ヲ、早ク知ル徒ト云ハ、如何、
答、軍法ニ、其逆兆ヲ知ツテ、早ク而巣ヲ
去ルトイヘリ、明将ハ常ニ、忍法ヲ用テ、其兆
ヲ知リ、前ニ備ヲシテ、後ノ禍ヒヲ拒ク、晴
将ハ、是ヲ不知ニヨツテ、禍蔣蔕ノ内ニ起
ツテ、終ニ、其身ヲ亡ス、人主タラン人ハ、常
ニ戒ヲ不忘、忍法ヲ捨道カガル則ハ、敵ス

ヘキ兆レシ知ツテ、不意ヲ討ズ、其後廣大
ナル有ㇾ年、元弘三年ニ、新田義貞、千ハ
ヤノ寄手タリシカ、謀反ヲ発シテ、先朝ヨ
リ、綸旨ヲ給ツテ、虚病シテ、本國上野ノ沼
田ノ城ニ帰リテ、義兵ヲ揚ント、評議トリ
くずり、是ヲハ不知、相模入道、京都ノ勢
ヲ上セントテ、近國ノ兵ヲ集メラル、其兵
粮ノ為ニトテ、簾時ノ夫役ヲ掛ラルヽニ、
新田ノ庄世良田ニハ、有徳ノ有アリケレ

ハ、出雲介親達黒沢入道ヲ使ニテ、五月ノ
内ニ、六万貫ヲ可ル出ト下知ス、其両使、世良
田ニ至ツテ遵奉ス之ニ依ツテ、義員士卒
ヲ遣ハレ、両使ヲ生捕テ討ス、ソレヨリ、我
兵ヲ起シテ、無程鎌倉ヲモセレタリ、相模
入道身出ノ術ヲ不知、忽チニ滅セレタリ、
○源義経ハ、スートキ大将ナレハ、頼朝常
々心ヲユルレ玉ハス、足立新三良ヲ義経ニ
付ケテ、京都ニ置玉ヒテ、義経ノ動退審計、

委レク聞見ス、関東ヘ、窮カニ注進シテケ
ルニヨツテ、義経ノ謀計顕ハレテ、本意ヲ
トゲズ、頼朝ノ法ヲ用ルニヨツテ、叛逆ヲ
早ク知ツテ、敵ノホコラザルニ、討伐ヲ加
フトゾ云ヘル。又織田信長ニノ御舎弟、武蔵
守殿ハ、尾州春日井ノ郡、龍泉寺トゾ云所ニ
一城ヲ構ヘヲハシケルカ、信長公ヘ、謀叛
ノ思召ヲ給フ、其節、柴田権六トゾ者ヲ、武
蔵守トノ方ヘ、忠ニ入ント玉フニヨリ、権

六、清洲へ夜中ニ参り、御敵逆、様ニ委シ
久信長公へ註進ス、即権六ヲハ夜中ニ龍
泉寺へ御帰シ有ツテ、其後信長座病シテ、
命カギリナル由、披露アリ、ケレ程ヘテ、村
井長門ヲ御使ニテ、母公ノ御方へ仰ケル
ハ、今度某病気、方外一生ニ覚ヒ候、武運守
ニ家督ヲ譲リ候ヘシ、母上ヨリ、迎ヒヲ御
遣ハレ、アレカシト仰ケレハ、長門守、母公
ノ御方へ参リケニモ、実ト申上ケレハ、

母上、信長ノ御病氣、御大事ト聞シ召シヨリ、絶美シ玉フ迄限リナク、宣テ申ケルハ、老少不定ノ世中、左様ニ悲ミ給テモ益ナシ、唯疾ク〳〵ト申ケレハ、疾ク押ヘ此由細々ト武藏守殿ヘ、御送ラレケレハ、領フ所ト中思ハレケル、時刻ヲ移サズ、清洲ヘ着セ玉ヒシカハ、ヤカテ信長公ノ御寢所ヘト〳〵ト申ケレハ、母上御同道ニテ、御寢所ヘ入玉フ所ニ、山口飛彈守、長谷川橋介河

庵青貝皮等三人、遣テ討手ニ仰付ラレケレハ、御心慢一炊ノ道スレ共即時ニ殺レ奉リケリ、

去ル間味方籠城之時、後詰ノ大将ト至ニ通路ノ遠キ云ヒ如何、答味方籠城ノトキ、後詰ノ将ト通路レタキ時カ、或ハ兵粮ナトキレタル時隣国ノ味方ヘ通路レタキ時ハ、忍ヲ不用レテ不叶コレ亦上忍ヲ用ル時ハ利一在、忍者ノ心ヲ知ラサル則ハ、

及ッテ寄ラナス、正成ノ計破敵ニ籠城セル
時ハ京都ニ席々、三十人ノ忍者ヲ置タリ、
忍ノ主理ヲ知ル将ハ城内ヨリ忍者ヲ出
シ、外ノ味方ヘ通路スルコト支ナシ、尤モ
危キ事ナリ、城外ニ味方ヲ、置テ相図ヲ以
テ、諸事ヲ通ス、止コトヲ得ザルトキハ城
ヨリ出サズ、不叶事モ在之ニ付、敵ノ圍ミヲ
出ルモ、忍術ノ法ナリ、天正三年ノ頃、三
州長篠ノ城ニ、家康公ヨリ、奥平九八郎家

正ヲ、籠ラカレケルカ、武田四郎勝頼、数万騎ニテ、後城ヲ打圍ム、家正至剛ノ兵ナレハ、城中ノ糧ヲ、點檢シ見ルニ、當月ノ食ヲ出ス、急キ此旨信長公ヘ注進シ、後詰ヲ請奉ラントテ、計リケルカ、幾重ニモナキ、カコミナレハ、鳥ナラテハ、通フヘキ樣モナシ、如此ニテハ終ニ洞奥ノ如ク成ヘキハ安カラリ、イカヽセント云ケル時、鳥井強右衛門

遣シ出テ某屋傘ニ替ハリ、諸卒ノ組ヲ、救
ハントセシケレハ、家正深ク感シテ、其意ニ
任カス、隆右エ門申ケルハ、此カコトシテ出
得タラハ向フノ山ニテ、煙リヲ揚ベシト、
約シテ出ケルカ、弁若ノ傘ニ替ル玉
ノ綿ヲ伺厭ヒケン武士ノ道ト派シテ五
月十四日ノ夜出ケルカ、翌朝、枳園ノ煙リ
ヲ、彼山ニ立シニヨツテ、城中大キニ競ヒ
タリ、サテ隆右エ門、信長公ヘ参リ、件ノ様

子ヲ、言上シケレバ、幾重トモナキ魔ニヲ出、是マデ来ル事、忠義ト云ヒ、胥謀トイヒ、信長大キニ感ジ玉ヒ、時ヲラウツサズ、後詰有可キ由、仰セ合メラレ、隆右エ門ヲ帰シ玉フ、隆右衛門長篠ヘ帰リ、何トカシテ城内ヘ可入術モヤト、案ジ煩ラヒ、方々ト、跡廻シテ見ル所ヲ、敵見付テ、大勢集ツテ終ニ、隆右衛門ヲ搦メ捕ニ、子細ヲ尋子問、隆右エ門、件ノ様ヲ有ヲ有ノ不残語リ

ケリ、暫時有ツテ武田典厩、蒲右エ門カ前
ニ来テ云ハレケルハ、御過コト、勝頼委細
ニ聞及ヒ玉ヒタリ、感ジ思召ノ條、御過同
心ニ於テハ、一命ヲ助ケ、所領ヲ、アテラル
可シトノ事ナリ、喜ト、喬家ノ座ト、ナリ玉
ヘカレト云、蒲右エ門申ケルハ、忝キ御意
ナリ、如何サマ、其御意次第ト諾ス典厩悦
ンテ同ク、其義ナラハ、御過ヲ頼ミ度コト
有、今晩城戸ノ本マテ行テ、城中ノ者ヲ呼

出シ云給ハンニハ、信長公ヘ、敵スル國々、
蜂起シテ、御手前ニモテアツカヒ玉フ故、
當城後詰ノ事、中々不成、不及是非ヿ申リ、
急キ城ヲアケ渡シ、早速、退散仕スベキト
ノ旨、御返答ナリト云候ヘト云、強右エ門、
安キ義ナリト領掌シケレハ、則強右エ門
ヲ、高手ハカリヲ柳ノ木ニ縄ヲ体ニ歩行ノ
者十人計リ相添、城ノ口ヘ夜ニ至ツテ連
行ケリ、城ノ口ニナレハ、高声ニ呼ハリケ

ル八、彌右衛門コソ、只今ハ能リ帰リタリ、信長公ノ御返事ヲ承ハヘキトノ、城中ノモノ共、喜ヒ勇ンテ走リ出、先ツ内ヘ入リ候ヘトノ、彌右衛門申ケルハ、信長公ノ御意ニハ、近日ニ後続有可キノ条、心易クゾンジ堅固ニ城ヲ守リ候ヘトノ御事ナリ、此旨、家正ヘ申上候ヘ、我ト欲、方ヘ捕ハレ、縄ヲカケリ居ル間、是家嫡ノ言葉ソトシケリ、案ニ相違ハ、彌右衛門カシ分ナリケレハ、連

行タルモノ共、則チ、理右衛門ヲ引返ヘシ、
勝頼ノ御前ニヲイスヘシカノ様ヲヲ申
上ル、勝頼聞シ召テ、是義也ナリ、助ケテ、歎
ヘ返シ候ヘト仰テレケル、然レ共、理右エ
門、興覚ト、約ヲ変レタル上ハ、生命仕ル可
キヤウナレト申切テ、終ニキラレケルト
ナリ、理右衛門城中ヨリ出テ、信長公ヘ通
シ、信長公、家康公、後詰アリシニヨツテ、落
城セザルノミナラス、勝頼ヲ討ル大キニ

勝利ヲ得タリ。是城中ヨリ忍ヒ出タル後
ナラスヤ、
私ニ曰、淺右衛門勇ハ勝レタリト雖トモ、
忍術ノ謀計ウスク、且ツ深理ヲ知ラザル
ニヨツテ、惜ヒカナ、此死難ニアヘルマト、
返スヾモ無念ノコトナリ、
十六ノ關法世ヲモ乱ス後、其理ヲ知ル則ハ乱レ
ナカラレムル徳ト云ハ、如何、　答忍法ヲ
以テ、法世ヲ乱ス理アリ、其淵源ヲ知ル則

ハ、更ニ、乱レナカラシムル事必セリ、又
後醍醐ノ天皇、兵ヲ起サセ玉ヒ、平ノ
高時入道ヲセメ給ヒ、天下一統ニ、御治世
アリシ後、足利尊氏、新田義貞、武将ヲ二ツニ争ソ
ヒ、心底ニ憤リヲ含ミ、威勢ヲ、アラソヒケ
ル折節、尊氏卿ノ謀計ニ、天皇ノ御局准后
ト申ハ、大塔宮尊雲親王ノ従母ニテ、天皇、
無二ノ、御寵愛ナリシ女中ニ、金銀珍貨ヲ、
賜カニ送リ奉リ、取入、義貞ヲ讒言シ、天下

ノ如ク天皇ヲ背キ奉ル様ニナレバ、剰サヘ大塔宮ヲ、ザン言シテ、鎌倉ニテ土ノ口ウニ入奉リ、終ニ殺害シ奉ル、天下ノ武士ノ恨ミヲ含ム様ニ、謀ツテ後叛逆シテ、義貞ト、合戦ニ及ビシ時、天皇ハ、義貞卿ノ、義士タルヲタノミ、義貞ト共ニ、ヒエノ麓山ニ、御籠テセヨトニシカバ、武士トモハ、感激セズ、尊氏ニツクヨウテ、官軍ハ、漸々ニ薄クナツテ、義貞終ニ、計負、北國ヘ落行

越前足羽ノ城ニテ、流レ矢ニ當テ、討死シヲ、一類、所々ニテ討レシカハ、無雑。天下ヲ、尊氏ニ、奪ハル尊氏卿ハ、持明院ヲ、帝位ニ即ケ參ラセ、自ラ天下ノ武将ニ備リヲ、是、武運ノ、ヒカラシムル所ト云ナカラ、傍ニ淳后ト云、久ノ忍術ヲ以テ、年々ト謀ヲ、廻シ、世ヲ乱シ、勝利ヲ得タリ、太平記ノ大概ヲ見テハ、右ノ意味知レ雑久條々ニ入ヲ作ケ、熟讀スル則ハ此ノ忍術

ヲ以テ、世ヲ乱レタルコト、顕然タリ。
此謀計タルコトヲ、下官ニ告ル藤房、
第、嘯正成ナント、祚レ奈レケレ氏、正成ヘ、
恐レタルニヨリテ、諫言ヲ奉ルコトハ、祖
成、藤房卿ニ密談シテ、則此御天皇ヘ、諫
々諫メ玉ヒシカ氏、終ニ御用ヒナキニヨリ
テ、彼卿ハ、隠遁シ玉ヒ、正成、世ヲ見限リテ、
湊川ニテ討死シタリ、秦ノ世ニ斎リテ、
帝、驕リヲキハメ、世上四民ハ、恨ミ一ー念

リヲ含ミ、國々ノ諸侯、謀叛ノ心萌サルアリ
レ折カヽル陳勝ト云モノ、諸國ノ海過ニ出
テ、綱ニカヽツテ上リタル、イキタル奥ヲ
買求メ、木札ニ、陳勝王タラントト書付ケ其
奥ノ口ヨリ、腹中ニ押入テ、亦海中ヘ放レ
ケリ、此奥、數万ノ事ナレハ、亦漁父ノ綱ニ
カ、ツテアガリ、諸々ノ肆ニ出ケルヲ、買
木ノタル着トモ、此奥腹ノ札ヲ見テ、國々
ニ、奇異ノ思ヒヲナシケルトカヤ、此時ニ

至テ、楚項羽漢高祖トモニ討ワテ、秦ヲ亡ヶ、終ニ、秦ヲ亡ボシテトナリ、如此、和漢トモニ、治リタル代ヲバ――乱世トナス、此忍術ヲ、辨ヘ知ル時ハ、其心胸サレヲ知ツテ、其謀計ニノセラレス、治ノ静ムルノ理アルコトナリ。

七の門、國都ノ廣キヲ、地焼ノ時人数ヲ用ヒズシテ、残ラズ焼立ル徳有リトイヘ、先殿アリ、討、養賀若弼カ、江南ヲ平ケシ時、江南

ニ、積ミ襲スル所ノ貨穀ヲ、忍者ヲ遣ハシ、
コレヲ焼、江南裏敗ス、亦、高祖、自馬津ヲ
渡ル時、瑣舸ノ、麻庫ヲ焚レモ、忍者ヲ以テ
ス、ル、ソ、火ヲ発スルニ、時日之習ヒアリ、風
ノ順逆、又ハ、風ノ永ク吹、早ク止ムニ、傳受
アリ、カ様ノ理ヲ、能ク塾得シテ、其時所ノ、
宜シキニ随ヒ、忍者手組手配リヲ、能ク定
テ、焼ル時ハ、イカホト廣キ、國郡タリトモ
云ヒ、多勢ヲ用ニズシテ、焼ケスル後、不可

勝計ヲ、

十八日、焼草ヲ用ニズシテ軍ヲ相圍ム、狼煙、早速ニ高ク揚ル、德トハ、如何。答、忍法ニ、狼煙、飛鉢火本、様々ノ、相圍ノ火方有リ、味方ト、相圍ヲ定メ置テ、火ヲ以テ、通スル時ニ至ッテ、コレヲ用ユ、織田信長公、名古屋ノ城ヲ、林佐渡守ニ、預ケ玉ヒシカバ、佐渡守、英、筆蕃作守、望而權大ヲ相語ヒテ、信長公御舎弟勘十良殿ヲ、守リ立ントテ、逆心ヲ

企以北ヨト信長公御馬ヲ出シテ、清洲ノ御居城ヨリ、五十町バカリ東ノ石塚村ニ要害ヲ拵ヘ、佐久間大学ヲ入置給フカリテ、八月二十一日ヨリ犬山ノ上続キ、於多井川ノ水、勢ヒ烈ク出テ、河波奔ヲ浸セリ。主ハ能時節ト申恩ヒチン、同ク廿四日ノ朝カケニ、未盛ヨリ、柴田権六一千余騎ヲ率シウチ立、林蓑作守モ、千騎計リニテ打出、両口ヨリ懸ル時ニ、石塚城ニ拵寄ル、彼城ハ俄カニ拵

ヘタル事ナレハ、塀塀一重ニシテ、大歌ヲ
汚クコト、雖叶ケレハ、水練ノ上手ヲ撰ン
テ、清洲ヘ、急ヲ告奉レ、民達セサルヤラン、
更ニ、御返事モナレ、其時、大将狼煙ヲ挙ケ
レハ、信長公御覧アワテ、大将、義ニ友フ
ト見ヘタリ、明ケ、如何ナル身トモナラ
ハナレ、今日ニ於テハ、信長合カセテハ、叶
ハレト、打出給フ、然ト雖民。於タ井川ノ水、堤
ヒ、越ル計リ出テ、度ニ玉フヘキ様モ、無

リケレハ信長公、河岸ニテ、モダヘサセ玉
フソ、タノモレケレ、角テ、鉄炮矢サケビノ
聲、歌味方特ノ聲、隙ナリ聞ヘケレハ、我爰
ニアリナカラ、大塵ヲ討セナハ、骸ノ上ノ恥辱
ナルヘレ、水ニ溺レテ傘ヲ失フモ、皆天命
ナリ、爰ヲ渡セト下知シテ、御馬ヲ、川ヘ打
入玉ヘハ、折節ノ人々、我先ニト打入ケレ
ハ、一氣ノ剛キハ、トララスト、云ヿナキニ
ヤ、難ナリ、向ノ岸ニ、惣勢ドット揚リケル、

誠ト云、宇治川ノ先陣ヲ、是ニ心遣レト覚
ヘケル、柴田権六コレヲ見テ、宛竟ノ兵一
千余騎ニテ、海道ヲムケ（一云西向ノ三字作）ニ馬ヲハヤメ
テ馳来ル、林若作守モ、千余騎計リニテ、北
ニ向ツテカヘリ来ル、清洲勢ヅツカヒニ、七
百余騎ニモ足ラサルニ、殊ニ川ニ苦レケ
レハ、痛ハレヤ、信長一方ヲ死ニ生トソ見ヘ給
フ、去トモ七百余騎ヲ、三手ニ分ケ、各ヲヲ
合セテ、戦ヒケレハ、大勢ナリトイヘトモ

信長公明將ナレハ、小勢ニ懸立ラレ、剰サヘ、林美作守ヲ、討レケレハ、柴田権六、林佐渡守ヲ叱ハレトヤ思ヒケン、終ニ八方ヘ逃チリタリ。信長追討ニ、頗ル百余リ討取リ、心地ヨレト悦ヒ玉フコト限リナレ、是大将早速ニ狼煙ヲアケタリレ後ニヨツテ、百死ヲ出タリ。

十九ノ問　近夫ノ士ニテ、大身ノ寵臣ヲ討ツ徳ト云ハ、如何、答忍術ニ隠蓑隠笠ナント

云ヶ便アリ、歌ノ強弱、逸如ノ高ニヨリテ、
千変万化ノ術アリ、暫ラク、右ノ辞ヲ云ニ、
作豆國ノ住人、曽我十郎祐成、同五郎時致
ハ、駿河國富士ノ裾野ニ、井出ノ屋形、頼朝卿
ノ御陣ニ忍ビ入テ、親ノ敵、工藤祐経ヲ討
テ名ヲ天下ニ揚ケシコト、皆忍術ヲ以テ
事果ノ本意ヲ遂タリ、然レドモ忍術タルコ
トヲ、世上ニ人知ラズ、此忍術トイフハ、祐
成カ思ヒモノニ、相模國大磯ノ虎ト云遊

后ニ、多年相馳テ、清秋ヨリ通ヒケリ、是ハ
歟ヲ討ン謀コトニテ、陸テ色ニ迷ヒタル
ニハアラズ、其心ハ、大磯ハ海道ノ入口ナリ、
祐経(ママ)仔豆國ヨリ、鎌倉ヘ通フナレハ常ニ、
大磯ハ虎カ本ニ篭リ居テ、祐經モレ、遊君
ニ馴ルコトアラハ虎ニタヨリ、其遊君ヲ
以テ、忍ビイラントテ、巧ニ居タリ、案ノ如ク、
信士ノ御狩ノ時、手越ノ少將トカ遊女ヲ、
祐經ヨビタリ、是ヲ聞事ヒトシク貴ケ

業祐經カ屋形ヘ忍ニ入ケリ内ヨリ少将
ヲ聞キテ兄弟ヲ時入テ討セタリト云
云此等ハ世ニ知テサル所ナリ此兄弟欲
ヲ討レモ忍術タルコト瞭然タリ往古ヨ
リ近世ニ至ツテ忍術ヲ以テ大身ノ雄ヲ
殺ヒレ事先蹤多シ依テ無限而已其一
二而已
此ノ開身ノ無遁時ヲ其難ヲ遁ルトハ如何答
忍理ノ秘奈甚時頃ニ隠ニ急雑ヲ遁ル

謀計、遠ケリト云ヒ、極メテ、秘事タルニヨツテ、是ニ顕サズ、第一、忍道ニハ、剛臆ノ批判ナル、イカヤウニ臆病者ハ名ヲ得ルト云ヒ、其恥名ヲ顧ミズ、詭言謀言ヲ以テ、其時誰ヲ通シ、後道ノ勝利ヲ得ルヲ、肝要トス、然テ、戦軍ノコトニ於テ、指揮ル所ハ、剛臆ヲ論セス、始終ノ勝ヲ取事ナリ、前ニ云、鳥井強右エ門ナント、此理ヲ知ラズ、生ヲ、城中ヲ出ルトキ、主君ト、約束相図ヲ

ナレ尾州ヨリ帰リ来ラテ、城中ヘ入ル事難ク成ラバ、敵ニ捕ハレタラン時、敵ノ云ヘト言フトクニ申スヒ、実ヘ此道理ニ可仕ノ間、信長家康後詰ノコト、近々御出馬ト、御心得候ヘトノ文モノ、ナラバ、行末意ヲ内間タランニ、情ヒカナ、道理ヲ不知故ニ、後詰ヲ君ノ為ニモナラズ、アヘナク死刑ニアインコト可歎々々所詮武士ハ、忠勇謀巧ノ四ツニ、意夜身ヲ委ス事

ナンニノ下要綱ヲ会通ヲ其後ノ時機ヲ随テ仕ヘラナル文字ヲ脱ス

法忍理ノ至極ヲ、可参考ナリ。

問忍術ノ諜言ヲ以テ、難ヲ脩遁レタル、先駆アリヤ、答越前國、金崎ノ城ノ後続ニ、里見信濃守ヲ大将トシテ、仁生一族寄セ二戦ニ臨ヲ、敗軍セシ時、仁生判官カ家ヲ、仁生太郎左衛門トイヘルモノアリ、戦場ニテ生捕レヌ、敵将師基カレニ向フ後ロニ、軍勢アリヤト、太良左衛門カ云ク、義治三千余騎ニテ、水間嶽ヲ、カタノ玉フトナリ師基、サ

テハ大事ナリ、是程ニ勝タル軍ニモ力退
シテハ、夏ナンスルソト云テ、引返シヌ、先陣
ハ、木尾嶽マデ、退ケナント云シカ、彼者
ノ云フニ仍テ、是ノ如トナリ、軍終ツテ後、
生捕トモ、本陣ヘ引具シテ帰リテ此事ヲ
ハ、余ノ生捕ニ問フニ、無左トノ云フ、師泰不
思儀ニ思テ、此事ヲ太郎ニ尚ニ問ヒ彼カ
云フ、我カ陣タルハ偽リニテ候、木尾嶽ヲ
テモ、退ケ玉ハヽ寄手皆モフベケレハ、味

方ヲ助ケントテ、中タリトシテ、師恭ヲ、ケルハ、御遠倫ハリレ放ニ、敬ヲ討殊レタルハ、遺恨ノ次第ナリ、然レ共、御為ニ、謀コト深ク、忠アル人ナリ、誰モ弓矢ラトル身ハ、和ナル人ノヤウナル、郎徒ラコソ、近ク深クレ、召ツカヒタキ、コトナリトテ、其事ヲ感ビレ、御遠一人ヲ、討タレハトテ、別事アルヘキカトテ、助ケテ、杜山ヘカヘレケリ、殊リノ生涯ニ、謀セラレレトモ、又赴王句踐、

會稽山ニテ、呉王夫差ニ圍マレ、危フカリシ時、越ノ臣大夫種ガ、謀コトニテ、西施ト云美人ト、財宝トヲ、呉王ニ献ジ、此度ノ圍ヲ解テエルヽ玉ハヾ、勾踐ナカラ、呉ノ臣タラント申ケレバ、夫差ガレラ許諾セント云、伍子胥諫テ、此度救ザルンハ永ク、呉ノ禍ヒタラント、申ケレドモ、太宰嚭ト云モノ、越ヨリ賂ヒヲ請テ様々取成シ申テヨフテ、呉王終ニ、圍ヲエルヽケリ、其後、

呉王ノ齊ノ國ヲ討ケル時ホ伍子胥諫メテ申ケルハ是ヲ病ニタトヘハ齊ハカユカリノ如シ越ハ腹中ノ病ナリ先ツ早ク越ヲ可討トスケレトモ用ヒスシテ終ニ越ノ為メニ亡サレタリ唐呉魏ノ兩國亦ヒニ國ヲ爭ソヒテ戰ヲ挑ムニ依テ魏國大軍ナレハタヤスク勝ツ事ハカタシ故ニ呉ハ孫權ノ臣下偽ツテ魏國ヘ返忠ヲセンコトヲ申遣ハシケレハ魏ノ將ゴレヲ聞

テ謀ト悟ツテ、其使ヲ禁メテ曰ケルハ、吾
國ニ元長在原權ノ心ニメカヒ、門ヲ閉ヂス
ル内ヲ聞ヨリ、定テ加様ニ曰ン事ト兼ル可ト、
兼テヨリ相待可ニ、何トレテ、遅ク参リケ
ルソヤ、中々汝等カ如キ者ニタバカラル
ベキ、我ニ冰スト云テ、既ニ死深ニ行ハントス
ル時、カノ使ノ士、カラ〳〵笑ヒケレハ、魏
ノ將曰ケルハ、イカニ汝、我ヲ謀リニ来ル
程ノ者ナラハ、定メテ吾國ニテモ勝レタ

ル、富士ニテアランコト思ヒシニ、サハナクシテ、汝ホドノ臆病者ヲ、連レテ行クコトヨ、如何シトナレバ、人ノ死ニ至ツテハ、憂ル処アル事、人間ノ本心ナルニ、汝今却テ笑事、是本心ヲ失フタル、モノカラト申ケレバ、其ノ俠太ニ怒ツテ、魏ノ将ヲ、殺シテ之ケルハ、士ノ死期ニ臨レタルトニルコト、情次第ナリ、我モ死ノカナレキコト、今ニ怠レタルニハアラス、然共笑フヘキ事

アラハ、死期ト云氏ニ笑ハレマレキヤ弓終前
ラ帯ヌル程ノ者ニアタハス恥辱ラカ、
セント、欲スルモノカナト申ケレハ魏ノ
将之ラ聞テ、只今死ニ臨ン天、如何ナレハ、
哉ニ、笑事（三サホドノ三字作）アリヤト尋又使ノ士申ケルハ、
今云テ、無用ノ事ナル氏、士ノ恥ラ其ヘラ
レン事、口情サニ申者ナリ、然今此死刑ニ
逢フト、云共迚ン可笑事ナリ、如何シトナレ
ハ、天下ニ、大イナル（三字ナレ）ル三人ノ惑者アリ、其故

ハ、先是程ノ大事ヲ、御遣ノヤウナル、疑ヒ多キ人ヲ不知シテ、此事ヲバほレ遣ハス我カ主君ヲ惑有リ、亦御遣疑ヒノ心ヲ生ム、跡カタナキ心ヲ、実トシテ、我ヲ教ス、惑有リトカ、ル惑ノ人ヲ（一有ノ二字ニ作ル）ハ、マトノ人ニ頼マシテ、使ニ来ル、昔トリ今ケ、大キナルマトヒ有リ、故ニ、大ノ惑有ヨリシテ、先ニ七ヒタレハ、次ノ惑有モ頓テ可セ世ニ人、死スル習ニ、多シト云ヒ、我カ如クナル、死ヲ

ナス事、誠ニ勢ヒアラレト思ヘハ、關ラス
一笑ラヤレ文ハ、今恥ラ共ヘラレン情キ
事ニ存スト云ヒ、カール身ニナレハ、カ
ラ不及トヰケレハ、熱ノ將是ニ心ラ
亂ヘレテ其ノ使ノ士ラ帰シ、謀コトニノセラレ、
戦ヒニ負タリト云ヒ、從ヒ死ニ及フトモ、
計コトラ忘ル、事ナケレハ、必ス難ラ遁
ル、事、古今先蹤多シ、

上巻

或るいは問。忍びを用いて合戦の勝利を取るべき、其の利徳は如何ほど有りや。
答。忍びを用いて勝利をとる徳、広大にして勝計すべからずと雖も、先ず二十の大利あり。

問。二十の大利、聴き得べし。
答。一に敵国の地形の険易広狭を知る徳。二に敵城の案内を知る徳。三に敵将の知愚を知る徳。四に敵方の内輪を隔つる徳。五に降人、反り忠の者あらしむる徳。六に敵の密計、進退、備え無きを知る徳。七に敵将をころす徳。八に堅固の敵城、早速没落令むる徳。九に敵籠城の人数を煩痛〔苦しめ痛める〕せしむる徳。十に十死の合戦に勝利を得る徳。十一に天下の人民を味方の忍者として勝利を得る徳。十二に敵の忍者を味方の城陣へ入れざる徳。十三に味方の戦い利あらざる時、其の威を失わず、二たびもりかえす徳。十四に味方の反逆を早く知る徳。十五に味方籠城の時、後詰の大将と互いに通路の徳。十六に治世をも乱す利あり、其の理を知る則、乱れなからしむる徳。十七〔に〕国郡の広きを地焼の時、人数を用いずして残らず焼き立つる徳。十八に焼草を用いずして、軍相図の狼焔早速高く揚げる徳。十九に匹夫の士にして、大身の讐寇〔仇敵〕を討つ徳。二十に身の遁れがたき時、其の難を遁るる徳。是なり。

此の如く、其の徳広大なるを以て、孫子に曰く。*微なるかな微なるかな、間を用いざる所無し。亦名君、賢将動きて人に勝ち成功すること、衆に出る所以の者は先に知ればなり。先に知る者は〔底本欠、以下は『孫子』より追補。〕鬼神に取るべからず、事に象るすべからず、度に験すべからず。必ず〔人に取りて敵の情を知る者なり。五間俱に起りて、其の道を知る事莫し。是を神紀と謂う、人君の宝なり。これ兵の要、三軍の倚って恃動くところなり、と云々。

愚将・盲将は此の理得ある事を知らずして、これを用いず。故に孫子、深歎して云う。相守る事数年を以て争一日の勝ちを争う。爵禄百金を愛し、敵情を知らざる者は不仁の至りなり。人の将に非ざるなり。主の佐に非ざるなり。将の主にあらざるなり、と重々これを戒む。皇朝にても明将は皆、忍びを宝とす。世に名を知らる程の大将は、忍計を用いざるは、一人としてこれなきなり。

【註】

○孫子に曰く　現代語訳の処で『孫子』を引用した。底本は引用が不完全である。現代語訳の箇所（二七一ページ）を参考にして頂きたい。

一

問。敵地の形を知って味方勝利の徳は如何。

答。凡そ陣屋をかけ、或いは備を立てるも、兼ねて地の形、地の坪数を知って、味方人数の積りと引き合わせ、分別せずしては成りがたし。亦、城を責め、或いは合戦をするも、其の辺の地形によって術謀略かわることなり。故に地形の様子を知る事、計謀の根源なり。

故に孫子に曰く。地形は兵の助けなり。敵を料り、勝ちを制するに、険阨遠近*を計るは上将の道なり。此れを知りて戦に用いる者は必ず勝つ。これを知らずして戦に用い〔ざる〕者は必ず敗るるなりと云々。また曰く。

山林の険阻沮沢(しょたく)*の形を知らざるは、軍(いくさ)に行くこと能わずと云々。是によって明将は征伐の前方に先ず忍者を遣い、敵国の地形を絵図土図にさせ、御覧あって、諸事御工夫あって、人数を立て、備えを定め、攻め口を考え、始に勝ち、後戦の理を正しくして後、出陣有る〔底本は「者る」〕によって、物ごとに行きあたる事なし。謀ごと調う故に勝利疑いなきなり。敵国のみにあらず、忍びを用いて天下の抜道小路まで見せしめ置く。故に何地の合戦にも勝利あり。所謂、言前に定む則躓(つまず)かず、事後に定む則因らず。行く前に定む則疚(なや)まず。道前に定む則窮(ふさが)らず。これ忍びを用いるの徳にあらずや。

問。古の明将、兼がね敵国の地形を忍者に見せしめ、合戦の勝利ありし先蹤*ありや。

答。治承四年〔一一八〇〕、頼朝、伊豆の国にあって平家を亡ぼすべき陰謀を運らしたまいけるが、先ず当国に住みける平家の一族兼隆(かねたか)を討たんと思われけるが、彼の兼隆が住みける山木と云う所は究竟の要害にて、前後の道、人馬を労すべきと見えける故に、いかがせんと思われける処、頼朝の内に邦道(くにみち)〔通〕と云う者あり。兼隆と仲よかりければ、此の邦道を兼隆がもとへ遣わし、数日遊ばしめ、山木ガ城の案内を見せしむ。邦道、ひそかに彼の地形要害を絵図にして、日を歴て頼朝の本へ帰りて是を見せ奉(たてまつ)れば、頼朝大いに悦んで兵どもを招き集め、彼の絵図をみせ、諸事合戦の内概して後、山木へ出陣したまい、一戦に打ち勝ち、兼隆を討しとなり。

武田信玄の侍、小山田兵衛尉、八王子衆を攻め取らんとて、二、三年以前より敵方の者を抱え置き、敵地の様子を問い、其の上に亦忍者を遣わして敵国の地形を絵図にせさせ、〔手に〕取って常々是を見る故に、自国よりも敵地の案内を能く知りて、年月、合戦の工夫をし、さて出陣したり。合戦のときも忍者には角取紙のわり符*をもたせて、幾人も山林に隠し置き、敵の様子を昼夜を云わず兵衛尉に告知せたり。加様に地理を能く知り、敵の進退変動を能く知って、手配を能くして戦いしによって、小山田が二百騎の勢を以て八王子衆の三百騎に即時に計り勝ちしと云々。惣じて信玄は征伐せんと思召す敵へは三年も前より忍者を遣わし、敵地の絵図並びに内証を

よく聞き定めて、合戦の談合工夫ありしと甲陽軍鑑に見えたり。

問。敵国の地形の案内を知らずして合戦の勝利を失いし先蹤ありや。

答。漢の武帝の時、大将軍衛青と云うもの匈奴を攻めける時、李広と云う者も先陣の大将にて衛青に相随いけるが、大将の下知にて李広脇道より行けるに、その地の案内を知らずして、道に迷いて其の合戦の手に合わざりければ、後、大将軍より糺明の時、その手に合わざりし事を恥じて、李広自害して死にけり。是、忍びを用いずして地形を知らざる禍にあらずや。

【註】

○**険阨**　険しくて狭い。○**沮沢**　行動を阻む急な沢。○**先蹤**　先例。○**わり符**　割符。

二

問。忍びを用いて敵城の案内を知り、味方勝利の徳と云うは如何。

答。忍びを用いて敵城の案内を能く知り、且つ籠る所の人数の分限、兵粮の多少、用水の様子など能く知る時は、それに相応の計謀を以て攻めるによって、味方越度*なく其の城を攻め落とすこと疑いなし。是、忍びを用いる徳なり。

問。忍びを用いて敵城の案内を知り、城を落としたる先蹤ありや。

答。河内国赤坂の城は、元来楠正成取り立ての城なり。往年、六波羅、関東の大軍に攻められし時、正成謀を以て赤坂を立ち去りしによって、其の城を湯浅孫六入道へ預けり居たり。その後、正成は大和国金剛山の奥、観心寺と云う所に隠れ居たり。郎徒五百人、大和、河内、紀伊の山中所々にわ散りて隠し置きけり。其の頃、大

塔宮*、吉野に一城を構え、御陣を召されけり。さるによって、正成、家子郎徒を集め、内々用意し、討ちて出んと思えり。然れども案内をも知らざる他領の合戦をせんよりは、家子郎徒まで能く案内を知りたる赤坂の城を攻めば勝利あらん。然らば味方の威つよくなる道理なれば、先ず赤坂を攻めんには如かずと思いけり。されども湯浅居住の後、いかようの要害を仕置きたるも知らず。籠る所の人数の分限も知らず。旁以て忍びを入れてよく見おおせんとて、逸物の忍者を遣わし、城中の様子を見せしめけり。忍者帰って城内の様子、有りの侭に正成に語る。正成は思慮深きものなりければ、猶今一往よく見おおせんとて、恩地左近太郎を忍者に交えて指し遣わす。恩地、謀あるもの成りければ、一つの計をなして白昼に城中に入りて城のようす、人数の分限、思う儘に見て帰りけり。

正成これに問う。右忍者の云いしに違わず。さらば疑うべきにあらずとて、元弘二年〔一三三二年〕四月二日に観心寺を立って、三日の卯の刻*に五百余騎にて赤坂へ寄せたり。湯浅が勢と正成が勢と対当の勢なりと云えども、正成謀を以て勢を寡なく見せ、湯浅城より出て戦うように挑みけれども、湯浅も思慮ある者にて、出て戦わず。午の刻*になりければ、正成一里あまり引き退きて、広野の中に小高き山の、敵よせ来たるとも防ぐに便りある所の有りければ、爰に一夜陣を取す。明ければ四日、まだ卯の刻に、赤坂の城に入れ置きたる正成が忍者来たって正成に告げるは、城中兵粮乏しきによって、紀伊国河瀬より兵粮を取りよせ候筈にて、大勢を河瀬へ遣わし候えと云ければ、正成、去る事もこそあれとて、和田、恩地、安間、高安等を始めとして、宗徒の勇士三百余人を紀伊と河内の境なる木目峠へさし遣わす。同じく七日夜半ばかりに、湯浅が兵士等三百余人、兵粮を馬に負わせ、亦背に負いて木目峠を越えける処を、和田、恩地三百余騎は残して、百騎咄とかけ出しければ、湯浅が郎徒、馬をすて、背に負いたる米を捨てて逃げにけり。楠が郎徒、態と追わざりけり。その故は三百余騎、備を乱して追わんに、若し功なる兵かけぬけて、赤坂の城に入りて此の由を知らせば、後の謀成りがたき故に、一人も通すまじき為なり。首十二取りけるとかや。和田、恩地、其の夜の中に帰って件の様子を楠に告げる。楠是を

聞きて、云くすば城は落としたるぞ、一術せんとて俵に甲冑を入れ、それを馬につけ、或いは士卒に荷わせ、おい子させて、湯浅が郎徒の兵粮を取り帰りし者どもの躰に似せて、明ければ八日、まだ卯の刻に右のものどもを城へ入らんとさせ、楠是を討ちて、付け入りに城へ入らんとする躰に見せければ、湯浅是を見て、さては我が士卒の河瀬より兵粮取り帰るを、楠討つぞと心得て、急ぎ城戸をひらき、彼の似せ者を城中へ入れて、楠が勢を追い払わんとひしめきけり。其の間に城中へ入りし楠が郎徒ども、俵の中より甲冑を取り出し、ひしひしとかため、おめき叫び*て湯浅が勢を突き伏せ切り伏せ戦いければ、楠は外より爰を先途*と攻め付けたり。これによって湯浅勢い尽く力屈して叶わずして、甲をぬぎ、降参しけり。赤坂の城は楠取り立にて、案内能く知りたるさえ、是の如く重々忍びを用ゆ。況や不案内なる他国他領の城を攻めんには、専ら心を用うることを知るべし。

【註】

○越度　落度　○大塔宮　後醍醐天皇の第一子・護良親王で天台座主になっていた。元弘の乱で還俗して護良と名乗り、後醍醐天皇に味方して討幕運動の中心にいた。しかし建武中興の政府では天皇と対立し、建武元年（一三三四）に鎌倉に幽閉された。翌年の中先代の乱に乗じて足利直義に殺害された。○卯の刻　日の出、午前六時頃。○午の刻　正午頃。○おめき叫ぶ　喚き叫ぶ。○先途　前途、道筋。

三

問。敵の智愚を知る徳と云うは如何。

答。喩ば兵法は転変の如く、われ転変の上手たりと云えども相手手位を知らざれば妄に打ちがたきが如し。故に孫子にも、〔「道」欠〕天地将法の五つの事を以て味方を能く整治せしめて後、敵と味方と七つのたてくらべをして予め勝負を察し、必定、味方の勝ちに極めたる時、出陣せよとあり。是を七計と云う。亦和朝の兵法にも、先ず大図、剛強破若柳の五敵の位を弁まえ定めて後、其の敵につりあいたる謀ごとを定めてこれを討つこと、兵

塔宮*、吉野に一城を構え、御陣を召されけり。さるによって、正成、家子郎徒を集め、内々用意し、討ちて出んと思えり。然れども案内をも知らざる他領の合戦をせんよりは、家子郎徒まで能く案内を知りたる赤坂の城を攻めば勝利あらん。然らば味方の威つよくなる道理なれば、先ず赤坂を攻めんには如かずと思いけり。されども湯浅居住の後、いかようの要害を仕置きたるも知らず。籠る所の人数の分限も知らず。旁以て忍びを入れてよく見おおせんとて、逸物の忍者を遣わし、城中の様子を見せしめけり。忍者帰って城内の様子、有りの侭に正成に語る。正成は思慮深きものなりければ、猶今一往よく見おおせんとて、恩地左近太郎を忍者に交えて指し遣わす。恩地、謀あるもの成りければ、一つの計をなして白昼に城中に入りて城のようす、人数の分限、思う儘に見て帰りけり。

正成これに問う。右忍者の云いしに違わず。さらば疑うべきにあらずとて、元弘二年〔一三三二年〕四月二日に観心寺を立って、三日の卯の刻*に五百余騎にて赤坂へ寄せたり。湯浅が勢と正成が勢と対当の勢なりと云えども、正成謀を以て勢を寡なく見せ、湯浅城より出て戦うように挑みけれども、湯浅も思慮ある者にて、出て戦わず。午の刻*になりければ、正成一里あまり引き退きて、広野の中に小高き山の、敵よせ来たるとも防ぐに便りある所の有りければ、爰に一夜陣を取す。明ければ四日、まだ卯の刻に、赤坂の城に入れ置きたる正成が忍者来たって正成に告げるは、城中兵粮乏しきによって、紀伊国河瀬より兵粮を取りよせ候筈にて、大勢を河瀬へ遣わし候えと云ければ、正成、去る事もこそあれとて、和田、恩地、安間、高安等を始めとして、宗徒の勇士三百余人を紀伊と河内の境なる木目峠へさし遣わす。同じく七日夜半ばかりに、湯浅が兵士等三百余人、兵粮を馬に負わせ、亦背に負いて木目峠を越えける処を、和田、恩地三百余騎は残して、百騎咄とかけ出しければ、湯浅が郎徒、馬をすて、背に負いたる米を捨てて逃げにけり。楠が郎徒、態と追わざりけり。その故は三百余騎、備を乱して追わんに、若し功なる兵かけぬけて、赤坂の城に入りて此の由を知らせば、後の謀成りがたき故に、一人も通すまじき為なり。首十二取りけるとかや。和田、恩地、其の夜の中に帰って件の様子を楠に告げる。楠是を

いけるは、合戦の勝負は必ず勢の多少によらず。唯、士卒の志ざしを一にするとせざるとなり。先度の軍に隅田・高橋大勢にて打ち負け引き退きたる跡へ、僅かの勢にて宇都宮相向かう志ざし、一人も生きてはかえらじと思うべし。其の上、宇津宮はきこゆる猛将なり。七百余騎、志ざしを一にして進まんに、味方相向うて戦わば、縦勝と云えども、当手の兵大半うたるべし。天下の事、全く此の度の戦いによるべからず。また味方を初度の戦いにうたせては、後日の戦いに誰か力を合わすべしとて、天王寺を引き退きけり。四、五日あって楠、敵に大勢なりと見せんために、野伏どもを四、五千人馳集して、勇士二、三百騎さし添え、四方の峰々にかがりをたかせ、両三夜に及び次第に相近づきければ、宇津宮勇気つかれて、僅かの勢にてあの大敵にあたらんこと叶うべからずとて、天王寺を立ち退きて上洛〔底本は「落」〕す。是、楠が宇津宮が勇猛を知りて戦わずして勝を取る軍法、完く本を知るにあらずや。

漢朝にて後魏*の太武*〔底本「大武」とあるが太武帝の誤記〕と云う人、宋の臧質と云うものの籠りし肝胎の城を攻めし時、臧質、太武の智愚を密計を以て聞きたるに、太武は大きに短慮なる腹悪き人と聞こえければ、いからせて無理なる働きをさせて討たんと計って、臧質降参せんと云いて使いを遣わし、樽に小便を入れ、酒なりと云いておくりけり。太武、小便をおくりたると知るより、案の如く大きに忿って、城を攻め落として臧質を生捕らずんば生きてかえるべからずと士卒に下知して、蟻の垣に登るが如く、のぼりのぼり城を攻む。城中には兼ねて期したる事なれば、矧を先途と防ぎければ、太武の士卒、大半討たれて尸堀を埋めたり。されども太武、城を攻め落とさずんば一足も引くべからずと下知によって、新手を入替え入替え攻めけれども、要害よかりければ、終に攻め落とすことならざるのみにあらず、残る勢大いに敗軍してちりぢりに落ち行きたりと云々。是太武の忿り強き人を知って、臧質が謀りし所なり。其の外、敵の心によって色々の謀略をなし勝利をとりしこと、和漢其のためし多し。先ず其の一、二を記す。

問。味方の忍びを用いずと云えども、敵国の事を能く知りたる者に常々より問い、又は其の時に至ってもとい、或いは捕者に問うなどせば、敵方の事を知るべきなり。然るに味方の忍者ならでは敵方の事を聞くこと成らざるように言うは、何と云う事ぞや。

答。敵方より色々な者に妖けさせて忍者を指し越し、いつわりを云わせんも知らず、捕者をその実を云うべきも、云いまじきも知らざる事なり。常の時も、又合戦に及びても、敵国の者或いは捕者なんどにとって、それを実と心得、生死の合戦の謀ごとをなすことは、大いに危うき事、愚なる事なり。

【註】

○後魏　北魏。○太武　中華にとっては北夷の鮮卑族の一部族・拓跋武が建国した北魏の太武帝（四二二～四五二）。太武帝は即位すると難敵の柔然を攻めて漠北に追いやり、陝西の匈奴系国家の夏に侵攻して長安を陥落させ、さらに関中を占領し、遼東の北燕を亡ぼし、ついに華北統一を成し遂げた。侵攻はさらに西に向かい、最後は江南に親征して長江北岸に迫り、「元嘉の治」を謳歌していた宋朝を恐慌状態に追い込んだ。底本の内容は江南親征の時と思われる。

四

問。敵方の内輪を隔つる徳と云うは如何。

答。忍びを用いて、敵の君臣の中を悪くして中絶するようにし、或いは敵の謀臣で、敵将〔を〕殺すように計り、亦は敵の軍勢互いに疑い合せて、一味することなきようにし、或いは隣国の大名と敵の将と中悪く成るようにし、自ら敵勢の衰えるようにするを、敵方の内輪を隔つると云うなり。是の如くする時は、力を用いること寡のうして、勝利疑いなく、これ忍びを用ゆるの徳なり。

問。古の人、敵の内輪を隔てわりて勝利ありし先蹤ありや。

答。駿河国今川義元の幕下にて戸部新左エ門と云うもの有り。この者賢き者にして、而も義元へ二心少しもなし。手跡も人に勝れたり。笠寺に在城して尾州の様子を見すかしては義元へ注進し、諸事、義元へ二心なく、忠義を尽くしけり。信長公、年末、義元を亡ぼしたく思召しけれども、此の戸部があらんかぎ〔り〕は叶わずと思召し、手跡をよく似する事の器用なるものに、彼の戸部が手跡を一年余り習わせられけるに、後には少しもまがわず似せたり。是に於いて新左エ門、義元へ逆心の状を思う侭に書き認めさせ、織田上総殿へ戸部新左エ門と上書きして、森三左衛門と云う無二の侍を商人に出たたせ、彼の状をもたせて駿河へ遣わされけり。まがうべくもなく戸部が手跡なりければ、義元大きに忿って彼の新左エ門を召されけり。何心なく来たりけるを、駿河まで入るるに及ばずとて、三州吉田にて誅せられけり。信長思うままになりしかば、そこにて義元へ、信長敵の色を立てられければ、義元大軍を引率して尾州へ出張せらる。信長も出向かい、義元の不意にかかって討ち、大利を得、義元の首を取りしなり。

山名禅高の内に山中鹿之助とて文武に達せしものあり。毛利元就、彼の禅高を亡ぼしたく思われけれども、鹿之助と禅高と一味の中は禅高を討つこと叶い難きにより、何とぞして鹿之助と禅高の中を隔てわらばやと元就思いけり。其の頃、大友と禅高入魂なりければ、何ど〔何度〕すかす〔賺す〕とも、元就に大友与せざることをば元就しりながら、いつとなく大友へ音信を通じ、与力せられ給り候えと云い遣わしけり。大友、元来禅高と入魂浅からざりければ、元就と一味せんとは心底には思わずとも、上部〔上辺〕ばかりにて結構を尽くし居たり。あるとき、元就より大友へ使いを以て云い遣わしけるは、近々に禅高を討たんと思い立ち候、日頃申通するとおり、御加勢頼み入るの旨、帯木解たる様にいわせ、其の上にて使者私語にて云いけるは、禅高を亡さんこと掌の中に在り、御心を安んぜらるべし。其の子細は山中鹿之介〔助〕、味方と一味いたし、味方禅高を攻めんとき、裏切りせんとの密議堅く相調い候。此の事深き隠密なり。相かまえて親しき輩たりとも語りたまうことなかれと重々

制して使者は帰りけり。奏者の家老、此の事を大友に告げたり。大友、元来禅高と厚き入魂なれば、なにかは元就に同意すべき、委細禅高に告知せけり。禅高是真と心得て、それより鹿之助を用いず。是に於いて元就折りを得て、禅高を討ちて大利を得たりと云々。

漢の高祖*と楚の項羽*と数年相闘うとき、項羽の臣に范増*と云う明将あるによって、戦う度毎に高祖負けたり。或る時、高祖陣卒に命じて忍び忍びに楚国の兵士に金数万斤*をあたえて項羽に云わしめけるは、楚国の大将ども度々の軍功あれども、恩賞の少なき事をうらみ、潜に漢と密々通じて項羽を亡ぼし、一城一国の主とならんと巧むよしを言わせければ、項羽是を聞きて諸大将を疑う。其の後項羽より高祖の方へ使者来たりたる時、陣平結*構なる振舞を調え、彼の使者の馳走すること甚だし。暫く有って、陳平俄かに驚きたる躰にて先の珍膳をば取り入れ、簾相なる食物を与て彼の使者の聞くように、次の間にて云いけるは、今までは范増よりの使者かと思う所に項羽よりの使者なり。愚かなる事をもしたる者かなと云いければ、使者帰って此の由項羽に語りしかば、項羽いよいよ范増を疑い、高祖と内通の義必定なりと思うて用いることなかりしかば、范増大いに怒って、暇まを乞いければ〔底本は「ども」〕、項羽たやすく暇まを出されたり。それより彭城と云う所へ行きしが、行きつかずして疽を煩いて死す。それより項羽が勢い衰ろえ、終に高祖に打負け、亡びたりと云々。

又戦国の時、秦より斉を討たんと計りけれども、斉と楚と中よかりければ、討つこと成りがたく、其の時、秦の張義*〔張儀。以下張儀とす〕と云う者、楚国に行きてつかう。*或る時、張儀、楚王に云いけるは、今斉と交わりをたちたまはば、我れ秦にゆきて六万里の地を楚へ献じ、秦の娘を楚へ嫁がせん。然らば秦と楚と長くよしみの国たらん。此の如くせば、楚弥々強くして、謀りごとをなすに便りあらんと云う。楚王これに随い悦んで一人の使者を張儀に添えて秦へ遣ひ、秦の女に六万里の地を相そえ越さば、斉と交わりを断ち、永く秦とよしみを厚く入魂せんと云わしむ。秦詐って同心し、其の約を堅うす。元より秦王、張儀と云い合わせ、楚王をたばかりし事なれば、秦後に其の約を変じ、女も地もあたえざりしかば、楚王大いに怒って、秦を討たんと思い立つと云え

ども、一旦斉王と交わりを断ちたることなれば、今更斉へ救いを請うことは成らず、楚も少勢にて秦と戦う。秦は兼ねて巧みしことなれば、引請け戦って大いに勝ち、楚の国をとりたり。是、楚と斉との交わりを絶ちて勝利を得たり。其の外、敵の内輪を隔てて後道勝利ありしこと和漢ためし多しと云えども、事繁きが故に其の一、二を記す。

【註】

○**手跡**　書いた文字、筆跡。○**山名禅高**　禅高は山名豊国（一五四八～一六二六）の入道名。因幡国守護・山名豊定の三男として生まれ、安土桃山時代の武将として活躍し、後に豊臣秀吉の御伽衆の一人になった。岩井城に在城して兄の鳥取城主・豊数を助けて毛利元就の攻撃を防いだ。『忍道楷梯論和漢忍利證語抄』が述べているのは、この頃の山名豊国である。その後、但馬の八束に移ったが、豊数が逆臣に鳥取状城を奪われるとすぐに反撃して鳥取城を奪還して鳥取城に移り、因幡国守護となった。天正六年（一五七八）、信長の武将・羽柴秀吉の攻撃を受けて降伏して入道・禅高となった。秀吉没後は徳川家康に仕え、関ケ原の合戦で但馬国七味郡の一部六千七百石を采地（領地）として与えられ、家康の御伽衆的な役割を演じていた。○**山中鹿之助**　山中鹿介（山中幸盛）。○**すかす**　騙し誘う。○**高祖**　漢の始祖・劉邦。○**項羽**　劉邦と共に秦都咸陽を攻めて秦を倒して西楚の覇王となった。後に劉邦と覇権を争って負けて自殺した。○**范増**　秦末の知将で楚の項羽に仕えた。○**斤**　六百グラム。○**陳平**　前漢の政治家で最初は項羽に仕えていたが、後に高祖に仕えて都尉となり、呂太后と合力して呂氏一族の反乱を制して文帝の丞相となった。○**疽**　化膿性の腫れ物。○**張儀**　張儀（前三一〇年没）。戦国時代に、時世を読んで諸国の君主を説得して国と国を連合させようとした魏の縦横家。秦の恵文王の為に連衡策を唱えて六国を廻り、蘇秦が説いた対秦同盟「六国の合従」を崩壊させた。○**つかう**　仕える。

問。降人反忠のものあらしむる徳と云う。六韜にも、身は内にして情は外なる国将、害を生ずとあり。其の徳は知られたることなり。然れども、いかにして敵方のものを降人になし、反忠さするや。

答。敵方の者を降人となし反忠さする術は甚深の理ということなれば、委細演説に及ばず。古人のなしたる術を略記すべし。治承四年、頼朝関東を打ち随えける時、佐竹秀義ばかり常陸国金砂の城に桶籠りて頼朝に随わず。頼朝大勢を以て攻められけるが、要害よくして寄せ手うたるる者多し。終に落城せず。其の時上総介広常、頼朝に申しけるは、秀義が伯父佐竹蔵人〔義季〕と云うものあり、欲心深き者なり。重き恩賞を給うべきの条、謀ごとを運らし秀義を討つべしと宣い遣わされ候えと申す。頼朝其の義に随がい、則広常を使いとして忍びやかに蔵人が本へ遣わし、秀義を討たば彼が所領ことごとくあたえんと云い遣わさる。蔵人大きに悦びて、反り忠をし、広常とともに兵をひきいて城の後ろへまわり、前後より攻めければ、秀義叶わずして城を落ち退去したりと云々。

義経八島〔屋島〕を破って平家を追い落として後、伊勢三郎義盛を召して平家の侍田内成直〔底本は「通」〕が伊予の国より当地へ来たる由聞こゆ。汝行きてこしらえて見よとありければ、義盛先ず下臈を一人仕立て、簑笠をきせ、先き立ち行きて成直に云わんは、平家悉く滅亡し、成直が父成長は降人になりたりと告ぐべしと云い合わしめ遣わす。下臈いそぎ行く程に、成直にあいぬ。成直は八島の事如何と思い、下臈にいずくへと問う。八島より伊予へと云う。八島の事はいかにと問いければ、義盛が教えの如く云う。是に於いて成直心よわくなりて思いけるは、父が降人になりたるは、今一度我を見んためか、但し下臈の説、信ずるに足らずとて打ち過ぎける所に、義盛行き向かいて云いけるは、平家委々〔委靡*〕しく亡びぬ。汝今一度父を見、命をたすからんと思わば降参せよと云いければ、成直則ち降人になりたりと云々。亦、義経、勝浦に着きたまいし時、敵百騎計りありける中へ、義盛只一騎行き向かいていかが云いたりけん、其の将、坂西、近藤、大親家と云う者を降人になし、義経の御前へ連れ来たれりと云々。委しくは平家物語にあり。

又、織田信長、甲州武田勝頼を亡ぼさんがために潜かに忍者を勝よりの郎徒の本へ遣わし、重き賂を以て反忠

を進められければ、甲州の内に信長へ志ざしを通ずる者多し。勝頼是を知らずしていたずらに過ごしける処に、信長大勢を討手に遣わしければ、反忠の者ども信長勢を引き入れしによって、造作もなく一戦に打ち勝ちて勝頼を亡ぼしたまいしと云々。

又漢の高祖、秦を討つ時、武関に入って嶢下*の軍をうたんとする時、張良*云いけるは、秦の兵、猶も其の勢強くしてあなどり難し。されども其の将もと商人の成あがりなれば、利欲を以てなびき易しとて、酈食基と云う弁舌の忍者を遣わし、重宝の物を与えてすかし〔賺し〕ければ、其の将反忠をなしたるによって勝利ありと云々。

又宋朝の時、金の国のえびす〔戎〕起きて中国へ乱入、宋*の知行所を奪取、剰え宋朝の都まで攻め入りて、宋の徽宗、欽宗と云う二人の天子を生捕って帰る。此の時、中国の地過半、金へとられたりけれども、欽宗の弟広王〔康王趙構で後の高宗〕と云う人天子の位につきて、臨安〔もと杭州で仮の都〕と云う所に都を立て在す。是を高宗*皇帝と云う。韓世忠、張俊、岳飛などと云う名大将ども、高宗の勅命を請て金の兵と戦いて大いに攻め敗ること度々なりければ、金も大いに恐れて、高宗の宰相秦檜〔科挙に合格した文官で専制政治家〕と云うものの方へ、いつとなく忍び忍びに使を遣わし、財宝を与えて此の事を和睦せしむる様にと頼む。秦檜は元来古今無類の倭〔侵〕人なる故に、此の賂にふけりて種々の弁舌をなして高宗に合戦を止めたまえと云う。諸大将はいつ一も合戦を仕まつり、金を亡ぼし、中国の地を残らず取り返し、恥を雪がんと申しけれども、高宗終に秦檜が申す旨に随いたまう。諸大将の中に岳飛殊にすぐれて、和睦の義中々然るべからずと強いて高宗へ申しければ、秦檜讒をかまえて岳飛を殺す。是より和睦調いて、宋朝より金国を貴ばで叶わざるように成りければ、金国は日日強大になり、宋朝は弥増に衰微して金国の幕下のように成り行しと云々。

【註】

○佐竹秀義　鎌倉前期の武将で、佐竹別当、常陸介（一一五一～一二二五）。平安時代以後、常陸国北部が勢力にあった。治承の内乱の時には平家方に与して源頼朝を圧迫したので、治承四年（一一八〇）頼朝は佐竹追討の

ために常陸に向けて出兵した。父・隆義は在京中だったが、秀義は天険の山城・金砂城に籠って奮戦した。ところが義隆の弟・義季(よしすえ)の内応により落城した。秀義は奥州花園山に逃走し、後に厚免されて御家人に列せられたが、以後の消息は不明で嘉禄元年（一二二五）鎌倉名越の館で没した。**○伊勢三郎義盛**　現代語訳の《解説　伊勢三郎義盛の物語》参照。**○委々（委靡）**　なえて。**○嶮下**　断崖の下。**○張良**　字名は子房。漢初の功臣で韓信や蕭何(しょうか)と共に漢創始の三傑といわれ、高祖を支えた。始皇帝の暗殺に失敗して逃走中に黄石(こうせき)老人から太公望の兵法書を授かったという。**○宋**　北宋。**○高宗**　南宋の初代皇帝で康王趙構。

六

問。敵の密計、進退、不備を知る徳と云うは如何。

答。敵方、密々の謀計、敵の進退、忍びを用いて是を知る時は、其の謀ごとをさせず、又は其の謀計、味方の手立てと成って、此の方の不意を討たれざるのみにあらず、反って敵の不意に出て戦うによって、勝利疑い無し。亦、敵の不備を知る時は圧邸の勝利〔家ごと押しつぶすような快勝〕云うに足らず。是忍びを用いる徳にあらずや。

問。右の名将、敵の密計、進退、不備等を知って勝利ありし先蹤ありや。

答。小幡勘兵衛は元来甲斐信玄の衆なり。信玄の御子、勝頼滅亡の後、京都に牢人して居たり。豊臣秀頼公、大阪〔坂〕籠城の支度と聞えしとき、家康公より誂使にて御味方仕るべき旨、勘兵衛へ仰せ下さりしに、勘兵衛心底には同心しながら、御返答に申し上げけるは、私義遁世の身と罷り成り候えば、何方へも奉公仕るべき覚悟にては御座なく候。其の上、私伯父小幡山城は信玄公の内にて、臆病の名を立てたること、其隠れ無く候。定めて御耳にも達し申すべく候。人口遁れ難く候えば、奉公を止め、楽一辺の境界に成りて身を終わらんと存じ奉

るの条、御免下され候えと申し上げ、其の後勘兵衛潜に板倉伊賀守方へ行き向かいて云いけるは、家康公よりの詫使には、しかじか御返事仕り候いき。それは此の事、若し大坂〔底本は「阪」〕へ泄れきこえ〔聞こえ〕もやせんと遠き慮りにて候。全く真実に非ず。然れば某大坂〔底本は「阪」〕方へ便り入り、大坂〔底本は「阪」〕の様子を万ず窃かに注進致し、時節到来の時、内より焼き立て、即時に落城仕るように相計らい申すべしと云いて、則妻子足弱共を伊賀守へ人質として預け置き、大坂〔底本は「阪」〕へ参りける。扨又縁を求めて、以て秀頼公へ申し上げるは、家康は某古主の難敵なり。勝頼一門は云うに及ばず、私一族、彼に皆殺害せらる。その恨み骨髄に徹して忘れ難く候と云えども、当時、雲泥の懸隔仕りたることに候えば、空しく年月を送り候。某不肖の身たりと云えども、御味方仕まつり、彼にさび矢なりとも射かけ、打死仕まつるべくの間、城中へ入れられ候えと、其の理正しく言を尽くし申しけり。元来、諸牢人を集めらるる事にてはあり、且つ、勘兵衛は信玄衆にて、物馴れたる勇士なれば、大坂の家老の衆、大きに悦んで城中に入れるのみならず、剰さえ軍評定衆の中へ入れ、密計ことごとく知らせけるこそはかなき。其の後、大坂の密義、残らず伊賀守方へ通じければ、京都其の外近国の町在々、焼き払う謀ごとも叶わず、其の焼手ども方々にて一人も残らず、或は討たれ、或は生捕られて切られけり。其の後、家康公大坂へ寄りたまう砌り、城中の勢城外へ出て挑み戦う折から、勘兵衛はとかくして、城内に残り、思いの儘に火を放ちければ、大坂名城なりと云えども、一日の内に落城したり。

延元元年〔一三三六年〕七月中旬、新田義貞山門に在陣あって、尊氏の籠りたる東寺の陣を、不意に掛かって攻めんとて、手分け手配りを評義せらる。尊氏、兼ねて山門へ忍者を入れおかれければ、其の事を聞きすまして、則東寺に来たって尊氏卿へ告げたり。尊氏これを聞き、義貞の計ごとを反って取りひしぐ手配りを定め、夜中に大勢をさし遣わし、手分け手配りを能くして待ちかけたり。義貞の方には、密計の敵へ泄れて待ちかけ居ること夢にも知らずして、定めし手配の如くにして懸りたれば、尊氏の軍勢待ちうけたる事なれば、反って義貞の不意にかかって戦う。義貞の軍勢、粉骨を尽くし戦うと云えども、不意を討たれて終に敗軍す。

又、家康卿、信雄卿、尾州小牧山に在軍したまう処に、太閤大勢にて対陣ありし時、池田勝入、森庄蔵、太閤へ申し上げるは、三州岡崎の家康御居城を、留主の間へ向かいて攻めば、早速落城すべし。是、能き手段なりと再三進めければ、太閤随いたまいて、甥の三好孫七郎殿を惣大将とし、堀久太郎、長谷川藤五郎を相添えられ遣わされけり。池田勝入、森庄蔵は先陣にて潜に陣場を立ちて岡崎へ向かわる。此のことを、さるもの、家康卿へ言上しければ、天の与えと悦びたまい、小牧山には番手兵士少々御残しおき、夜に入り、潜に小牧を抜け出したまい、太閤衆岡崎へ行く道に山取られて備えを立て、待ちかけたまう。太閤衆、此れおば夢にも知らず押し行く処を、家康御勢不意にかかって討つ。池田、森、至剛の兵なれば、堅きを破り、利を摧きて戦うと云えども、叶わずして二人ともに鉄砲に当たって討死す。先陣の大将討たれければ、太閤がた、惣敗軍となりしと云々。

義貞、鎌倉を攻めん前かた北条恵性と戦う。義貞方、無理して引退きければ、義貞をば定めて近国の者ども討て出すべしと大様にかまえ、油断して義貞を追うこともなく、遊女を集め酒宴して、備えもなく居ければ、諸軍勢もともに油断して、馬に鞍をも置かず、甲冑をも帯せず居たりける。其のとき、義貞潜に忍びを以て是を見せしむ。忍者此の由を義貞へ告げたり。是に於いて義貞兵を進め、旗をもささず、時〔鬨〕の声をもあげず、潜に向かわれたり。鎌倉勢申しけるは、只今軍勢の多く見えるは敵にてはあらじ。近国の者どもの味方へ馳加わるにてあるらんとて、敢てさわぐ事もなき所を、義貞時〔鬨〕の声を揚げて勇み進んでかけ立てれば、恵性一戦に打負けて、散々に成りて鎌倉へ逃げ入りけり。

又敵の進退を知らずして負けたりし先蹤は、赤松円心は久々知酒部に陣を取りて、六波羅勢の来たるを待ちかける時に、尼ケ崎より船にて登りける阿波の小笠原が三千余騎にて押寄せけるを知らずして、俄かに周章ふためき、戦うと云えども備え整わざるよって一戦に討負け、父子六騎に成って大いには敗軍したり。

又、武田信玄、信州戸石の城を攻めしとき、村上義清、戸石の後詰に来たるを知らずして、俄かに転倒して、戦うと云えども備え整わず、信玄の先陣大将甘利備前、横田備中、其の外兵士多く討たれ、武田方負軍となりし。

然れども山本勘助、後に敵配り味方配りと云う術を以てもり返し、惣敗軍にはならずと云えども、能き侍大勢を討たせたるは、大損なりと云々。

又、三好が一党、清水詣にことよせ、将軍義輝を殺し奉り、明智日向守が信長の催促によって中国の加勢に行く時、丹波より直に京都本能寺へよせて、信長を殺し奉りし事、皆、敵は進退隠謀を知らずして、手も無く敗亡したまう。常々、桂男の忍法を用いたまい、其の難は遁れたまうべし。不意を討たるるの難、忍術を怠り有る故なり。円心、信玄、何れも名将なりと云えども、忍びを用いずして利を失う。慎しまざるべけんや。委くは太平記、太閤記、兵法古戦問答に詳らかなり。

七

問。敵将を殺す徳有りと云う。忍術を以て敵の大将を殺す事は成り難きことなり。其の術は如何。

答。忍術を以て敵将を殺す術は、其の時の宜に順うて謀計区々なり。古人のなしたる術は、新田左兵衛助義興、武蔵相模両国の間に忍びて居られければ、相順うべきと窃に音信を通ずる者多かりけり。此の事、足利左馬頭基氏朝臣、畠山入道道誓に聞こえてけり。畠山、是を聞きしより敢て〔さっぱり〕寝食を安くせず、在所を尋ね聞きて、大勢を差し遣わせば、国の内通計〔自由自在に行き来する〕して行方を知らず。又五百騎三百騎の勢を以て道に待てば、夜討にはせて討たんとすれば、義興更にこととともせず、蹴散らしては道を通り、うち破っては囲みを出て、千変万化、すべて人の態に非ずと申しける間、今はすべき様なしとて、手に余って覚えける。或は夜、畠山潜に竹沢右京之介を近付けて、御辺は先年〔一三五二年〕武蔵野の合戦のとき、彼の義興が手に属して忠ありしかば、義興も定めて其の旧功〔旧交、旧好〕をわすれじとぞ思わるる。されば此の人を偽って討ん〔と〕することは、御辺に過ぎたる人有るべからず。何なる謀ごとをも運らして義興を討ちて、左馬頭どのの見参に入りたまえと云いければ、竹沢畏り令状して申しけるは、さ候わば、兵衛介の疑いを散らしめ、相近付き候らわん為

に、某態と御制法を背きて御勘気を蒙り、御内を罷り出たる躰にて、本国へ罷り下って後、此の人に取りより候うべしと、能々相謀って、己が宿所へぞ帰りける。兼ねて謀りつることなれば、竹沢、翌日より宿々の傾城どもを、数十人呼よせて、遊び戯れ舞い歌う。是のみならず、相伴う傍輩ども二、三十人招集して、博奕を昼夜十余日までぞ仕たりける。或る人、是を畠山に告知せたり。畠山、大きに偽り忿って、制法を破る罪科一つに非ず。凡そ道理を破る法はあれども、法を破る道理なし。況んや、有道の法をや。一人の科を戒むは、万人をたすけんためなり。此の時、緩々の沙汰を致さば、向後の狼藉断つべからずとて、則、竹沢が所帯を没収して、其の身を追出されけり。竹沢、一言の陳謝にも及ばず、穴ことごと〔事々〕し。左馬頭に仕われぬ侍は、身一つは過ぎぬかと、飽まで広言を吐散して、己が所領へぞ帰りにけり。角て数日有りて、竹沢潜に新田〔左〕兵衛助殿へ人を奉せて申しけるは、親にて候入道故に新田殿の御手に属し、元弘の鎌倉合戦に志ざしを抽て候らいき。某、また先年武蔵野の御合戦の時、御方に参って忠戦致し候いし条、定めて思し召し忘れ候わじ。其の後、世の転変度々及びて、御座所をも更に存知仕らで候いつる間、暫しの命を助かって、御代を待ち候はん為に、畠山禅門に属し候いつるが、心中の趣き、気色も顕わし候いけるに依りて、差したる罪科とも覚えぬ事に、一所懸命の地を没収せられ、結局討つべしなんどの沙汰に及び候いし間、則、武蔵の御陣を逃げ出でて、当時は深山幽谷に隠居たる躰にて候。某が此の間の不義をだに御免あるべきにて候わば、御門奉公の身と罷り成り候いて、同然の御大事には、御命に替わり進めらせ候べしと、懇にぞ申し入れたりける。〔新田左〕兵衛助殿是を聞きたまいて、暫くは申す所誠しからずとて、見参もしたまわずして、密議なんどを、彼知ることも無かりければ、竹沢尚も心中の偽らざる処を顕して近付き奉らん為に、京都へ人を上らせ、有る宮の御所より、少将殿と申しける上臈女房〔高貴な宮仕えの女〕の、年十六、七計りなる容色無類、心ざま優にやさしく坐しけるを、兎角申し下して先ず己が養君〔養子にする貴人の子〕にし奉り、御装束、女房達に至るまで、様々に仕立て、潜に〔左〕兵衛助〔義興〕殿方へぞ出しける。〔左兵衛助〕義興、元来好色の心深かりければ、無類思い廻らして、一夜の程の隔ても千年

を経る心地に覚えければ、常の隠れ家をかえんともしたまわず、少し混たる式〔気持ちが混乱した状態で〕にて、其の方様の草のゆかり〔先祖のゆかり〕までも、心置く事〔気を付けるべき事〕とは露計りも思いたまわず、誠なるかな、褒姒〔周王朝十二代・幽王が寵愛した妃〕一たび笑みて幽王国を傾け、〔また〕玉妃〔楊貴妃〕傍らに媚びて玄宗〔唐六代皇帝〕世を失ないたまいしも、角やと思い知られたり。

されば太公望が利を好む者は財珎を与えてこれを惑わし、色を好む者は美女を与えてこれを迷わすと、敵を謀る道を教えしを知らざるこそ愚かなれ。竹沢奉公の志ざし切なる由を申しけるに、〔左〕兵衛助早心うち解けて、見参したまう。軈て、鞍置きたる馬三匹、只今威し立たる鎧三領召し替えの為とて引進らす。これのみならず、越後より著纏い〔豪華なまとい〕奉って、此彼に隠れ居たる兵どもに、皆一献〔室町時代の礼法で、客に肴を添えて酒を三杯すすめる〕を進め、馬物具、衣装、太刀、刀に至るまで、用々に随うて漏らさず引きける間、〔左〕兵衛助殿も竹沢を異にて他なる思いをなし、傍輩どもも皆是に過ぎたる御用人あるべからずと悦ばぬ者は無かりけり。加様に朝夕宮仕いの労をつみ、昼夜無二の志ざしを顕して、半年ばかりになりにければ、佐殿〔義興〕、今は何事に付ても心を置きたまわず、戦闘の計略、与力の人数一事も残さず心底を尽くして知られけるこそ浅ましけれ。九月の十三夜は、暮天雲晴れて月も名におう夜を顕しぬと見えければ、今夜名月の会に事を寄せて、佐殿を我が館へ入れ奉り、酒宴の砌りにて、討ち奉らんと計って、無二の一族、若党二百余人催おし集め、我が館の傍らにぞ籠り置きける。日暮れければ、竹沢急ぎ佐殿に参って、今夜は明月の夜にて候えば、恐れながら私の茅屋へ御入り候いて、草深き夜の月をも御覧候えかし。御内の人々をも慰め申し候らわん為に、白拍子〔白拍子舞の遊女〕ども少々召し集めて候と申しければ、興ある遊びなりと面々に皆悦びて、馬に鞍置き、郎従ども召し集めて、已に打ち出んとしたまいける処に、少将の御局よりとて、佐殿へ御消息あり。披いて見たまえば、過ぎし夜、御事を悪しきようなる夢に見進せらせて候いつるを、夢説〔夢占師〕に問て候えば、重き御慎みにて候。七日が間、門の内を御出有るべからずと申し候なり。御心得候うべしとぞ申されたりける。佐殿、是を

見たまいて、執事井野弾正を近付けて、如何有るべしと問いたまえば、井ノ弾正、凶を聞きて慎ましず云うことや候うべき。只、今夜の御遊びをば止めるべきとこそ存じ候えとぞ申しける。佐殿、げにもと思いたまいければ、俄かに風気の心地有りとて、竹沢をぞ帰されける。竹沢は今夜の企て、案に相違して安からず思いけるが、抑、佐殿少将の御局の文を御らんじて止まりたまいつるは、如何さま、我が企てを内々推して告げ申さるるものなり。此の女性をいきて置きては叶うまじとて、翌す〔翌日〕の夜、潜に少将の局を門へ呼び出し奉って、差し殺して堀の中にぞ沈めけり。その後は竹沢、我力にては討ち得じと思いければ、畠山殿へ使いを立てて、〔次文欠「佐兵衛佐殿の隠れ居られて候う処をば委しく存じ仕まつって候えども、小勢にては討ち洩らしぬと覚え候」（『太平記』）〕急ぎ一族にて候う江戸遠江守と下野守とを下され候え。彼等と能々評定して、討ち奉らんとぞ申しける。畠山大いに悦びて、軈て江戸遠江守と其の甥下野守を下されけるが、討手を下す由、義興つたえ聞かば、在所を替えて隔つる事もあるとて、江戸伯父甥が所領、稲毛の庄二郷〔十二郷（『太平記』）〕を闕所になして〔没収して直轄地とする〕、則給人をぞ付けられける。江戸伯父甥、大いに偽り怒って、やがて稲毛の庄へ馳下り、給人を追い出し、城郭をかまえ、一族以下の兵五百余騎招き集め、只畠山殿に向い、一矢射て討死せんとぞ訇しりける。程経て江戸遠江守、竹沢右京亮を縁に取って、兵衛佐殿〔新田義興〕に申しけるは、畠山殿故無く懸命の地を没収せられ、伯父甥ともに牢籠の身と罷り成るの間、力及ばず、一族どもを引率れて鎌倉どのの御陣に馳向かい、畠山殿に向かうて、一矢射んずるにて候。但し然るべき大将を仰ぎ奉らでは、勢のつ〔付〕くこと有るまじきにて候えば、佐殿を大将に憑み奉つらんずるにて候。先ず忍びて鎌倉へ御越し候え。鎌倉中に当家の一族、いかなりとも二、三千騎有るべく候。其の勢をつけて、相模国を相随がえ、東八箇国を横領して、天下を覆す謀ごとを運らし候わんと、誠とに容易げにぞ申したりける。さしも志ざし深き竹沢が執りし申すことなれば、疑うべきに非ずとて、憑して則、武蔵、上野、常陸、下総の間に内々与力しつる兵どもに、事の由を相觸れて、十月十日の暁きに、兵衛佐どのは忍びて、先ず鎌倉へとぞ急がれける。江戸竹沢は、兼ねて支度したることなれば、矢

口の渡りの船底を二所えり貫きてのみ〔栓〕を差し、渡しの向かいには宵より、江戸遠江守、同下野守混物具〔『太平記』では完全武装の「直物具」。「物具」は武具〕三百余騎、木の陰、岩の下に隠し、余る所あらば〔敵が逃げようとすれば〕討止んと用意したり。跡にて、竹沢右京亮、究境の射手百五十人勝って、取りて帰さば遠矢に射殺さんと巧みたり。大勢にて御通り候はば、人の見とがめ奉ることもこそ候えとて、兵衛佐殿の郎従どもをば、兼ねてみな抜々に鎌倉へ遣わしたり。世良田右馬助、井〔野〕弾正忠、大嶋周防守、土肥三郎左衛門、市川五郎、由良兵庫之介、同新左衛門尉、南瀬口六郎等、僅かに十三人を打ち連れて、更に他人をば雑らずして、のみを差したる船にこみ乗りて、矢口の渡り〔多摩川の渡しで、大田区矢口から川崎市幸区古市場に渡る。南北朝騒乱時の古戦場〕に押しだす。是を三途の大河とは思い寄らぬぞ哀れなる。倩是を譬えれば、無常の虎に追われ、煩悩の大河を渡れば、三毒〔貪、怒、愚〕の大蛇浮み出でて、是を呑まんと舌をのべ、其の喰害を遁れんとて、岸の額なる草の根に、命を係けて取り付きたれば、黒白二自〔二つ〕の鼠が其の草の根をかぶるなる。無常の喩に異ならず。

此の矢口の渡りと申すは、面て四町に余りて、波険しく底深し。渡し守、已に櫓を押して河の半ばら過ぎるとき、取りはずしたる由にて、櫓傍らの河に落し入れ、二つののみをを同時に抜きて、二人の水手同じ様に河にがばがばと飛び入りて、うづ〔『太平記』は「うぶ」（水底）〕に入りてぞ逃げ去りける。是を見て、向こうの岸より兵四、五百騎懸け出して、時〔鬨の声〕をどっと作れば、跡より時を合わせて、愚かなる人々や忻るとは知らぬか、あれを見よと欺きて、箙〔腰に付ける矢入れ〕を扣いて笑いける。去る程に、水、船に滴入って、腰中計りに成りけるとき、井の弾正、兵衛佐殿を抱え奉って、中に差し揚げたれば、佐殿安からぬものか、日本一の不道人どもに忻れつる事よ、七生まで汝等が為に恨みを報うべきものをと、大いに忿って腰の刀を抜き、左の脇より右のあばら骨まで掻き廻し々々、二刀まで切給う。

井〔野〕弾正、腸を引き切りて河中へがばと投げ入れ、己が喉笛二所さし切りて、自らこうづか〔髪束〕を摑

み、己が首を後ろ口へ折付ける音、二町ばかりぞ聞こえける。世良田右馬介と大嶋周防守とは、二人刀を柄口まで突き通して、引組て河へ飛び入る。由良兵庫助と同新左衛門は舟の艫舳に立あがり、刀を逆手に取り直して、互いに己が首を掻き落とす。土肥三郎左衛門、南瀬口六郎、市川五郎、三人は各々袴の腰引きちぎりて裸に成り、太刀を口にくわえ、河中へ飛び入りけるが、水の底に潜りて、向こうの岸にかけあがり、敵三百騎の中へ走り入り、半時〔一時間〕計り切り合いけるが、敵五人打取り十三人に手を負わせて、同じ枕に討れにけり。其の後、水練を入れて、兵衛佐殿幷に自害討死の首十三求め出し、酒に浸して江戸遠江守、同下野守、竹沢右京亮、五百騎にて、左馬頭殿の御坐す武蔵の入間河の陣へ馳せ参ずる。畠山入道斜ならず〔非常に〕悦んで、小俣輔次郎、松田、河村を呼出して是を見せらるるに、子細無く兵衛佐殿にて御坐し候いけりとて、此三四年先きに、数日相馴れ奉りし事ども申し出でて、皆泪をぞ流しける。見る人、悦びの中に哀れを添えて、共に袖をぞぬらしける。

此の義興と申すは、故新田左中将義貞の妾腹に出来たりしかば、兄越後守義顕が討たれし後も、親父猶これを嫡子には立てず、三男武蔵守義宗を、六歳の時より昇殿せさせて、時めきしかば、義興は有るにも非ず、孤子にて上野国に居たりしを、奥州の国司顕家卿、陸奥国より鎌倉へ責め上る時は、義貞に志ある武蔵上野のものども、此の義興を取り立てて、三万余騎にて奥州の国司にかお合わせ、鎌倉を責め落として吉野へ参りたりしかば、先帝〔後醍醐天皇〕叡感〔叡覧〕有って、誠に武勇の器用たり尤も義貞が家をも興すべきものなりとて、童名徳寿丸と申して御前にて元服させられて、新田左衛門佐義興とぞ〔底本は「リ」〕召され〔名付られ〕ける。器量人に勝れ謀巧に心飽くまで早かりしかば、正平七年〔一三五二〕武蔵野の合戦、鎌倉の軍にも大敵を破り、万卒に当たること、古今未だ聞ざる所多し。其の後、身を側しめ、只二、三人武蔵、上野の間に隠れ行きたまいし時、宇都宮の清党〔宇都宮麾下の清原姓武士団〕が三百余騎にて取り籠りたりしも、討つことを得ず。其の振舞、恰も天を翔り地を潜る術ありと、怪しきほどの勇者なりしかば、鎌倉の左馬頭殿も京都の宰相中将殿も、安き心地はおわせざりつるに、運命窮まり、一事の謀ごとにて討たれ給う。委しきは太平記に見えたり。

問。堅固の城を早く没落せしめる徳と云う先蹤をきかん。

答。元弘元年〔一三三一〕八月、後醍醐天皇、笠置の城に楯籠らせたまいし時、六波羅の勢、十万余騎にて押し寄せて、日夜責めけれども、此の城妙誉の要害なれば、中々落つべき様なかりける所に、備中国住人陶山藤蔵義高、小見山次郎某と云うもの、僅かに五十人の勢にて九月晦日、城の北に当たりたる石壁より城中へ忍び入り、火を放ししかば、寄手是に利を得て四方より責め寄せしかば、城中防ぐ事あたわずして、則落城しけり。三国無双の名城に、金鉄の如くなる義士三千余籠りたる城なりしかども、防ぐこと得ずして、則時に落たりと云々。

近江国の守護佐々木義賢入道抜関斎承禎幕下に百々と云う侍、同国佐和山の城に居て、承禎へ逆心ありしかば、承禎数千人を以て度々攻めたまいしかども、此の城究境の要害、其の上、百々謀ごと有る侍なれば、中々城の落ちることなし。其の時、承禎、伊賀国楯岡ノ道順と云うものを頼む。此の道順、妖者の術にて此の城を落とす。其の術は、沢山の城へ炭薪を入るる山家あり。百々其の樵夫どもに手判を渡し置き、城中へ入る時は手判を改めて出入りをさせけり。道順此の由を聞きて、形を窶し、衰えたる躰に出立ちて、十四五人彼の山家へ行き、薪を入るる百姓どもに云いけるは、我々は伊賀国の百姓にて候が、地頭某と云う人、年貢諸役を強く掛け取って、勘忍すべき様なく、是非に及ばず故郷を逐電仕まつり、妻子らは縁々に随いて預け置き、我々はかように流浪の身と罷り成り候。一両年は給米を取らず奉公相勤めんの条、後々は当郷に居住仕り、妻子をも育くみ申すように頼み入る由、丁寧に云いければ、彼の樵夫ども当分給米を取らざることを喜び、其の旨に任い抱えけり。一家に一人二人ずつ、十四人まで抱え置きたり。其の後程経て道順が一党にも手判を渡し、薪を荷わせ行かしめければ、時分能くなりぬと、十四人の者ども窃かに諸事相期して、承禎へも相図を云い遣わし、残りの忍者にも告げ知らせ、諸方の相図を定めけり。これに依り、承禎も其の前の夜より、沢山近辺へ窃かに寄りたまう。残りの忍者は

城近き森林の中に隠れ居たり。相図の日にも成りしかば、樵夫どもと道順が一党十四人のものどもと打ち交わり、手判を持ち、薪を荷い行き、常々薪を入るる樵夫ども大同ありといい、手判を持ちしといい、旁、疑う様べきなければ、難なく城中へ入れにけり。

道順が一党、かねて薪の中に焼薬を入れたるに、火の移るように明の火を結び入れて、日のくれ方に火の燃え立つ様にしおきたり。扨て、薪屋へ一所に積みおき立ち退けば、未だ城中を出ざるに早火燃え上がり、夥しく焼き出たり。城中のものども、是を見て火を消さんと周章してて、火本へ走り行ける。其の跡にて、方々へ走り散って火を付けければ、十方より燃え出て、猛火天に上りしかば、城中のものども、計方を失ない、驚き騒ぐ。黄昏の時分にてはあり、其の紛れに、森林に隠れ居たる忍者ども、打鉤をうちかけうちかけ、塀を上り、城に入りて敵に紛れ居たり。承禎も火の夥しく燃えるを見て、天地も崩るる計りに時〔鬨〕の声を発し、攻め入らんとしけり。百々が勢、是を防がんと責口におり立ちける時、城に居たる四十余人の忍者ども、縦横無碍に切廻りければ、城中のものども、前後の敵に迷惑して、防ぐべき様なく、多くは討たれ、或は逃げ出けるを、承禎城外に陣をすえ、備を堅くして居たまえば、一人も残さず討ちたまいけり。

又、延元二年〔一三三七〕夏、新田左兵衛佐義興、春日少将顕信、八幡山に楯籠る処に、高武蔵守師直、数千騎を卒れて是を囲むと雖も、此の城、要害の地にて、責め落すべき様無き処に、脇屋左衛門助義介、山門〔延暦寺〕と成合せて、北国より近日上洛の由、尊氏聞きたまいて、急ぎ八幡の合戦の閣き〔止める、閉じる〕て京都へ帰り、北国の敵を相待つべしと武蔵守が方へ下知せらる。師直此の由を聞きて、此の城を攻め落とさずして引き返しなば、南方の敵に利を得られつべし。亦、京都を閣は、北国の敵に隙を伺われつべし。いかがせんと進退谷て覚えければ、或る夜の風雨の紛れに、逸物の忍びを八幡山へ入れて、神殿に火を掛けたりける。城中騒動して烟の中に迷倒す。是を見て、四方の寄手十万余騎、谷々より責め上がり、既に一二の城戸口まで攻め入りける。然れども険阻に敵防ぎければ、其の夜に攻め落とすこと叶わずと雖も、社塔に積み置きたる兵粮委く焼失

して、北国よりの後詰を待つまで堪場なく、六月二十七日、潜に八幡山を落ちられけりと云々。

又、駿河国八幡平の城に、今川殿より大勢こめおかれ、堅固に守り居たるを、甲州馬場美濃守、三者〔忍者〕を遣わして夜中に忍び入れしめ、内外より攻めて、造作もなく八幡平を攻め落したりと云々。

後漢の皇甫嵩、波方〔正しくは「波才」〕と云うものと戦う。敵は大勢にて、嵩が人数少なかりければ、諸軍勢如何と恐れける所、嵩が曰り。合戦の道は必ずしも勢の多少に寄るべからず、謀ごとによって種々の術有り。今、敵の陣屋をみるに皆草にてつくれり、焼討にする便ありと云う。其の夜、則大いに風吹きければ、軍勢どもに相図をなし、城中へ忍びを入れ、城外をば人数を以て取り巻き、先ず外より火を掛ければ、城に忍び居たる者ども、同時に火を放って、内よりも責めたり。其の時、嵩、鞁〔車を引く馬の飾り〕を打って□□〔脱字。「責め入りたり」か〕。敵、火を見てあわてさわぐ所を責めて、終に大軍に大いに打ち勝ちたりと云々。

九

問。敵籠城の人数を煩痛せしむる徳と云うは〔「如何」欠〕。

〔「答」欠〕或いは粮道を断ち、或いは他国より援兵の有るを問わしめ、其の交わりを隔てて、其の通路を塞ぎ、其の城の険難沮沢を能く知り、絵図土図を以て御大将へ知らしめ、向い城を堅く取り寄せ、或いは兵粮、馬の飼料等を積置く所を忍び入り、火を放たせしめ、其の外、時所に随いて、臨機応変の忍謀あり。

問。忍術を以て敵の籠城を煩痛せし証拠ありや。

答。前に云う新田義興春日少将の盾籠りし八幡山の城も、忍びの徳を以て終に城をあけ、落ちたまう。信濃国村上の義清と武田信玄と合戦度々に及ぶと雖も、村上の城要害堅固にして其の上大身なりければ、信玄とりひしぐ事かなわずして年月を送られける所に、信玄が旗本真田弾正謀ごと有るものなり。弾正が与力の侍に洲原若狭、

同惣左衛門と云う兄弟の士有り。智謀も人に勝れたるものどもなり。此の両人は元来海野がおとな筋〔本家筋〕なりければ、村上義清が方へ折々ちなませ〔縁を頼りに親しくし〕て、義清が心を窺いけるに、何事も洲原兄弟の心中実儀なりと義清思う色見えけり時に、両人義清に向いて言いけるは、常々の御念頃、誠に忝き次第に存じ候えども、別に御奉公仕るべき品も御座無く候。若し真田が城を取りたく思召し候わば、何時にても取りてまいらせんと心安げに村上に語る。義清大いに悦び、然らば何事も其の方はからい、弾正が城を取りて得させ候えと申しける。洲原しすまし〔仕済し〕たりと思いて、左思し召し候わば、御家中にて歴々五百人計すぐって某に御添え候え。真田が城へつれこみ、即時に踏み落とす謀事ありと云いければ、義清、家中の歴々を五百人、若狭兄弟にぞ差し添えける。兄弟、いしくも〔うまく〕謀りたりと思い、真田が城、二の丸へ連れ行き、兼ねて相図を定め置きたる事なれば、一人も残さず成敗しけり。去る程に、義清は頼みきったる兵士を、弾正に謀られ討たせければ、残勢も気を失いて小勢にもなりければ、城要害よしと雖も防ぐに力らなく、兎角ともだえけれども、叶わずして、終に越後へ落行せり。

又、唐の李光弼と史思明と相戦う時、史思明が方へ近国より加勢の来たる事を頼みて、相待つ所に饒陽と云う所より、史思明を救わんために人数五千をさし遣わし、已に九門につくよし。李光弼聞きて、究竟の兵をすぐり、旗をもあげず鼓をも打たず潜に行き、敵の兵粮をつかう所を窺いて、急に攻めければ、饒陽より来たるもの一人も残さず討ち取れり。史思明も是を聞きて兵を引き退きたりと云々。

隋の文帝、陳の国を討たんと思えり時に、高頻申しけるは、江南は土薄くして〔痩せ土で〕只茅竹〔犬稗や竹〕のみ多し。其の貯え置く所の者は、皆土産に非ず。潜に人を遣わし、大風の時火を放ちて是を焼き、亦、重ねて貯え積まば亦焼くようにせば、一年の内には自ずから財物兵粮皆尽くすべしと云う。文帝、此の謀ごとを用いられければ、陳の国益費えて、後に隋の大将賀若弼にやぶられたりと云々。

【註】

○**史思明**　唐の軍人で突厥（とっけつ）の人。玄宗皇帝から思明を賜るほどの関係であったが、安禄山の乱では乱側の将軍となり、後に大燕皇帝と称した。七六一年、子の史朝義に殺害された。

下巻

十

問。十死の合戦に勝利を得る徳と云うは如何。

答。味方一戦に利を失うか、或は大軍に囲まれ、重ねて戦うとも利なき時、忍びを用いて重ねて戦いに利を得、敵の退運を開きたること、其の様多しと云々。九州菊池肥後守武光、上松原・下松原〔上松浦、下松浦（『太平記』）〕・小弐・大友・宗像・紀伊常陸前司、是等の大勢にて囲まれし時、武光が家子、城越前守と云うもの、上松原・下松原が三千余騎にて陣取りし飯守山の陣へ、山伏、禅僧、遁世者なんどを、忍び忍びに遣わして、此の陣の人々に、誰かれは宮方へ内通の事有り、何がしは後ろ矢射〔られ〕て降参すべき由を申し候ぞ、野心の者どもに心を置きて犬死したまうなんど様々に云いける。是を聞きて、去る事や有るべしと思いながら、今時の人の心、亦あるまじき事にてもなしと互いに心を置合て、危ぶまぬ人もなかりし処に、其の後少し程経て、〔城〕越前守夜討をなす。松原党、元来大勢と云い、城よかりければ、此の敵に落とされるべきようはなしと雖も、城中に敵へ内通のもの多しと、敵の計りごとを告げたりして、真と心得て御方に討たるるな、目を賦れと云う程こそ有り、我先にと落ちけるとかや。其の競を以て小弐、大友、宗像大宮司、紀伊の常陸の前司、此の勢都合二万五千余騎にて引えたる大手の陣へ、翌日宮方五千余騎の勢を以て押しかけければ、昨日搦手の松原党打ち負けと聞

しより、あわれ引かばやと臆病神のつきたる小弐・大友が勢なれば、なしかば一積りもたまるべき。鞭に鐙を併せて〔鞭と鐙とで馬を全速力で走らせる〕、我先ににと落ちにけると云々。

又伊予国河野四郎通清〔河野氏系図では河野家始祖とされている〕、平家を叛き、源氏の方人して旗を挙げんと計りし時、子息通信、安芸の国伯父奴田次郎ら語らい、此の事密談して世上の気運を察し、〔河野通信が九州の源氏方を救援するために、父・通清と一緒に居た伊予の赤縄山城を出発し、城が手薄になった隙を狙って〕額〔奴可〕入道西寂、河野通清が館へ押寄せ、道清を討ちて大いに勝ち、通清ら殺しけり。道清が郎徒、飯田源五郎と云うもの何とかしてのがれけん、安芸国〔通信の母の里、沼田郷〕へまえり、子息通信に此の由を申しければ、伯父奴田次郎大いに驚いて、急ぎ合戦を企てんと欲す。通信申しけるは、今我等が勢にて彼と挑み戦わんとせば、必ず利あるべからず。只密謀を以て彼が怠りを察し、其の虚に乗じて是を討つべし。其の上、今も敵もし窺うこともや候われん、先ず此の事隠便たるべしとて、究竟の兵百人すぐり、先ず検見を遣わし、敵の虚実を窺わしむ。されども敵も用心の躰、厳しく見えたり。

爰に於いて、侍一人、山伏に出立させ、額入道門前に立ち、安芸国厳島に百日参籠仕りて大願成就の山伏、帰国の斎糧たえ〔絶え〕と乞いければ、折節西寂聞き付けて、其の山伏此の方へ召すとて中の出居へ請いし入れ、奴田次郎幷に通信がことを問う。山伏申しけるは、さに候、此の沙汰、地下人厳島へ参籠しける者の語り申しけるは、伊豫国の住人河野四郎とやらん云う人を、額入道西寂とやらん申す人、討ち取り候によって、河野の子息通信と云う人は、安芸国奴田次郎の宿所に候われけるが、此の由を伝え聞きたまいて安からぬことなり。是、此の親の敵を討たんとて、奴田次郎を頼み、兵を確しける処、去る七月の日、通信俄かに病死したまいぬと語り候と、此の僧も葬礼の様を見て通り候いしが、こと哀れなる有さまにて候いしがと申しければ、西寂大いに悦びて、郎共兵に向いて申しけるは、各々、是承わり候え。厳島の弁財天、我家を守護したまうこと、未だ捨てさせ給わざるにや。大願成就の山伏の築紫より来たって、西寂が安堵を告げたまう。此の山伏こそ即ち弁財天よとて、

様々の引き出ものして帰しぬ。其の後、西寂喜びの酒宴終夜なして、上下途を失う所へ、通信其の怠りを聞きすまして、手勢百騎を三手に分け、一手は先ず道行き人の躰に出立せて通し、一手は中を通し、此の中の手を先陣となし、此の手込み入れて攻めるとき、前後の二手より入りて、火をかけ焼討にして大いに勝ち、西寂を生どって本望をとげたりと云々。

十一

問〔底本は「曰」と続く〕。天下の人民を味方の忍者となして勝利を得る徳とは如何。

答〔底本は「ふ」と続く〕。其の謀計広太〔大〕にして、演述しがたしと雖も、あらまし和漢の忍謀を顕わす。周防国の屋形大内殿の内に陶という侍に二心なき義士あり。如何ほどすかすとも反忠別心など有るものにてはなし。毛利元就、陶が心根を能々しりながら、陶に別心をすすめられけり。陶、心底には更に二心なくして、上部にて元就に与力せんと約束しけり。元就、其の心を能く察して、陶に帯ひも〔帯紐〕をときたる〔警戒を要しないで安心する〕様にて云いけるは、若し大内殿、我が城を攻めらるるとも、大手の方は近年普請をよく致し堅固なり。幾万騎の勢にて攻めらるとも、更に攻め敗らるべきと覚えざるによって心易きなり。然れども搦手の方、山続にして険阻なるようなれども、敵ひそかに襲い来て我が城を攻めば、何ともすべき様なくして落城すべきかと、是のみ心がかりの所なり。若し大内殿、我が城を攻めらるる事あらば、御辺必ず、元就の城は搦手険阻にして攻むるに利あらず、大手より一概に攻めらるべしと、諫むる躰にて云いたまえと言われければ、陶、心得候と諾して帰りけり。陶は元就に一味の事は上部ばかりの事にて、元来大内殿へ二心なきことなりければ、此の事大内殿へ有りの侭に言上しければ、大内殿能きことを聞きたりと思いて、元就の城を攻めらるべき支度なり。此の由、元就聞きて、さればこそと思いて、搦手の方の山の谷、つまりつまりに伏兵を隠し置き、其の要害に随いて、兵を備えて待ち掛けたり。案の如く、大内殿大軍を以て潜に搦手一向で襲われたり。元就の兵ども思う図りに敵

を難所に引き入れて、八方より急に攻めければ、大内勢一たまりもなく大いに敗軍して元就大利を得たりと云々。

甲州武田勝頼、三州長篠の城を攻められし時、勝頼鴟ガ巣の城に在陣して、先勢を以て城を囲む。其の時、小栗の某と云う者に勝頼下知して、汝は信長、佐々木、浅井、其の外畿内中国の様子を聞き立ちて、一々告知をせよとて遣わされたり。此の小栗は元来家康公の家来なりしが、去る子細有りて御勘気を蒙り、勝頼に属し居たりしかば、此の次てを以て三州へ行き、本多平八を頼みて帰参を望む。家康公聞きしめし悦びたまい、これを許す。則平八郎、小栗を連れて御前に伺公す。小栗も古主を久々にて拝し奉りし嬉しさに落涙しけり。家康も其のこころざし〔志〕を感じたまい、黄金三十枚小栗に下され、其の上にて仰されけるは、汝帰って勝頼に云うべくは、家康は病気にて長篠後詰のこと中々成り難き由申すべしと仰せられければ、畏まり候と御請仕まつり、退出して後、二心あるまじきむね誓紙を書きて平八〔郎〕に渡し、鴟巣へ帰り、其の趣き勝頼へ申し上げけり。勝頼これを聞き、実と心得たまい、家康後詰なくば心易きとて鴟巣を出たまいて、長篠近く寄られ、平野に陣を取りたまう。これ武田の家運尽きる所の端なり。さて信長公及び家康公此の旨を聞き召して、先ずひそかに人数をまわし、鴟巣をせめ落とし、味方を入れ替え、険難を前をあて、要害に陣を取りて戦いたまいしかば、勝頼剛強なりといえども、終に大いに敗軍と云う。是は勝頼の忍者を、家康公反間となしたるものなり。大将たるべき人は、常々士を愛して英雄の心をとって、二心なく思いつかせ、聊かも非義の政道これ無き則は従い、一旦勘気を蒙り、其の家を追い出せられても、我が非を省して終には心を通ず。是、敵忍を拒ぎ勝利を得るの本なりと云々。

安芸国毛利元就と周防国の屋形大内義賢の家老陶と合戦しけるとき、元就の陣中にて潜に評議すること陶の方へ速やかに聞こえて、謀ごと斉い難く、元就驚きて如何さま我が近習の者、敵へ内通するなるべしと云われければ、小早川隆景生年十六歳なりしが、是は元就の御側に常に侍りえる盲目あり、此の者敵へ内通すべし申す。元就、さあらば方便をかえて、味方の為に能事を悪しき様に人に語りて、陶が方へ知らせ欺きて然るべしとて、諸人に向かって云われけるは、陶若し兵を厳島の方へ出さば味方は敗軍すべきを、陶知らざりけりと云う。此のこ

と委しく陶が方へ聞こえければ、陶大いに悦んで、やがて大勢を厳島へ指し遣わす。元就これ聞きて、隆景以下の兵を引率して馳せ向かい、合戦して打ち勝ちけり。さて内通の者を穿鑿すれば、陶が兵士元就の陣中へ潜に来て、彼の盲目が家に忍び居たり。盲目は元就の近習に居て、密事を聞きて、彼の者に語り、ことごとく陶が方へ云い遣わしけるとなん。小早川よく忍利を知る故に、敵忍を拒ぐのみならず、味方の忍者となすものなり。元就、知将たる事、此に於いて知る。

十二

問。敵方の忍者を味方の城営へ入れざる徳と云うは如何。

問。主将忍術至極の理を知りたまい、士を撫て民を愛し、聊かも非法の政道なく、平生議論評唱して刹那も軍に怠りなく、無事の時弥々謹み深く、色に遠く、欲を退け、常々善を楽しみ、知徳ある人を求め、礼儀に深く、奴婢僕従までに憐み深く、其の家上下和睦して、義を以て集まり、礼を以て交わり、諸人狐疑の心なく、悪人は自ら退ぞき、義士は招かずして来たる。これ敵忍を拒ぐ本根なり。其の末に至って、敵忍を入れざる謀計、勝計すべからじ。これ又忍術の深理を知る故に亦敵忍を入れざるの謀ごとを知るなり。尉繚子に曰く、「遊説間諜自ら入ること無きは、正議の術なり」。遊説とは軍中をかなたこなたの虚説を云いて、兵士に疑いを起こさせ、敗亡さする謀ごとをなすなり。講義に曰く、「木は必ず蠹して後に虫生ず。人は必ず惑いて後に説入れる」。議其の正きを得る則は、守る所の者堅し。遊説間諜、何に自ら入らんや。太宗房元齢を任せ、謀議の資する所なり。男子有り、変に上る。太宗、立にこれを斬る。遊説間諜自ら入る無きなり。

又延文三〔五〕年、河内国赤坂の城に和田正武〔正氏〕、楠正儀が籠りし時、将軍方、国々の勢二十万騎にて囲みたり。此の時、和田和泉守政武〔正氏〕三百人にて五月八日の夜、一陣に進んだる結城が向かい城へ夜討に入りたり。数刻戦いて城内へ引きたる折りがら、結城が若党物部次郎郡司とて世に勝れたる兵四人あり〔物部郡

司と三人の部下」。兼ねて云い合わせて、和田が勢に紛れて城へ入りて火を掛けんとしたり。此の時、和田、楠、立勝居勝と云う忍術〔相図〕を以て紛れ入りたりし四人の者どもを則時にえり出して討ちたり。和田、楠、爰を先途と防ぎ守ると云えども、敵の大勢に退出して、城に火を掛け、金剛山の奥に引き籠りたり。元弘三年に千剱破の城に楠正成が籠りし時、北条高時入道の勢百万余騎、城の四方二、三里が程を囲んで昼夜責めたり。しかども中々落城せざりし。城中に水のたくさんなる様子を見て、如何さま、東の山の麓とに流れたる渓水を夜々に汲むかと寄手怪んで、名越越前守を大将として三千余騎、水の辺に陣を取りて、城より汲みに出るを今や今やと待ち掛けたり。楠は元来勇気智謀兼ね備えたる者なりければ、城中に水の用意、かねて卓散にしおき又強いて此の水を汲まんともせず。水防ぎける兵ども、毎夜に気を詰めて待ちけれども、終に汲しに出ざりければ、さては此の水汲まざりけりと、少し油断の躰を楠見澄まして、三百人城より夜討に出て、大いに勝って越前守より追討、旗幕まで奪い取りたり。此の時、楠夜討に出しける人数を、手分手組手配りて、堅く三手に分け備て出したり。正成も城の外、坂口に出て、太鼓を以て一二三の相図を定めて軽々と討ちて、太鼓の相図をきくとひとしく縦い、敵を討ちかえたりとも、捨てて引き取るべし、仕だるくして敵の忍者に紛れ入られ、或は付け入りにあうべからずと下知して、大いに利を得て、少しも危うき事なかりしと云々。是正成が智謀有りて忍利を知る故に、敵忍を拒ぐに賢し。いかに敵を大勢討取りたりとも、城を落とさざるか、或は危事ありては益なし。

忍利は軍法の極意たること必せり。武田信玄と越後の謙信と川中島にて合戦ありし時、村上義清、家来の侍三頭万事通路の約、亦裏切りの約を定め、降参させられたり。然れども信玄名将たるに依って、若し謙信、義清内談して或は裏切り或は内通の為に降人にして越たることもやと思われければ、川中島合戦の時も、彼の三頭の降人には押さえ備を一つ二つ置きたまうによって、裏切りすること叶わざりき。其の上、謀ごとに降参せば、謙信方へ通路なくては叶うまじと思われければ、川中島の川下の村に忍者を遣わしおかれけるに、案の如く、三頭の降人方より使いを以て謙信へ状を遣わしけるを、忍者道にて捕らえ、其の状を奪い取り、即ち使者をもからめて

信玄へ事の由を申し上げる。甲州へ帰陣あって、彼の降人三人を成敗ありしと云々。

十三

問。味方の戦に利無き時、其の威を失わずして再びもり反す徳と云うは如何。

答。それ合戦の勝負は必ず少勢多勢に依るべからず。唯、将の謀ごと賢く、天地人の三理に叶い、始めに勝ち、後に戦う時勝たずと云うこと有るべからず。然りと雖も、明将も自然に利を失うこと有り。此の如くの時、全く其の威を失わず、様々の方便を以て其の軍をもり返し、大いに勝をとる事、唯此の術にしく事なし。

異朝の譬を以て其の利を見るに、太〔大〕宋国と大元国と揚子江にて戦いける時、宋国の謀ごとに乗じて、大元の軍勢三百万人まで一時に亡びければ、太〔大〕元の老皇帝、気を屈し黙止されける処に西番の帝師と云うもの太〔大〕元王に申しけるは、臣智謀を以て宋国の四百州を頃〔傾〕くべしと云いければ、太〔大〕元王大いに悦びて曰く。卿が謀ごとを以て、我、若し宋国を亡ぼさば、必ず公を上天の下、一人の上に貴びて、代々帝王の師と仰ぐべしと約せられけり。是に因って帝師形をかえ、身を窶して、大宋国へ行き、江南の市に行き、年六十余りなる老人の子を多く持ちたるを尋ね求めて、三千両の金を与えて、彼が命を買う。さて宋国の帝都へ人を遣わして、今度揚子江の合戦に功ありし宋の上将軍伯顔、賈丞相、文煥等が事を都にて取りざたするを聞くに、若し伯顔、丞相、文煥等、此の勢を以て宋の世を傾けんとせば、掌をさすよりも安かるべしと人々云うを聞きて帰り、此の由を帝師に告げたり。其の時帝師、件の老人を呼びて、彼が股の肉を切り裂きて、呂文煥、伯顔、賈承相三人の手跡を学て、反逆等策の文を書き、彼が骨のあわいに収めて、疵を癒して後、知略の塩合一々云い教えて、宋国の城中へ行かしめける。帝師が案の如く、宋城の門番あやしみ、彼の老人を捕えて天獄の官に渡す。獄官、老人に何の故に爰に来たると問う。老人、帝師が教えの如く、一往には其の故を云わざるによって、後に水火の責めをなす。老人暫しは云わずして、其の責めたえ難き時に至って白状して曰く。我は是伯顔将軍、賈丞相、

呂文煥等が使いとして謀反与力の兵どもの方へ子細を相觸んために来たりたり。其の験是なりとて、彼の股の肉の中に隠し置きたる謀反など策の触状を取り出す。獄官、其の状を宋王へ上げ、事の由、有りの侭に奏じけり。宋王是を見聞て、さては疑うべきにあらずとて、右三人を将軍より呼び寄せて殺すのみならず、彼の廻文の当所の兵どもまで、残らず殺されりければ、宋国大いに内輪われて、宋王勢い衰えたる時なれば、しかじか一戦にも及ばずして終に敗亡しければ、大元の天下に成りたりと云々。委しくは太平記に見えたり。

十四

問。味方の反逆を早く知る徳と云うは如何。

答。軍法に、其の逆兆を知って早く両葉を去ると云えり。明将は常に忍法を用いて其の兆しを知り、前に備をして後ろの禍を拒ぐ。暗将は是を知らざるによって、禍藩屏の内に起って終に其の身を亡ぼす。人の主たらん人は、常に戦いを忘れずして忍法を捨て置かざる則は、敵すべき兆しを知って不意を討たれず、其の徳広大なるものや。

元弘三年〔一三三三〕に新田義貞、千はやの寄手たりしが、謀反を発して先朝より綸旨を給わって、虚病して本国上野の沼田の城に帰りて義兵を揚げんと評諚〔定〕とりのべたり。是をば知らず、相模入道京都へ加勢を上らせんとて、近国の兵を集めらる。其の兵粮の為にとて臨時の夫役を掛けらるるに、新田の庄、世良田には有徳の者ありければ、出雲介親連、黒沼入道を使いにて、五月の内に六万貫を出すべしと下知す。此の両使、世良田に至って譴責〔法外なことを責め行う〕す。これに依って、義貞士卒を遣わし両使を生捕りて討たす。それより義兵を起こして程無く鎌倉をも亡ぼしたり。相模入道、身虫の術を知らず、忽ち滅亡したり。

源義経はするどき大将なれば、頼朝常々心をゆるしたまわず。足立新三郎を義経に付けて京都に置きたまいて、義経の進退密計委しく聞見して、関東へ嗇に注進してけるによって、義経の謀計顕れて、本意をとげず。頼朝、

忍法を用いるによって、反逆を早く知って、敵のほこらざるに討伐を加うと云々。

又織田信長卿の御舎弟武蔵守〔信行〕殿は尾州春日井の郡、龍泉寺と云う所に一城を構えおわしけるが、信長公へ謀反を思し召し立給う。其の節、柴田権六と云う者を武蔵守どの方へ忍びに入れ置きたまうにより、権六清洲へ夜中に参り、御叛逆の様子委しく信長公へ註進す。即、権六をば夜中に龍泉寺に御帰しあって、其の後信長虚病して命かぎりなる由、披露あり。少し程へて、村井長門を御使にて、母公の御方へ仰されけるは、今度の某の病気は万死一生に覚え候。武蔵守に家督を譲り候うべし。母上より迎いを御遣わしあれかしと仰せければ、長門守、母公の御方へ参り、げにも実しく申し上げれば、母上信長の御病気、御大事と聞こし召しより、絶焦したまう事限りなし。重ねて申しけるは、老少不定の世の中、左様に悲しみ給うをも益なし。唯、痰々と申しければ、涙を押さえ、此の由、細々と武蔵守殿へ仰せ送られければ、願う所とや思われける。時刻を移さず、清洲へ着せたまいしかば、やがて信長公の御寝所へ、とくとくと申しければ、母上御同道にて御寝所へ入りたまう所に、山口飛騨守、長谷川橋介、河尻青貝、彼等三人兼ねて討手に仰せ付けられければ、御寝所の道ずれ廊下にて、即時に殺し奉りけり。

十五

問。味方籠城の時、後詰の大将と互いに通路の徳と云はは如何。

答。味方籠城のとき後詰の将と通路したき時か、或は兵粮などきれたる時、隣国の味方へ通路したき時は、忍びを用いずして叶わず。これ亦、上忍を用いる時は利在り。忍者の心を知らざる則は反って害をなす。

正成千破剱に籠城せし時は、京都に常々三十人の忍者を置きたり。忍びの至理を知る将は城内より忍者を出し、外の味方へ通路することはなし。尤とも危うき本なり。城外に味方を置きて相図を以て諸事を通ず。止めることを得ざるときは、城より出さで、叶わざる事もこれ在るや。敵の囲みを出るも、忍術の法なり。

天正三年〔一五七五〕の頃、三州長篠の城に家康公より奥平九八郎家正を籠おかれけるが、武田四郎勝頼、数万騎にて彼の城を打ち囲む。家正至剛の兵なれば、事ともせざりけれども、兵粮乏しければ、城中の粮を点検し見るに、当月の食を出ず。急ぎ此の旨、信長公へ注進し、後詰を請い奉らんと計りけるが、幾重ともなきかこみなれば、鳥ならでは通うべき様もなし。此の如くにては、終に涸魚の如く成るべきは案の内なり。いかがせんと云いける時、鳥井強右衛門進み出て、某、君命に替わり諸卒の難を救わんと申しければ、家正深く感じて其の意に任す。強右衛門申しけるは、此のかこみを出で得たらば、向うの山にて煙を揚ぐべしと約して出でけるが、「我が君の命ちに替える玉の緒を伺厭いけん武士の道」〔正しくは「我が君の命に代わる玉の緒を何いといけむ武士の道」で、鳥井強右衛門勝商の辞世の句である。城を脱出して二日目（天正三年五月十六日）に、三十六歳で磔刑にされた（『甫庵信長記』）〕と詠じて五月十四日の夜出でけるが、翌朝相図の煙を彼の山に立てしによって、城中大きに競いたり。さて強右衛門、信長公へ参り、件の様子を言上しければ、幾重ともなき囲みを出で、是まで来たる事、忠義と云い智謀といい、信長大きに感じたまい、時日をうつさず後詰有るべき由、仰せ含められ、強右衛門を帰したまう。強右衛門、長篠へ帰り、何とかして城内へ入るべき術もやと案じ煩い、方々と徘徊して見る所を、敵見付けて大勢集って終に強右衛門を搦め捕い、子細を尋ね問う。強右衛門、件の様子を少しも残さず語りけり。暫時有って、武田典厩、強右衛門が前に来て云われけるは、御辺のこと勝頼委細に聞き及びたまいたり。感じ思し召しの條、御辺同心に於いては一命を助け、所領をあてらるべしとの事なり。哀れ当家の臣となりたまえかしと云う。強右衛門申しけるは、忝き御意なり。如何さま其の御意次第と諾う。典厩悦んで曰く。其の義ならば御辺を頼み度こと有り。今晩、城戸の本まで行きて、城中の者を呼び出し云い給わんには、信長公へ敵する国々蜂起して、御手前にもてあつかいたまう故、当城後詰の事、中々成らず及ばず是非所なり。急ぎ城をあけ渡し、早速退散申すべきとの旨、御返事なりと云い候えと云う。強右衛門、安き義なりと領掌〔了承〕しければ、則強右衛門を高手ばかりを搦めて縄を付け、歩行の者十人ばかり相添え、城戸口へ夜に至って連れ行き

けり。城戸口になれば、高声に呼ばわりけるは、強右衛門こそ只今罷り帰りたり。信長公の御返事を申すべきと云う。城中の者ども喜び勇んで走り出で、先ず内へ入り候えと云う。強右衛門申しけるは、信長公の御意には、近日に後詰有るべきの条、心易くぞんじ、堅固に城を守り候えとの御事なり。此の旨家正へ申し上げ候え。我等(なと)敵へ捕われ、縄をかかり居る間、是、寂期の言葉ぞと云いけり。案に相違の強右衛門が云分なりければ、連れ行たるものども、則ち強右衛門を引き返し、勝頼の御前に引すえ、しかじかの様子を申し上げる。勝頼聞き召して、是義士なり。助けて敵へ返し候えと仰せられける。然れども、強右衛門、典厩と約を変じたる上は、生命仕まつるべきようなしと申し切りて、終にきられけるとなり。

強右衛門、城中より出でて信長公へ通じ、信長公家康公、後詰ありしによって、落城せざるのみならず、勝頼を討ちて大きに勝利を得たり。是、城中より忍び出でたる徳ならずや。

私に曰く。強右衛門、勇は勝れたりと雖も、忍術の謀計うすく、且つ深理を知らざるによって、惜しいかな、此の死難にあえること、返す返すも無念のことなり。

十六

問。治世をも乱す徳、其の理を知る則(とき)は乱れなからしむる徳と云うは如何。

答。忍法を以て治世を乱す理あり。其の淵源を知る則は更に乱れなからしむる事必ずせり。又、後醍醐後天皇、兵をおこさせたまい、平の高時入道を亡ぼし給い、天下一統に御治世ありし後、足利尊氏、新田義貞、武将互いに争い、心底に憤りを含み、威勢をあらそいける折節、尊氏卿の謀計に天皇の御局准后と申すは、大塔宮護良(おおとうのみや)〔底本は天台座主の時の名「尊雲」が使われているが、還俗して護良〕親王の継母にて、天皇無二の御寵愛なりし女中に金銀珠貨を潜に送り奉り、取り入り、義貞を讒言(ざんげん)し、天下の四民、天皇を背き奉る様になし、剰(あまつさ)え大塔宮をざん言して、鎌倉にて土のろうに入れ奉り、終に殺害し奉る。天下の武士、恨みを含むように謀って後、叛

逆して義貞と合戦に及びし時、天皇は義貞卿の義士たるをたのみ、義貞と共に比叡山に楯籠らせたまいしかども、武士どもは叡慮〔天子の考えや気持ち〕に感激せず、尊氏につく。よって官軍は漸々に薄くなって、義貞終に討ち負け、北国へ落ち行き、越前足羽の城にて流れ矢に当たりて討死したまう。一類、所々にて討たれしかば、難無く天下を尊氏に奪わる。尊氏卿は持明院を帝位に即け参らせ、旨を天下の武将に備わりたまう。是、武運のしからしむる所と云いながら、偏に准后という久の一の忍術を以て年々と謀って世を乱し、勝利を得たり。太平記の大概を見ては、右の意味知られ難く、条々に心を付け、熟読する則は、此の忍術を以て世を乱したること、顕然たり。此の謀計たることを万里小路中納言藤房弁楠正成なんど押し察しけれども、正成は恐れたるによって、諫言を奉ることは成し難し。藤房卿に密談して、則此の卿、天皇へ様々諫めたまいしかども、終に御用いなきによって、彼の卿は隠遁したまい、正成世を見限って湊川にて討死したり。

秦の世に当たって、帝驕りをきわめ、世上四民の恨みの忿りを含み、国々の諸侯、謀叛の萌ざしありし折から、陳勝と云うもの、諸国の海辺に出て網にかかって上がりたるいきたる魚を買い求め、木札に陳勝、王〔底本は「玉」〕たらんと書き付け、其の魚の口より腹中に押し入れて、亦海中へ放しけり。此の魚、数万の事なれば、亦漁夫の網にかかってあがり、諸々の肆に出でけるを買い求めたる者ども、此の魚の腹の札を見て、国々に奇異の思いをなしけるとかや。此の時に至って、楚項羽、漢高祖ともに討って旗を挙げ、終に秦を亡ぼしとなり。此の如く和漢とも治りたる代を乱世となす。此の忍術を弁え知る時は、其の萌ざしを知って、其の謀計にのせられず、治め静めるの理あることなり。

十七

問。国郡の広きを地焼の時、人数を用いずして残らず焼き立てる徳有りと云うは、先蹤ありや。

答。賀若弼が江南を平らげし時、江南に積み聚ぬる所の貨穀を、忍者を遣わしこれを焼く。江南衰敗す。亦、

高祖自ら瑪津を渡る時、項羽の府庫〔財宝、文書、品物を入れる蔵〕を焚きしも、忍者を以てす。凡そ火を発する時に、時日の習いあり。風の順逆、又は風の永く吹く、早く止むに伝受あり。加様〔斯様〕の理を能々熟得して、其の時所の宜しきに随い、忍者、手組手配りを能く定めて焼き立てる時は、いかほど広き国郡たりと云えども、多勢を用いずして焼亡する徳、勝計すべからじや。

十八

問。焼草を用いずして軍さ相図の狼煙、早速に高く揚げる徳とは如何。

答。忍法に狼煙、飛脚火等様々の相図の火方有り。味方と相図を定め置きて、火を以て通ずる時に至って、これら用ゆ。織田信長公、名古屋の城を林佐渡守に預けたまいしが、佐渡守、其の弟美作守柴田権六ら相語らいて、信長公御舎弟勘十郎殿を守り立てんと逆臣を企つ。此の事、信長公聞きたまいて、清洲の御居城より五十町ばかり東、石塚〔名塚〕村に要害を拵え、佐久間大学を入れ置きたまう。かくて八月二十一日より大雨打ち続き、多井に於いて川の水、夥しく出て、河波岸を没せり。去るは能き時節とや思いけん、同じく二十四日の朝がけに、未盛〔城〕より柴田権六一千余騎を卒しうち立、林美作守も千騎計にて打出し、両口より喚呼して名塚城へ推し寄る。彼の城は俄かに拵えたる事なれば、塀堀一重にして大敵を防ぐこと叶い難ければ、水練の上手を選んで清洲へ急を告げ奉れども達せざるやらん、更に御返事もなし。其の時、大学狼煙を挙げれば、信長公御覧あって、大学難義に及ぶと見えたり。明日は如何なる身ともならばなれ、今日に於いては信長合力せでは叶わじと打ち出し給う。然りと雖も、多井川の水、堤みを越えるばかり出て、渡したまうべき様も無かりければ、信長公河岸にてもだえさせたまうぞたのもしけれ。角て鉄砲、矢、さけびの声、敵味方の時の声、隙なく聞こえければ、我爰にありながら、大学を討たせなば、骸の上の恥辱なるべし。水に溺れて命を失うも、皆天命なり。爰を渡せと下知して御馬を川へ打ち入れたまえば相随う人々、我先にと打ち入れければ、一気に剛きはどておす〔土手押す〕

と云う事なきにや、難なく向いの岸に惣勢どっと揚がりける。

誠に宇治川の先陣も是には過ぎじと覚えける。柴田権六これを見て、究竟の兵千余騎にて海道を西むけに馬をはやめて馳せ来たる。林美作守も千余騎ばかりにて北に向ってかかり来たる。清洲勢わずかに七百余騎にも足らざるに、殊に川に労しければ、痛わしや。信長万死一生とぞ見え給う。去れども七百余騎を二手に分け、各心を合わして戦いければ、大勢なりといえども、信長公明将なれば、小勢に懸け立てられ、剰さえ林美作守も討れければ、柴田権六、林佐渡守も叶わじとや思いけん、終に八方へ逃げちったり。信長追討たまい、頭二百余り討ち取り、心地よしと悦びたまうこと限りなし。是、大学早速に狼煙をあげたりし徳によって万死を出たり。

十九

問。匹夫の士にて大身の寇讎〔仇敵〕を討つ徳と云うは如何。

答。忍術に隠蓑、隠笠なんど云う方便あり。敵の強弱逸好の品によって千変万化の術あり。暫く右の譬を云うに、伊豆国の住人曽我十郎祐成、同五郎時致は駿河国富士の欄野〔裾野〕井出の屋形、源頼朝卿の御陣に忍び入りて親の敵工藤祐経を討ちて名を天下に揚げしこと、皆忍術を以て年来の本意を遂げたり。然れども忍術たることを世上に人知らず。此の忍術と云うは、祐成が思いものに、相模国大磯の虎と云う遊君に多年相馴て曽我より通いけり。是は敵を討たん謀ことにて、強いて色に迷いたるにはあらず。其の心は大磯は海道すじなり。祐経〔底本は「祐成」〕、伊豆国より鎌倉へ通うなれば、常々大磯の虎が本に籠り居て、祐経もし遊君に馴ることあらば、虎にたより、其の遊君を以て忍び入らんと巧み居たり。案の如く、富士の御狩の時、手越の少将と云う遊女を祐経よびたり。是を聞き、ひとしく曽我兄弟、祐経が屋形へ忍び入りけり。内より少将戸を開きて、兄弟を呼び入れて討たせたりと云々。此れ等は世に知らざる所なり。此の兄弟敵を討ちしも、忍術たること瞭然たり。往古より近世に至って、忍術を以て大身の讎を報いし事、先蹤多し。限り無きに依り、其の一、二を見わすのみ。

【解説】

曽我兄弟の仇討については、『吾妻鏡（第十三）』の建久四年五月二十八日の条を参考にされたい。「隠蓑」「隠笠」については、『万川集海』に次のように記されている。

「隠蓑の術は陽中の陰である。陰忍の極意であり方法は画一ではなく口伝も深い。しかし隠蓑の術で忍ぶ時は、まず桂男、久ノ一などの陽術に頼り、また妖者術などで変化を付けて行う。これが定法である。この術で上手に忍ぶ時は、如何に要害堅固な城郭であっても必ず入れるが、これは秘密にしておくべきである。

笠術は心得が四カ条ある。（一）敵の城陣に初めて入った時、先ず雪隠、藪林、人が騒動している所、橋の下、屋根木の上などに隠れて状況を窺う事。（二）奥に入る智略の事。（三）敵に怪しまれた時の智略の事。（四）敵が急に追い付けば百雷銃、捕物惣摩久利などを投げつけて敵を驚かし、その間に逃げ退く事。」

二十

問。身の遁れる時無く、其の難を遁れると云うは如何。

答。忍理の秘密、其の時の宜しきに随い、急難を遁るる謀計区々なりと云えども、極めて秘事たるによって是に顕さず。第一忍道には剛臆の批判なし。いかように臆病者の名を得ると云えども、其の悪名を顧みず、讒言謀言を以て其の時難を遁れ、後道の勝利を得る事を肝要とす。惣じて戦軍のことに於いて、指当る所の剛臆を論ぜず、始終の勝を取る事なり。前に云う鳥井強右衛門なんどは此の理を知らず、先ず城中を出る時、主君と約束相図をなし置く。尾州より帰り来って城中に入る事成り難し。若し敵に捕われたらん時、敵の云えと言う如くに申すとも、実は此の通理に仕るべきの間、信長家康後詰のこと、近々御出馬と御心得候えなんど〔委細示し合わせ置きて、其の後は勝頼申すに随い仕えら〕申すものならば、行末、重畳、内間たらんに惜しいかな。忍理を知らざる故に、後道、主君の為にもならず、あえなく死刑にあいしこと、嘆くべき嘆くべき。所詮武士は忠勇謀巧の

四つに昼夜身を委ねて、軍法忍理の至極を学ぶべき者なり。

問。忍者の謀言を以て難きを遁れたる先蹤ありや。

答。越前国金崎の城の後詰に里見伊賀守を大将として瓜生一族寄せ、一戦に負け、敗軍せし時、瓜生判官が家子に瓜生太郎兵衛と云うものあり、戦場にて生捕られぬ。敵将師泰、彼に問う、後口に軍勢ありやと。太郎兵衛が云く、義治三千余騎にて木目嶽をかためたまうとなり。師泰、さては大事なり、是程勝ちたる軍に、なが追しては負けなんするぞとて引き返しぬ。先陣は木目嶽まで追い付きなんと云いしかども、彼の者の云うに仍て、是の如くなり、軍終って後、生捕りども本陣へ引具して帰りて、此の事をば余の生捕りに問うに、左無しと云う。師泰、不思儀に思いて此の事を太郎兵衛に問うに、彼が云く。我が申したるは偽りにて候。木目嶽までも追いたまわば、寄手皆亡ぶべければ、味方を助けんとて申したりと云う。師泰云いけるは、御辺偽りし故に敵を討ち残したは遺恨の次第なり。然れども御辺、謀ごと深く忠ある人なり。誰も弓矢をとる身は和との人のようなる郎徒をこそ恩を深くし、召しつかいたきことなりとて、其の事を感じ御辺一人を討たればとて、別事あるべきかとて、助けて仙山へかえしけり。残りの生捕りは誅せられしと云々。

又、越王勾践、会稽山〔会稽山〕にて呉王夫差に囲まれ危うかりし時、越の臣大夫稚を謀ごとにて西旋と云う美人と財宝とを呉王へ献じ、此の度の囲みを解いてゆるしたまわば、勾践ながく呉の臣たらんと申しければ、夫差これを許諾せんと云い、伍子胥諫めて、此の度殺さずんば永く呉の禍いたらんと申しけれども、太宰〔宰相〕嚭〔伯嚭〕と云うもの、越より賂いを請いて様々取り成し申すによって、呉王終に囲みを許しけり。其の後、呉王の斉の国を討ちける時、亦、伍子胥諫めて申しけるは、是を病にたとえば、斉はかゆがり〔痒み〕の如し、越は腹中の病なり、先ず早く越を討つべしと云いけれども用いずして、終に越の為に亡ぼされたり。

蜀〔底本は「唐」〕、呉、魏の両国互いに国を争いて戦を挑む。然れども魏国大軍なれば、たやすく勝つ事かた

し。故に呉の孫権の臣下、偽って魏国へ返忠をせんことを申し遣わしければ、魏の将これを聞きて謀と悟って、其の使いを禁めて〔投獄して〕申しけるは、呉国にて長臣孫権の心にたがい、閉門する由を聞きてより、定めて加様に申し来たるべしと、兼ねてより相待所に、何として遅く参りけるぞや、中々汝等が如き者にたばからるる我に非ずと云いて、既に死罪に行わんとする時、かの使いの士、からから笑いければ、魏の将申しけるは、いかに汝、我を謀りに来る程の者ならば、定めて呉国にても勝れたる勇士にてあらんと思いしに、さはなくして汝ほどの臆病者を越しけることよ。如何となれば、人の死に至っては憂う色ある事、人間の本心なるに、汝、今却って笑う事、これ本心を失のうたるものなりと申しければ、呉の使い大いに怒って、魏の将を睨んで云いけるは、士の死期に臨したると云わるること、口惜しき次第なり。我も死のかなしきこと、全く忘れたるにはあらず。然れども、笑うべき事あらば、死期と云えども笑われまじきや。弓箭を帯する程の者にあたわず、恥辱をかかせんと欲するものかなど申しければ、魏の将これを聞きて、只今死に望〔臨〕んで如何なれば某に笑い事ありやと尋ぬ。使いの士申しけるは、今云て無用の事なれども、士の恥を与えられん事、口惜しさに申す者なり。我今此の死刑に逢うこと、去り迚は笑うべき事なり。如何んとなれば、天下に大いなる三人の惑者あり。其の故は、先ず是程の大事を御辺のようなる疑い多き人を知らずして、此の事を申し遣わす我が主君惑者なり。亦、御辺疑いの心を生ましめ、跡かたなき心を実として我を殺す惑者なり。かかる惑人の所へ、まどい人に頼まれて使いに来たる吾、とりわけ大きなるまどい者なり。故に大の惑者よりして先に亡びたれば、次の惑者も頓て亡ぶべし。世に人の死する習い多しといえども、我が如くなる死をなす事、誠に類いあらじと思えば、図らず一笑をなして、只今恥を与えられ、口惜しき事に存ずと云えども、かかる身になれば、力及ばずと申しければ、魏の将、是に心を翻えして、其の使いの士を帰し、謀ごとにのせられ、戦いに負たりと云々。縦い、死に及ぶとも、計ごとを忘るる事なければ、必ず難を遁るる事、古今先蹤多し。